

大和川今池遺跡

# 大和川今池遺跡

大阪府埋蔵文化財調査報告 二〇一〇-一

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会



卷頭図版2  
2区全景



# 大和川今池遺跡

大阪府教育委員会



## 序 文

大和川今池遺跡は、大阪市・堺市・松原市にまたがる旧石器時代から近世にいたる複合遺跡です。昭和52年に発掘調査がはじまって以来、これまでに今池水みらいセンター・大和川高水敷整備事業・都市計画道路大和川線などの建設とともに、広域に調査が続けられてきました。

これまでの調査は、飛鳥時代に造営された前期難波宮から南に伸びる難波大道が検出されたこと、中世寺院や有力者の居館が発見されたことなどで知られています。

また、『日本書紀』崇神天皇条にある依網池は、遺跡の北西にあったと推定され、周辺を本拠とした依網連と依網屯倉の伝承は遺跡北方の大依羅神社・阿麻美許曾神社などにも残されています。

今回の調査では、古墳時代後期、奈良・平安・鎌倉時代の建物跡や区画溝などを確認しました。また、近世今池の形成過程の一端を明らかにすることも出来ました。あわせて、縄紋時代の打製石器、弥生土器、須恵器・土師器、瓦器、陶磁器、瓦などの多彩な遺物も見つかっています。

本調査を実施するにあたり、大阪府都市整備部南部流域下水道事業所、今池水みらいセンター、および地元の方々をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護政策に一層のご理解・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成22年8月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 野口 雅昭



## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した大和川下流域下水道事業に伴う、松原市天美西三丁目地内、大和川今池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査番号は、08010・09002である。
3. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査 西川寿勝を担当者とし、平成20年8月1日から平成21年5月31日まで実施し、遺物整理は調査管理グループ主査宮野淳一、同三宅正浩、副主査藤田道子を担当者とし、現地調査と併行してすすめ、平成22年8月31日にすべての事業を終了した。
4. 本調査の写真測量は、株式会社アスコに委託した。撮影フィルムは同社において保管している。
5. 遺物写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。その他の写真は、担当者が撮影した。
6. 出土遺物及び、記録資料は、本府教育委員会において保存・管理している。
7. 本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。
8. 発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
9. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、1060円である。

# 本文目次

はじめに	
例言	
第Ⅰ章 位置と環境.....	1
1節 地理・歴史的環境.....	1
2節 調査経緯.....	6
3節 調査方法.....	8
4節 基本層序.....	10
第Ⅱ章 調査成果.....	11
1節 1区の調査.....	11
2節 2区の調査.....	20
3節 拡張区（3区）の調査.....	34
4節 出土遺物.....	35
第Ⅲ章 まとめ.....	60
実測遺物対照表.....	61
図版	
報告書抄録	

# 挿図目次

図1 周辺遺跡分布図 .....	2
図2 大和川今池遺跡発掘調査報告一覧 .....	6
図3 これまでの調査と今回調査区 .....	7
図4 地図割図 .....	9
図5 基本層序 .....	10
図6 1区・拡張区（3区）遺構全体図 .....	13・14
図7 1区遺構平面・断面図1 .....	15
図8 1区遺構平面・断面図2 .....	16
図9 今池堤と下層溝断面図 .....	18
図10 1区遺構平面・断面図3 .....	19
図11 2区遺構全体図 .....	21・22
図12 2区遺構平面・断面図1 .....	23
図13 2区遺構平面・断面図2 .....	26
図14 2区遺構平面・断面図3 .....	27
図15 2区遺構平面・断面図4 .....	28

図16	2区遺構平面・断面図5	29
図17	1・2区上層遺構と今池断面模式図	31
図18	拡張区(3区)上層・下層遺構図	33
図19	打製石器	35
図20	鮫齒と石鎌	35
図21	弥生土器	35
図22	古墳時代の土器	37
図23	石製品	38
図24	溝2-11出土土器	38
図25	大土坑2-1出土土器	39
図26	飛鳥時代の土器	41
図27	奈良・平安時代の須恵器1	43
図28	奈良・平安時代の須恵器2	44
図29	縄釉陶器	44
図30	奈良・平安時代の土師器	45
図31	土坑2-2出土土器	46
図32	中世の土器	48
図33	中国製磁器	49
図34	土坑1-1出土土器	50
図35	土坑2-15出土瓦器	51
図36	金属製品	51
図37	近世の陶磁器	52
図38	軒瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦	54
図39	平瓦1	55
図40	平瓦2	56
図41	井戸瓦	57
図42	今池埋土出土印判手皿	58
図43	今池埋土出土統制陶磁器	59
図44	今池埋土出土12.7mm銃の薬きょう	59

## 図版目次

巻頭図版1 1区・拡張区(3区)全景

巻頭図版2 2区全景

- 図版1 1区上層遺構・今池堤
- 図版2 1区全景
- 図版3 1区今池南堤下層溝
- 図版4 1区東南部の遺構群
- 図版5 1区検出掘立柱建物
- 図版6 1区検出井戸

- 図版7 1区検出溝  
図版8 1区検出土坑ほか  
図版9 1区井戸掘削状況  
図版10 拡張区（3区）  
図版11 2区上層遺構・今池堤  
図版12 2区全景1  
図版13 2区全景2  
図版14 2区今池堤下層溝・土坑群  
図版15 2区遺構群1  
図版16 2区遺構群2  
図版17 2区遺構群3  
図版18 2区今池北堤下層溝  
図版19 2区遺構群4  
図版20 2区検出土坑1  
図版21 2区検出土坑2  
図版22 2区検出土坑3  
図版23 2区検出土坑4  
図版24 2区検出溝  
図版25 2区検出井戸  
図版26 2区井戸掘削状況1  
図版27 2区井戸掘削状況2  
図版28 2区井戸掘削状況3  
図版29 2区井戸枠構築材1  
図版30 2区井戸枠構築材2  
図版31 石製品・金属製品・弥生土器  
図版32 古墳時代後期の遺構出土土器  
図版33 古墳時代後期の遺構出土土器ほか  
図版34 古墳時代後期の須恵器  
図版35 飛鳥時代の須恵器  
図版36 飞鳥時代の土器・奈良・平安時代の須恵器  
図版37 奈良・平安時代の須恵器  
図版38 緑釉陶器・常滑焼陶器  
図版39 奈良・平安時代の土師器  
図版40 奈良・平安時代の土器・中世の土器  
図版41 中世の土器1  
図版42 中世の土器2  
図版43 中世の中国製磁器・近世の陶磁器  
図版44 近世の陶磁器・中世の瓦  
図版45 中世の瓦・近世の井戸瓦・近世の墨書き土器  
図版46 近代印判手皿・統制陶磁器

# 第Ⅰ章 位置と環境

## 1節 地理・歴史的環境

### a 地理的環境

大和川今池遺跡は大阪府松原市天美西に位置する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。明治18年の仮製地形図によると標高は10~12mとされる。今回調査区は遺跡の中でも南よりに位置する。旧地表面は9.0~9.5m（T.P.）、これは10.3~10.8m（O.P.）にあたる。ただし、約500m隔たった大和川河川敷の調査でもさほど変わらない標高が得られており、なだらかに北へと低くなる地形である。

現在、遺跡の南側を東南から西北に西除川が流れる。これは1704年（宝永元年）の大和川付替え時に流路変更されたもので、それ以前は遺跡の東側を北流していた。旧地形は西半が低位段丘、東半が西除川の氾濫源になる。また、かつての西除川から分流した、いく筋かの開析谷もみられ、西除川が一時的に氾濫した痕跡を示すものかもしれない。段丘を北流する西除川（古天野川）や東除川は地盤の粘土層を深く侵食し、谷底平野を形成するため、段丘上には大小のため池によって灌漑がすすめられた。

このような開析谷の低地を利用した、ため池には谷筋をせき止めて数珠繋ぎに營まれたものと、条里区画に沿った方形のものがある。遺跡名の由来となった今池は後者の様相を示しており、比較的新しくできたため池と考えられていた。

遺跡の北側を西に流れる大和川はかつて、奈良県の亀の瀬を経て、大阪府柏原市で石川と合流した後、長瀬川・玉串川・平野川などに分流し、大阪平野を東南から西北へ流れている。その激しい氾濫痕跡はこれまでの中河内地域の発掘調査で数多く確認されている。

1704年にわずか八ヶ月で付け替えられた大和川はそれまで頻繁に発生した洪水を減少させた点で、大きく評価されているものの、あらたに出来た東西方向に長い川筋と堤防によって、西除川・東除川などの流水がさえぎられる問題も生じた。その結果、北流するいくつかの河川は大きく西に蛇行させて大和川と下流で連結、または南側堤防の外に落堀川を設けて、水の滞留を防いでいる。しかも、付替え以降、堺港の北側に注ぐ大和川は大量の土砂を港湾に流し込み、交易拠点として発展してきた堺のまちを変貌させたのである。

### b 歴史的環境

文献史料には遺跡周辺地域の地名が古くから登場し、歴史的景観について断片的に知ることが出来る。もっともさかのぼるものは『日本書紀』崇神天皇條にある依網池・薺坂池・反折池などの造営記事である。河内の狭山には田畠が少なく、池や溝を掘って民のなりわいをひろめたい、という天皇の意向による事業とされる。崇神天皇時代の伝承の信憑性はあまり評価できないとし

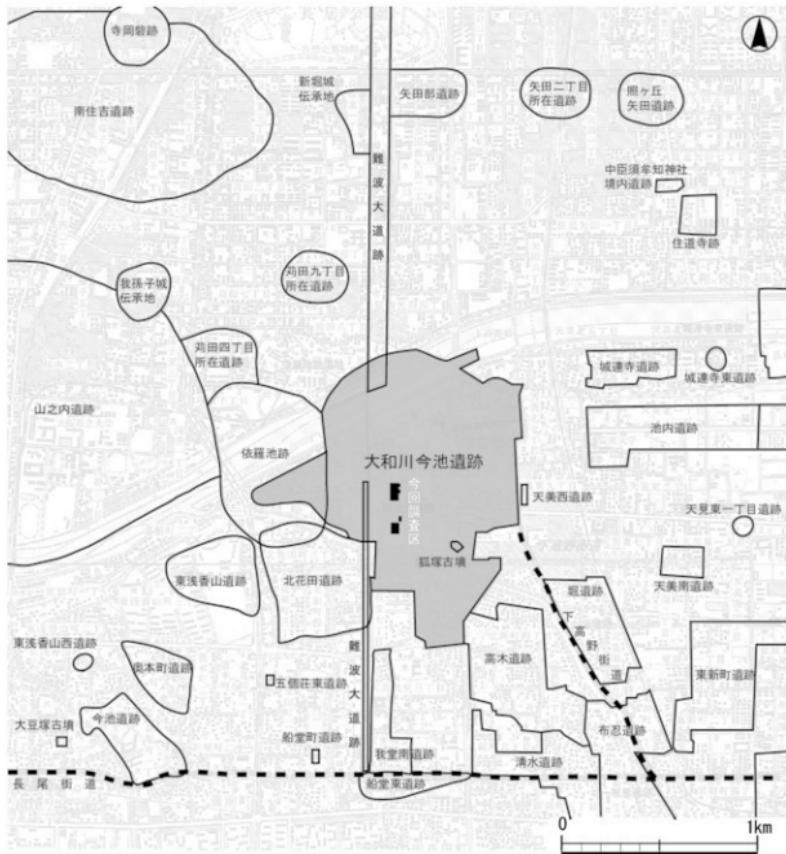


図1 周辺遺跡分布図

ても、このような土木事業が古くにさかのぼりえるのかは意見が分かれる。すなわち、前期前半の大型古墳には行燈山古墳（崇神陵古墳）・渋谷向山古墳（景行陵古墳）など、古墳の周りに堤を設けた水濠が存在する。つまり、大規模なため池造営はこの時期にもさかのぼらせることが可能だという意見である。

その一方、年輪年代測定法によって木樋の伐採年測定値（616年）から推古天皇時代につくられたとされる狭山池が最も古いという意見がある。狭山池の築堤技術は敷葉工法など、中国や半島の技術が色濃く、浸水による堤防崩壊を防ぐ技術は古墳時代前期までさかのぼらないというものである。古墳の水濠は埴丘土を盛り上げるために掘ったくぼ地にたまるもので、くぼ地にたまつた水は灌漑用水として流したことは出来ず、ため池造営とは性格が異なるというものだ。

これに対し、500年代初めの大王墓とされる今城塚古墳の墳丘が発掘され、墳丘下層に大規模な石組み暗渠による浸水対策が施されていること、基底部に黒色粘土ブロックによる通水層をつくることなど、堤防崩落を防ぐ技術が狭山池のつくられた時代よりさかのぼる発掘資料も蓄積されつつある。

さて、依網池は大和川今池遺跡の東に接する位置に推定されており、大和川付替えによってほぼ消滅したと考えられている。依網は仁徳紀四三年条に登場する「よさみあひご依網阿珥古」の本提とされ、依網屯倉も当遺跡周辺と推定されている。また、仁徳紀十四年の宮（難波高津宮）から南に大道をつくって丹比邑にいたったという記事がある。天美の地名は依網のなまつたものとも推定され、この地域がのちの多治比郡に属することとも合致する。しかし、史料研究では、依網屯倉の設置時期も、難波大道の設置時期も、仁徳天皇の四〇〇年代までさかのぼるとは考えられておらず、その伝承がどういう性格かは定かでない。

『日本書紀』は推古十五年（607年）に河内国に戸刈池・依網池を築造し、国ごとに屯倉をおくとする記事がある。先に示した理化学成果ではこの頃に狭山池造営も開始されていたことが知られ、灌漑用水や屯倉の整備が600年代前半に整えられたと推測する。また、その翌年に、帰還した遣隋使とともに斐世清らの唐人が飛鳥を訪れた際、導者として阿倍鳥子臣・物部依網連の名前が見える。難波から飛鳥への経路として、依網の地も整備されたのかもしれない。隋側の史料では、小德阿鞆台（阿部鳥か？）を遣わして、数百人を従え、儀仗兵を並べて、鼓角を鳴らして迎えた、とある。依網氏はこのころの警備や軍事にかかる氏族だった可能性もある。

『日本書紀』皇極元年（642年）条に、河内国の依網屯倉の前で翫岐等を召し、射獵を觀せる、とある。翫岐は亡国百濟の慈義王の皇子で、半島から来日していた。この記事から、依網屯倉には大王家の獵場があったとされる。獵場の手がかりとして、『日本書紀通証』（1748年発刊）に屯倉神社前の馬場池が推定されている。

狩獵はたんなるスポーツではなく、人馬で獲物を誘い込み、追い詰めて仕留める行為は大将首を擧げる集団戦に共通する。共同で鳥獣を追い込んで仕留める技能は体験を積まずには上達せず、狩獵の組織力、殺生と解体の覚悟や興奮は軍事教練に通じるものとされている。

ちなみに、『日本書紀』齐明天皇三年（659年）、唐に使者を送ろうとしたとき、使者に依網連稚子の名がみえる。また、奈良時代の皇族名に依網王、柿本人麻呂の妻に依網娘子の名があり、依網氏の勢力が垣間みられる。平安時代になると依網の名はみられなくなり、改姓した記録もなく、政権からは遠のいたと想像される。

難波大道は推古紀二一年（613年）に、難波より京に至るまで大道を置く、という記事があり、このころに官道の原形があったと推測されるが、発掘成果では確認できていない。難波大道がこの時代に存在したと考えるか、孝徳天皇時代の難波宮造営に伴い、その中軸線に対応して建設されたのかは意見の分かれるところである。孝徳天皇白雉三年（652年）、処々の大道を修理する、という記事より、大化の改新直後に難波大道が既に完成していたことは、同時期の土器を伴う

幅約17mの道路状遺構が当遺跡から発見されたことによって、ほぼ確定的となっている。その後、東西に伸びる松原市域の大津道（長尾街道）推定地でもこの時期の道状遺構から飛鳥時代の土器が発見されている。

なお、都が長岡、平安と山背国に移ると、難波から南に降る大道の役割も低下したと考えられる。廃絶後の難波大道は道路側溝に沿って南北方向の大畦畔が作られ、条里に基づいた地割がなされた耕作地となった。しかし、大道の痕跡は東西にのびる大津道（長尾街道）とあわせ、摂津と河内の国境を示すものとして認識されていたようだ。さらに716年に和泉監に設置され、国境は25年で廃止されるものの、757年より、大道の位置は摂津国住吉郡と河内国丹比郡との境として、重要な役割を果たしている。

#### c 発掘成果より

大和川今池遺跡周辺には数多くの遺跡が存在し、発掘調査の進展に伴って、その成果より、これまでにも歴史的環境復元がいくつか試みられている（図1）。もっとも古い生活の営みとしては、後期旧石器時代のナイフ形石器が大阪市長原遺跡・瓜破遺跡・遠里小野遺跡、堺市南花田遺跡、松原市清堂遺跡・上田町遺跡、八尾市八尾南遺跡など、各所で発見されている。いずれも、遺構が明確ではなく、生活の実態はよくわからない。当遺跡を含め、縄紋～弥生時代の打製石鎌や石槍も同様に確認されており、広域的に狩猟・採集をつづけた集団があったと考ええる。

弥生時代になると泉州や南河内にも、長期間継続的に営まれた集落が発展するようになり、撲点集落を中心とする衛星的な集落の勃興があり、水田開発が急速に進むと考えられている。付近の撲点集落として、西に堺市東浅香山遺跡、東に大阪市瓜破北遺跡・長原遺跡、南に松原市河合遺跡などが知られる。ただし、大和川今池遺跡とその周辺の弥生時代の遺構・遺物は散在的で、それ以前の時代同様、集落の発展は遅れたのかもしれない。

ところが、古墳時代になると周辺の遺跡数は増加し、当遺跡でも各期の遺構・遺物が発見されるようになる。古墳は百舌鳥古墳群・古市古墳群が東西に並び、わが国有数の巨大古墳群を形成するものの、松原市域から堺市美原区城は空闊となる。また、北側の大阪市長原遺跡では150基以上の小規模古墳が四世紀から六世紀にかけて造営されている。当遺跡の南には狐塚古墳が存在し、周溝の一部が確認されている。その東側の高木遺跡にも三基の古墳状の高まりが明治の測量図に記録されているがすべて破壊されたようだ。大和川河川敷の調査（その5）ではV期の円筒埴輪や形象埴輪片がみつかっており、付近に古墳があったのかもしれない。

また、当遺跡の最初に行われた西端の調査では六世紀頃とされる鉄滓や鉄片が確認されており、特筆できる。鍛冶遺構は見つからなかったものの、フイゴ羽口が見つかった調査もあり、鉄製品の製作や修理工房があったのかもしれない。

飛鳥・奈良時代の遺構・遺物も散在的で、道路状遺構に飛鳥時代中頃の土器が含まれることよ

り、当遺跡北側の道路周辺に集落の存在が推測できる。奈良時代には東に瓜破廃寺が、南の堺市南花田遺跡で斎車や人面墨書き土器が出土、長曾根遺跡では大溝が発見されている。長曾根遺跡の大溝は幅約4.5mで、南北ほぼ直線的に伸びる。流水堆積ではなく、船を引く運河と推定され、開削は五世紀後半にさかのぼる可能性もある。

飛鳥時代のはじめに狹山池が成立したことにより、多治比郡（多治比評）内には用水網が急速に整備され、段丘上の水田化が進んだと考えられる。しかし、水田化の実態については不明瞭である。遺跡周辺の旧地形は条里制地割が明瞭で、その起源は奈良時代から平安時代までさかのぼるともされる。とくに、平安時代には当遺跡をはじめ、松原市堀遺跡・高木遺跡・池内遺跡から遺構や遺物がまとまって発見されており、集落が発展すると考えられる。

奈良時代も後半になると、律令制の弛緩や班田制の行き詰まりにともない、田畠の私有化が進んだとされる。『続日本紀』は承和三年（836年）、丹比郡の荒廃田十三町を皇太后の後院領とした記録を残す。これが、付近の荘園化を示す初出例である。このような賜田のほかに、地域民の墾田開発による私田の記録もある。松原市矢田では地域民が開墾した六町八反の田畠が名目に石清水八幡宮に寄進され、矢田荘として安堵をうけたことが、八幡宮に残る承平六年（936年）の記録に残されている。

また、有力寺院による大規模な墾田は広隆寺による松原荘や、西琳寺による高木荘などが知られる。先に示した後院領も大半が醍醐寺の恵賀荘にされたようだ。残念ながら、天美周辺の荘園化動向はわからないものの、周辺で平安時代以降の集落が発展することを考え合わせると、自立的な農民による墾田が活発化したとも考えられる。その結果、鎌倉・室町時代になると、当遺跡北側には土豪の居館や禅宗寺院と思われる堂（觀音堂廃寺）が成立するようになる。

天正十年六月（1582年）、柴田勝家を破って、大阪を手に入れた秀吉は早速河内の太閤検地による新たな課税体制を確立しはじめる。南河内では石川郡にあたる河南町加納と、錦部郡にあたる河内長野市天野山の検地帳・水帳が現存している。その後、河内国では文禄三年（1594年）に長束正家によって再度、検地が実施されている。検地では水田面積をより厳密に算出するため、土地交換などによる水田区画や畦畔の改修を伴う場合が推測される。水田遺跡から該当期の陶磁器が出土する場合が散見され、関連が注目できる。

さらに、江戸幕府の時代になると当遺跡周辺は油上村・芝村耕作地として旗本小出主計の支配下に置かれ、大和川付け替え後は川越藩（のちに山形藩・館林藩に転封）秋元但馬守が管理、一部は狹山藩北条遠江守が管理した。1704年の大和川付け替えに伴い、西除川流路変更で水利に変化が生じている。また、水田よりも綿作や菜種栽培の記録が目立つ。大和川今池遺跡では基本的に近世にさかのぼる水田耕土が確認されているものの、今池の築造とあわせ、近世景観の変化に興味がもたれる。

## 2 節 調査経緯

大和川今池遺跡は昭和47年の「大和川下流西部流域下水道今池処理場（現今池水みらいセンター）」建設工事に先立つ試掘調査で発見された。試掘成果を受けて、翌年に大和川今池遺跡調査会によって、処理場施設建設に伴う調査が継続的に実施されている。遺跡調査会は昭和57年に解散し、大阪府教育委員会・松原市教育委員会・（財）大阪府文化財センターがその後の調査を実施してきた（図2・3）。

今回は大阪府土木部の依頼による、処理場内に建設した水処理施設の増設に伴う調査である。この施設は昭和61・61年度と平成13年度の調査区上に建設された施設の東側に増設されるもの

番号	刊行	取緒書名	調査・編集機関
1・2	1979	「大和川・今池遺跡」 第1地区発掘調査報告	大和川・今池遺跡調査会
	1979	「大和川・今池遺跡」 発掘調査資料その4	大和川・今池遺跡調査会
3～5	1980	「大和川・今池遺跡Ⅱ」 第3・4・5地区発掘調査報告	大和川・今池遺跡調査会
	1980	「大和川・今池遺跡」 発掘調査資料その5	大和川・今池遺跡調査会
	1980	「大和川・今池遺跡」 発掘調査資料その6	大和川・今池遺跡調査会
7	1981	「大和川・今池遺跡Ⅲ」 第6地区・「古道」発掘調査報告	大和川・今池遺跡調査会
10～13	1983	「大和川今池遺跡発掘調査概要」	大阪府教育委員会
	1984	「松原市遺跡発掘調査概要」 昭和59年度	松原市教育委員会
14～16	1985	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅱ」	大阪府教育委員会
17	1986	「大和川今池遺跡発掘調査概要」	大阪府教育委員会
	1986	「松原市遺跡発掘調査概要」 昭和60年度	松原市教育委員会
	1987	「松原市遺跡発掘調査概要」 昭和61年度	松原市教育委員会
18	1988	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅳ」	大阪府教育委員会
19・20	1988	「大和川今池遺跡発掘調査概要V」	大阪府教育委員会
	1988	「松原市遺跡発掘調査概要」 昭和62年度	松原市教育委員会
21	1989	「松原市遺跡発掘調査概要」 昭和63年度	松原市教育委員会
22～24	1990	「大和川今池遺跡発掘調査概要VI」	大阪府教育委員会
25～27	1990	「大和川今池遺跡発掘調査概要VII」	大阪府教育委員会
28	1991	「大和川今池遺跡発掘調査概要VIII」	大阪府教育委員会
29～31	1992	「大和川今池遺跡発掘調査概要IX」	大阪府教育委員会
	1992	「大和川今池遺跡X」「南花田遺跡VI」	大阪府教育委員会
32	1993	「大和川今池遺跡発掘調査概要XI」	大阪府教育委員会
33	1995	「大和川今池遺跡発掘調査概要 XIII」	大阪府教育委員会
34～36	1996	「大和川今池遺跡発掘調査概要 XIII」	大阪府教育委員会
37	1997	「大和川今池遺跡発掘調査概要 XIV」	大阪府教育委員会
37	1998	「大和川今池遺跡」 大阪府埋蔵文化財調査報告 1997-1	大阪府教育委員会
38・39	2000	「大和川今池遺跡（その1・その2）」 大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書1	(財) 大阪府文化財調査研究センター
40・41	2001	「大和川今池遺跡（その3・その4）」 大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書2	(財) 大阪府文化財調査研究センター
42～44	2002	「大和川今池遺跡（その5・その6・その7）」 大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書3	(財) 大阪府文化財調査研究センター
45～48	2005	「大和川今池遺跡」 大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-4	大阪府教育委員会
49～51	2008	「大和川今池遺跡」 大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-7	大阪府教育委員会
52～54	2009	「大和川今池遺跡」 I 難波大道の調査	(財) 大阪府文化財センター
55～60	2009	「大和川今池遺跡」 II	(財) 大阪府文化財センター
本書	2010	「大和川今池遺跡」 大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-1	大阪府教育委員会

図2 大和川今池遺跡発掘調査報告一覧（番号は図3に対応）

で、南北に連なる沈殿ろ過槽に汚水をくぐらせて、処理する施設である。

また、施設建設予定地の中央は旧今池と重なる。これまでの調査では、今池掘削に伴って、それ以前に形成された遺構面が削平されていることが確認されており、今回は調査区域に含めなかつた。したがって、調査区は南北2ヶ所に分かれ、南側を1区(2100m<sup>2</sup>)、北側を2区(3500m<sup>2</sup>)

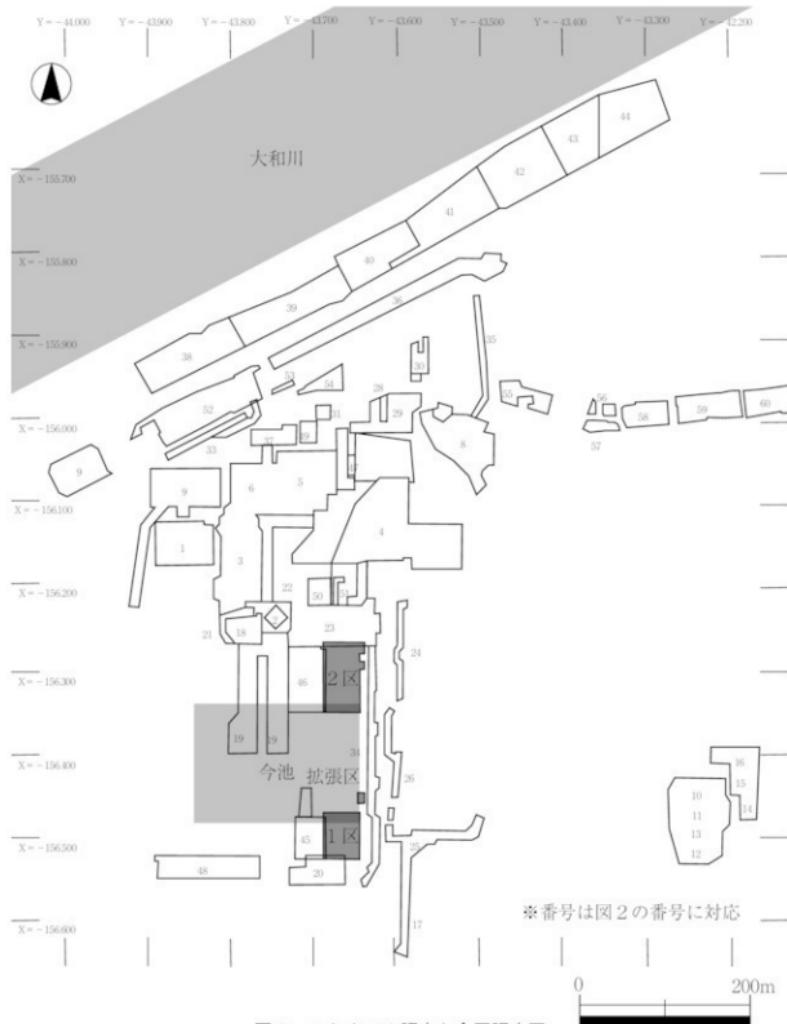


図3 これまでの調査と今回調査区

とした。さらに、1区の北東で今池による削平が及ばない地域を確認したため、南北12m、東西8mの拡張区（3区）を設定した。

現地調査は平成20年8月に着手、翌年5月に終了した。遺物整理作業は現地調査と併行して開始し、平成22年8月に終了した。

今回調査区は平成13年度調査の南区・北区と西側が接する。北側は63年度調査のG区と一部が重なり、南側は62年度調査B区と一部が重なる。東側についても、近接する部分が平成7年度1区として調査されており、周囲の状況はおおよそ把握されていた。

調査地周辺は戦後まで水田耕作が営まれていたが、昭和50年代まで、養鶏場や松原市の産業廃棄物仮処分場として利用されてきた。下水処理場用地となってからも、各施設建設で発生した土砂や廃棄物の仮置き場となっていた。このため、発掘調査前に旧地表から4m近い盛り土があり、調査区の南北と東側は矢板を打設して、これらの客土を搬出した。

### 3節 調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分を実施している（図4）。第I区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。大和川今池遺跡はF5区内にある。

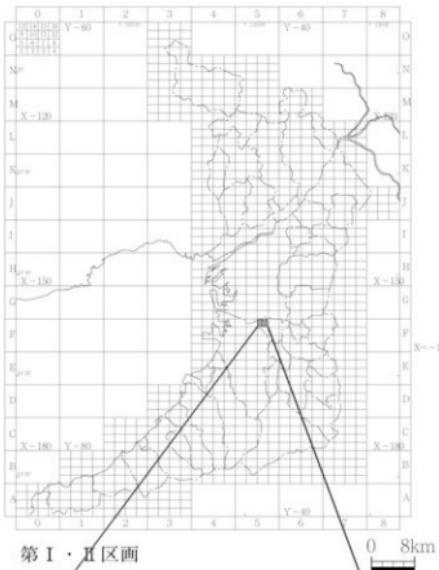
第II区画は第I区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。大和川今池遺跡は15区にある。

第III区画は第II区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回調査地は1区が17E・17F区内、2区が17A・17B区内、拡張区（3区）が17E区内にある。

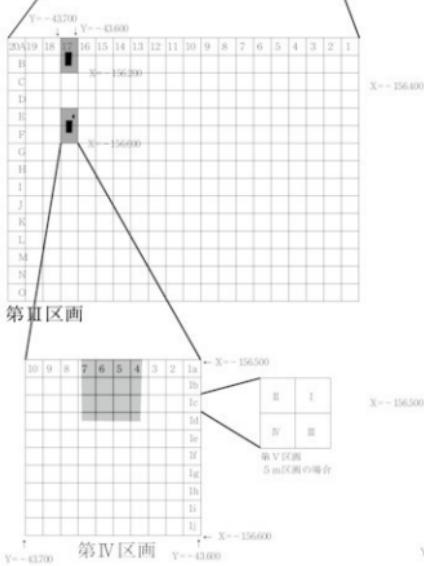
第IV区画は第III区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。例えば、今回調査区の拡張区（3区）はF5-15-17E-3fはじめ、4f・3g・4gなどと表すことができる。

特記すべきこととして、平成15年度より座標値が国際基準に基づく新座標（世界測地系）に変更されたことである。それ以前に調査されている座標値は南に約350m、東に約340mずれる。本文中の北は座標北を示し、磁北は西に $0^{\circ} 15'39''$ 振る。

検出された遺構は航空測量によって1/20で迅速に図化を行った。航空写真測量は平成20年度に三回、平成21年度に一回、四回に分けて行なった。地区割りは水みらいセンター内の3級基準点から調査区周縁に4級基準点を設けて実施、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。



第 I · 直区画



第五回



図4 地区割図

#### 4 節 基本層序

これまでの調査では旧耕土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構が切り込まれていた。よって、本調査は旧耕土までを機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めた。また、1区北側と2区南側は今池堤体の下半部が遺存しており、この部分は人力掘削によって、実態を調査した。

基本層序は①旧耕土が黒褐土、②遺物包含層が茶褐土、③地山が黄褐粘土で、平成13年度調査報告の②遺物包含層、10YR6/1・10YR6/1+10YR4/4・10YR5/1などの褐灰色粘土、③地山10YR7/8黄橙色粘土に対応する（図5）。また、2区西半は部分的に遺物包含層がいくつかの整地土層などに分層でき、この部分については遺構面の有無を確かめながら人力掘削した。逆に、2区東半は旧耕土までを機械掘削で除去するとほとんど遺物包含層が形成されず、削平を受けた地山面となり、遺構・遺物もまばらであった。

旧耕土は現代までの水田耕作に伴うもので、その直下に0.2~0.5m程度の水田床土がある。1区北側と2区南側は水田耕土がとぎれ、幅約6mの今池堤が検出された。概して、水田床土である遺物包含層は0.5m以下で、砂利を含む灰褐粘土、茶褐粘土である。元来、地表面はもう少し高かったのだろうが永年にわたって流出し、古い遺構ほど上半が失われている。

また、地山は1区がなだらかに北に低く傾斜し、2区が東に高く西に低い。地山面は約2m掘り下げるとき、直径10cm以上の円碟を多数含む砂利層があり、その下は植物遺体を含む砂層・粘土層・砂利層などが互層となる。

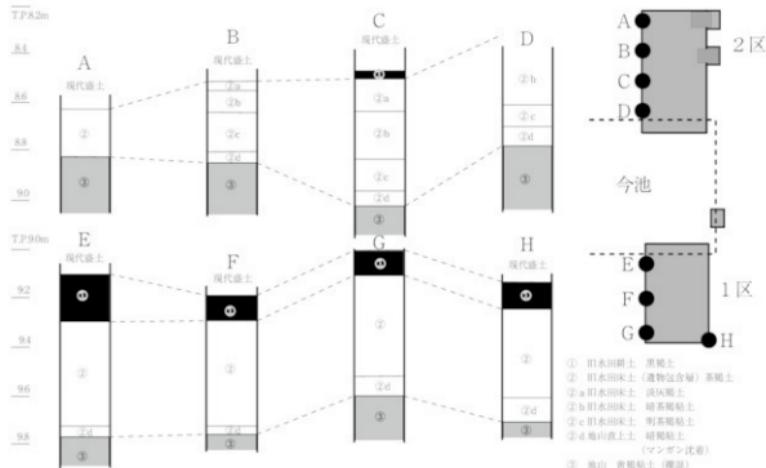


図5 基本層序

## 第Ⅱ章 調査成果

### 1節 1区の調査

1区は水田耕土下にいくつかに分層できる水田床土があり、遺物包含層を形成していた。その下に地山があり、古代から近世にかけての遺構が地山に切り込まれる形で重なって検出された。また、地山直上には無数のすき溝がみられ、そこには近世初頭の肥前磁器・陶器がふくまれ、地山面の上は基本的に近世に形成された地層であることが確認できた(図版1~9)。

#### a 1区南側の調査

1区の南側で建物一棟と柵列、土坑・井戸2基などが発見された(図6)。

掘立柱建物1-1は3×2間以上で、深さ0.2m程度の小穴が周辺に散在する(図7上)。建物の南半は調査区外へとのびる。柱穴の埋土は暗灰褐粘土で、大半が柱痕跡や抜き取りは明瞭でない。建物上面からは13世紀頃の白磁を含む土器片がみつかっている。

柵列1-1・柵列1-2は建物1-1の北側を覆う目隠し柵である(図7上)。ほぼ同規模で東西長8.8mを測る。柵列1-2の穴1-23以外、柱痕跡や抜き取り跡は明瞭でない。各柱穴の埋土は暗灰褐粘土・暗灰粘土・灰褐粘土による。

土坑1-1は建物の東北で発見された楕円形の土坑である。長径2.3m、短径1.5m、深さ0.25mを測る(図10)。埋土は黒褐粘土+地山粘土ブロックで黒色土器などが出土した(図34)。

土坑1-2・土坑1-3は建物の東側で発見された。東側は調査区外へと伸び、全容はわからない。土坑1-3は長径1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-43・土坑1-45は建物の西側で東西に並んで発見された(図7上)。土坑1-43は径約0.5m、深さ0.2mを測る。掘り底は平たく、埋土は上層が暗灰褐粘土で、下層が暗灰粘土、遺物はなかった。土坑1-45は径約0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-4は建物の東北で発見された楕円形の土坑である。長径2.1m、短径0.6m、深さ0.1mを測る(図7下)。埋土は暗灰褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-5は建物の西北で発見された方形の土坑である。一辺約1.0m、深さ0.2mを測る(図7下)。埋土は暗灰褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-8も建物の西北で発見された方形の土坑である。長辺0.9m、短辺0.5m、深さ0.25mを測る(図7下)。埋土は上層が暗灰褐粘土で、遺物はなかった。

井戸1-2は建物の西で発見された素掘り井戸である。上面は約0.4mの深さで、方形に掘りこぼむ。井戸の直径は0.8mで深さ2.2mを測る(図10)。埋土は上層が暗茶褐土で、下層は青灰砂・青灰粗砂など、遺物はなかった。底は湧水層に達しておらず、天水をためたものと

考える。

井戸1-3は建物の西北で発見された素掘り井戸である。上面は直径1.2mで深さ4.3mを測り、底面は湧水層に達していた(図10)。埋土は上層が暗茶粘土で、下層は暗灰粗砂・灰褐粘土など、遺物はなかった。二つの井戸からは遺物が発見されず、建物に伴うものかどうかはわからない。

#### b 1区中央の調査

1区の中央では南北溝、土坑、井戸などが発見された(図6)。

溝1-7は1区中央から北端まで、ほぼ直線で北に伸びる溝である。北側は今池によって削平されている。南は直行する溝1-10の手前で途切れる。現存長37.3mを測る。埋土は茶褐粘土で、流水の痕跡はない。遺物もなかった。

溝1-10は1区中央西側でみつかった東西に伸びる溝である。長さ3.0mを測る。埋土は茶褐粘土で、流水の痕跡、遺物もなかった。

溝1-2・溝1-3・溝1-4・溝1-5・溝1-6は1区中央で発見されたほぼ同方向に並ぶ南北溝である。上層から切り込まれた耕作溝の痕跡と考える。溝1-3は長さ11.3m、幅0.5mを測る。埋土は上層の耕土ブロックを含む暗褐粘土で、流水の痕跡はない。遺物もなかった。

1区では南北方向の耕作溝のほか、幅0.1m程度の東西方向の耕作溝も折り重なって発見されている。これらは水田耕作に伴うものか、その裏作の痕跡を示すものだろう。

土坑1-57は1区東端で発見された円形の土坑で、東側は調査区外へと伸びる。南北長1.7m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-58も1区東端で発見された円形の土坑で、東側は調査区外へと伸びる。南北長1.3m、深さ0.1mを測る。埋土は茶褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-82は1区中央で発見された不定形土坑である(図7下)。南北長0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は茶褐粘土で遺物はなかった。

土坑1-86は1区西端で発見された円形の土坑である。南北長0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は茶褐粘土で遺物はなかった。

井戸1-4は1区中央の西よりで発見された素掘り井戸である。直径は2.5mで深さ2.0mを測る(図10)。埋土は上層が青灰粘土と地山粘土ブロックで埋め戻されており、下層は灰白強粘土などの堆積があり、遺物はなかった。底は湧水層に達しておらず、天水をためたものと考える。

図6 1区・拡張区(3区) 遺構全体図

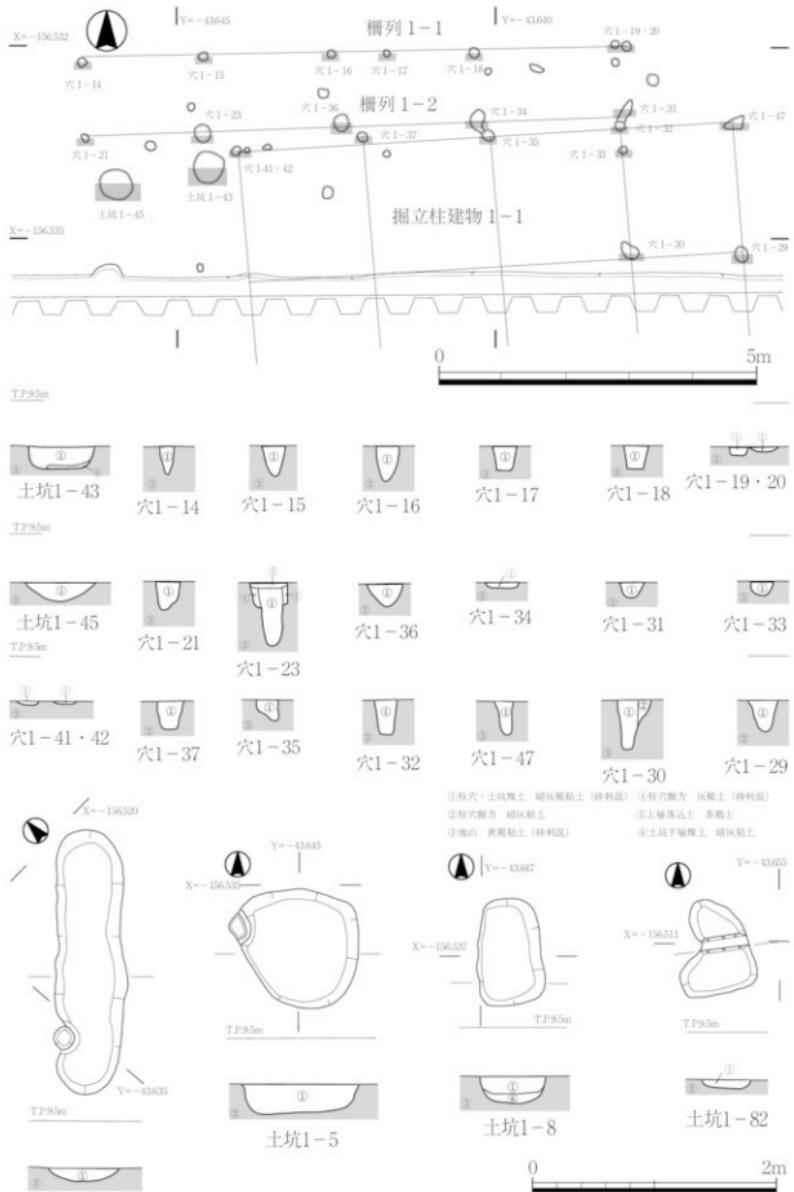


図7 1区遺構平面・断面図1

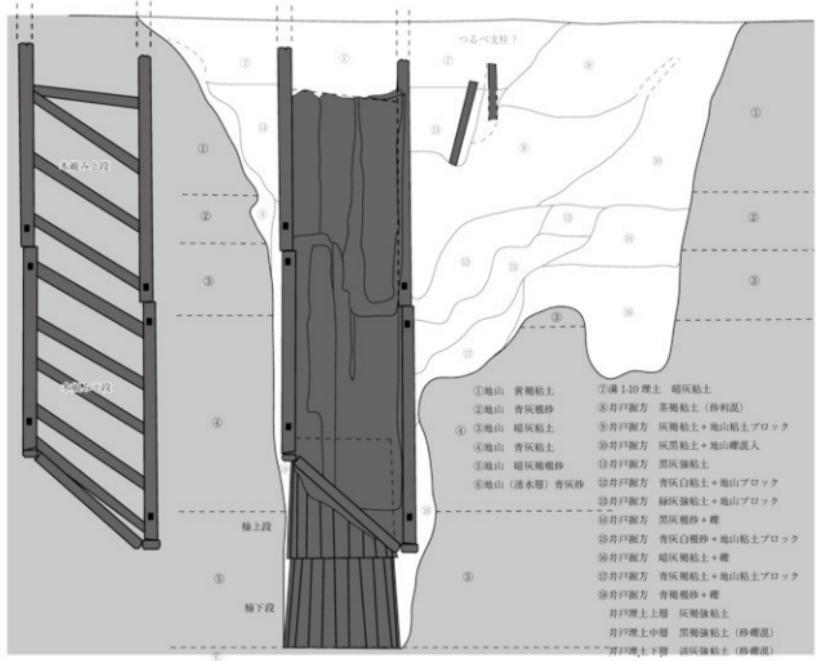
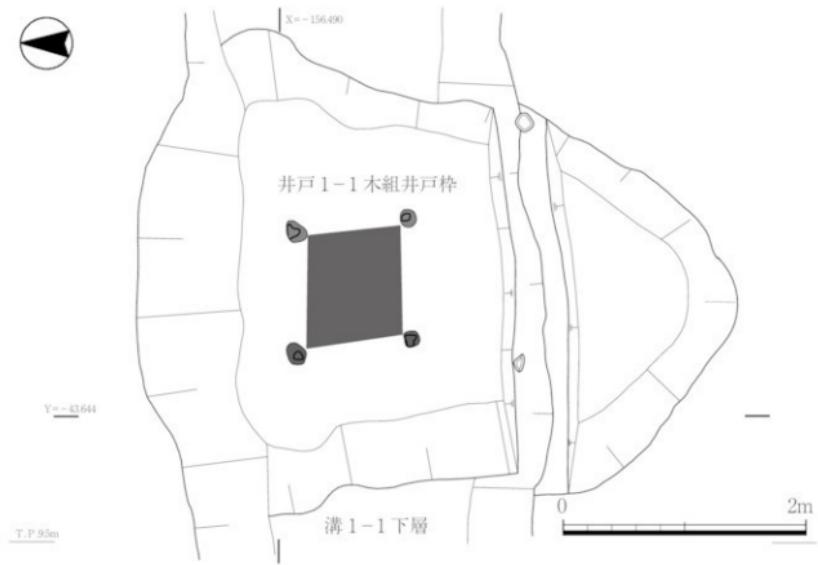


図8 1区遺構平面・断面図2

### c 1区北側の調査

1区北側では今池の堤1-11が検出され、堤1-1の南斜面に接する溝1-1上層と堤北側の池埋土から昭和前期の陶磁器や炭などが確認された。市街地からの廃棄物が戦後に持ち込まれ、投棄されたのだろう。あるいは付近住宅の戦災によるものかもしれない。堤1-1の北側は池底となる。今池は地山の黄褐色粘土層を幾分掘削するのみで、下層の砂利層まで削平されていない(図17)。池底の泥層は何度か浚渫されており、帶水による堆積物は0.3m程度である。泥層の上には薄い植物堆積層があり、最後に水が抜かれたときの堆積物だろう。

堤1-1を除去するとその下層から、溝・土坑、井戸などが発見された(図9)。

堤1-1の下層には並行する二条の東西溝とその挟まれた部分に畦畔状の土盛りがあった。坪境と考える。南側の溝はのちの堤1-1外側の排水を兼ねた溝1-1上層と重なる。

溝1-1下層は堤1-1を除去した段階で全容が判明した(図9)。今回調査区で長さ35m幅2.8m、深さ0.5mを測る。平成13年度に行われた今回調査区の西側部分で検出された002-SDに連続するもので、この溝は南に直角に折れ曲がることが確認されている。このときの調査では17世紀後半以降の陶磁器や小型の曲物、漆器腕、櫛などが発見されている。

また、今回調査区の東に近接して行われた平成7年度I区の調査では、溝1-10に接続すると思われる溝3が検出されている。このときの調査では古墳時代後期の土師器・須恵器などが多くつかっている。今回の調査では近世にくだる遺物は発見されていない。ただし、この溝の下層から井戸1-1が発見されており、井戸からは17世紀の陶磁器がみつかっている。したがって、溝は井戸が埋められた17世紀後半以降に掘削され、その後に今池の堤が形成されたことがわかる。

溝1-10は溝1-1の北側に並行する溝である(図9)。この溝の北側は緩やかに傾斜し、今池の汀線となる。堤1-1を除去した段階で検出された。今回調査区で長さ35m 幅1.8m深さ0.5mを測る。埋土上層は暗灰粘土で、下層には流水による薄い粗砂層が部分的に形成されていた。平成15年度に行われた西側部分の調査で検出された035-SDに連続するものである。東側の調査ではこの溝の続きの部分はかく乱などで明瞭には出来ていない。

溝1-11は1区東隅で発見された斜行溝で、北側は今池で削平され、東側は調査区外へとのびる。現存長11.5m、幅0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰褐色粘土による。1区の東に近接して行われた平成7年度I区の調査でこの溝に接続すると思われる溝6が検出されている。このときの調査でも遺物は発見されていない。

溝1-12は堤1-1の下層で発見された南北溝で北側は溝1-10と今池で削平される。現存長3.3m、幅0.1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰褐色粘土による。

土坑1-13・土坑1-14は堤1-1下層で発見された。土坑1-13は南側で溝1-1に取り付く、土坑1-14の北側は溝1-10に取り付く。土坑1-13は現存長1.3m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰褐色粘土による。土坑1-14は現存長1.8m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は

暗灰褐粘土による。出土遺物はなかった。

土坑1-92・土坑1-101は堤1-1下層で発見された。土坑1-101は上面を溝1-10で削平されている。土坑1-92は南北0.8m、東西0.5m、深さ0.2mを測る。

土坑1-101は南北1.3m、東西1.3m、深さ0.6mを測る。出土遺物はなかった。

井戸1-1は溝1-1の下から発見された木組み井戸である(図8)。南北4.9m、東西4.3mを測る。検出面から約0.3m掘り下げると井戸枠の支柱がみつかった。これにより井戸の内法は0.9m四方の方形であることがわかった。掘方は南北に長く、南側に足場状の段を築き、北側をほぼ垂直に掘り下げて井戸枠を設置したようだ。井戸枠の下層は二段の桶を重ねたもので、その上の四隅に長さ約2mの支柱を据え、各面に数本の桟木をホゾに差し込んで支えた井戸枠を二段重ねしている。角材による支柱の外側は幅約0.6m、長さ1.8mの杉板で覆い、井戸枠の中に土砂が流入することを防ぐ。しかし、井戸枠は南側が約0.8mにわたってずれ落ち、桟木が傾く。木組みの覆いや桟木は杉材を加工したもので、ホゾの周辺に「○」「×」「出」などの記号を墨書きする。また、「松□□平」墨書きもあり、寄進者名の可能性がある(図版29・30)。

井戸の掘方から出土した遺物はなかった。井戸枠内の黒褐強粘土層からは17世紀後半以降の肥前磁器の碗小片と陶器の皿小片が発見された。僅かな遺物であるが、この井戸が廃絶する時期は1704年の大和川付替え以降とわかる。

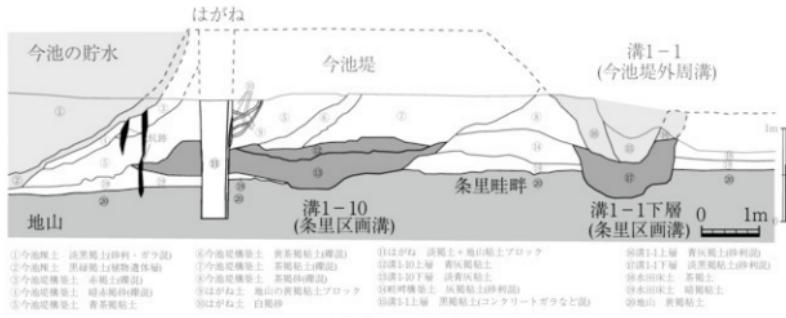


図9 今池堤と下層溝断面図

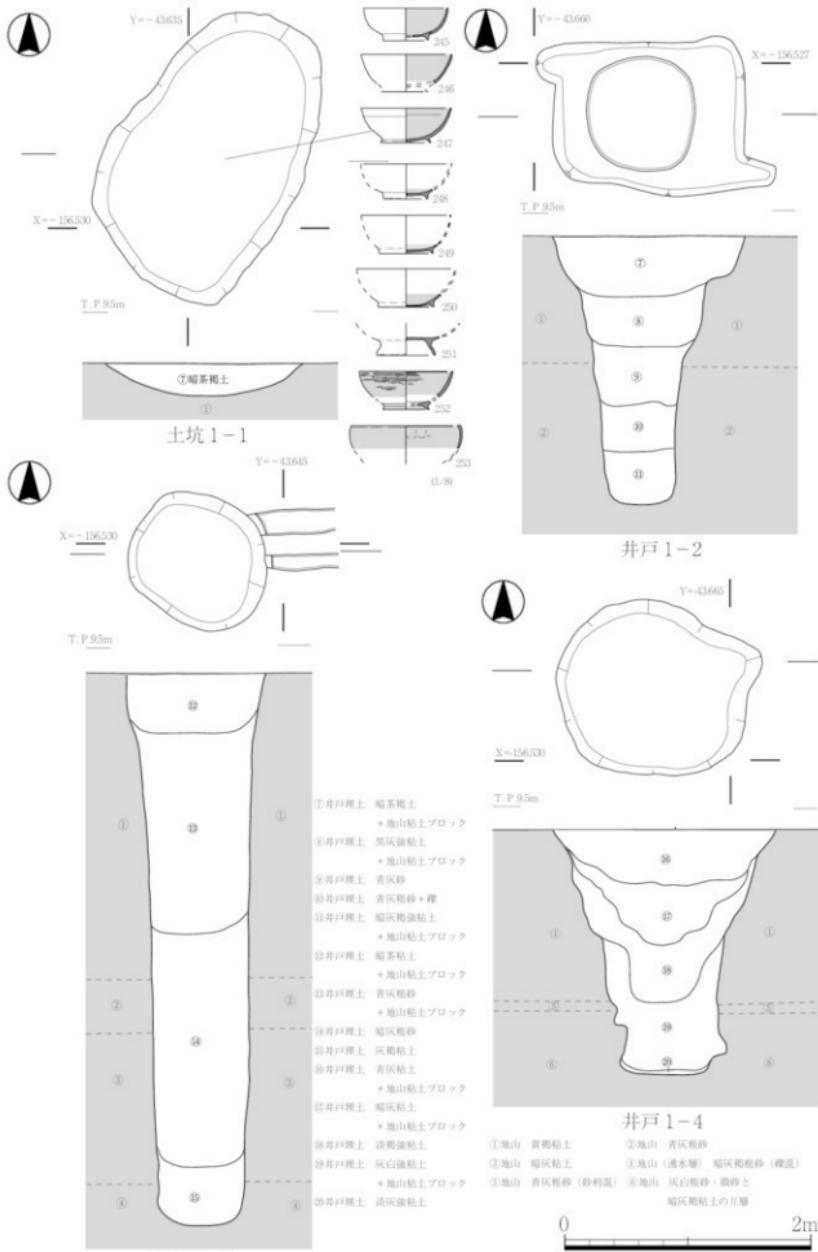


図10 1区遺構平面・断面図3

## 2節 2区の調査

2区も1区同様、旧水田耕土下にいくつかに分層できる水田床土があり、遺物包含層を形成していた。その下に地山があり、古代から近世にかけての遺構が地山に切り込まれる形で重なって検出された。また、地山直上から近世初頭の肥前磁器・陶器が確認されており、遺物包含層は基本的に近世に形成された地層であることが確認できる（図版11～28）。

### a 2区北側の調査

2区の北端では掘立柱建物、土坑、溝、落ち込み状遺構、井戸などが発見された（図11）。

掘立柱建物2-1は2区北西隅で発見された（図12上）。北隅の柱は昭和63年度調査E地区SB14で確認されていたもので、2間（2.7m）×2間（3.2m）が復元されていた。建物はさらに東西に広がる可能性がある。また、この建物の西に接する調査区外でも平成13年度の調査で2間（3.8m）×2間（3.9m）の建物が発見されており、一連の建物だった可能性もある。遺物は伴わなかったものの、昭和63年度調査E地区では奈良時代の建物群が確認されており、この建物も奈良時代のものと推定している。掘立柱建物2-1の南側には柵列2-1が伴う。柱間は2.0mで、建物に近接する。出土遺物はなかった。

土坑2-2・土坑2-3は2区北西隅で発見された東西に並ぶ土坑である。土坑2-2は南北長1.1m、東西現存長0.8m、深さ0.2mを測る（図13）。西側は削れて全容はわからないものの、埋土は砂利・炭混じりの黒褐土で、奈良時代後半の土師器杯・高杯・甕・鉢などがまとまって出土した（図31）。

2区北西隅では南西から北東にむかって36個の連続する土坑が見つかっている。個々の土坑は不定形で浅く、溝2-9の両側に並ぶ（図12）。出土遺物はなかった。以前からこのように不定形な土坑が規則的に並ぶ遺構を「波板状凹凸面」・「ポットボール」・「枕木状遺構」などと呼んでいる。これまでの研究では南は鹿児島から北は岩手まで、時期は古墳時代から近世までの報告があるという。近年、これらの一連の土坑について、牛馬の歩行痕跡が折り重なることによって形成されるという実例が牧場の馬道などで紹介されている。今回発見された土坑群も井戸2-2を基点に、ぬかるんだ粘土面に形成されており、その可能性が高い。したがって、井戸2-2のあった近世の牛馬耕の実態を示す道状の遺構と考える。そうすれば、近世の地表面は今回の遺構検出面とさほど違わなかったと考えることが出来よう。

斜行溝2-9は2区北側の中央でみつかった。現存長6.9m、幅0.6mを測る。埋土は茶褐粘土で、流水の痕跡はない。出土遺物もなかった。

溝2-10は掘立柱建物2-1の東側でみつかった。現存長13.9m、幅0.6mを測る。北側は調査区外に、南側はかく乱に壊されて明瞭でない。埋土は黒茶褐粘土で、流水の痕跡はない。



図 11 2 区遺構全体図

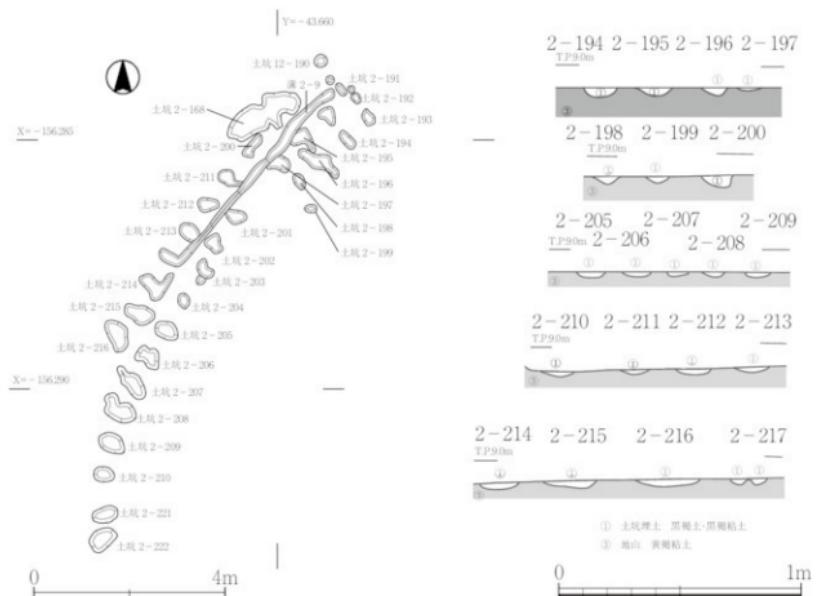
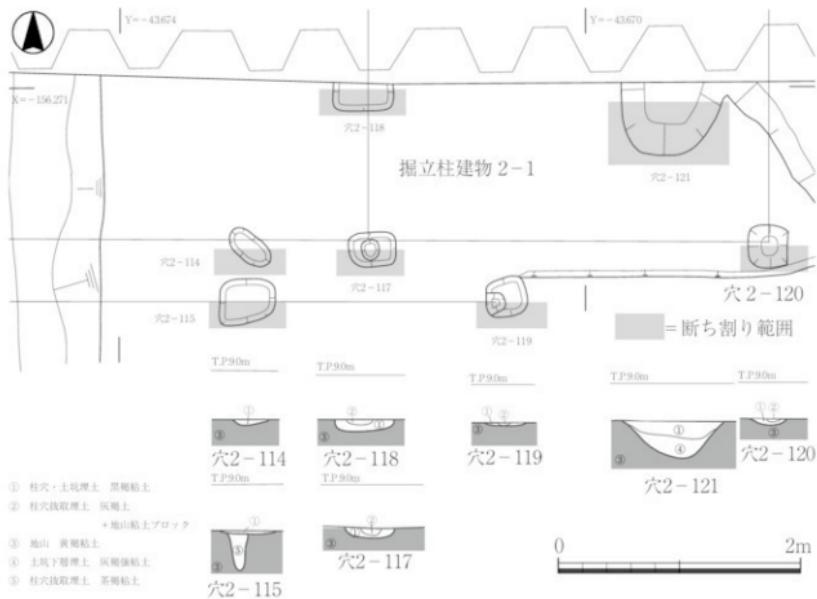


図12 2区遺構平面・断面図1

遺物もなかった。この溝は昭和63年度調査E地区のSD39・SD41に連続すると考える。このときの調査では奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

斜行溝2-11は2区の北側で南西から北東に横断する形でみつかった。現存長46.9m、幅3.6m前後を測る。埋土は黒褐粘土・灰褐粘土などで、一部に流水痕跡を示す細砂層がみられた。遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器を多く含むものの、瓦器片もみつかっている(図26)。溝の南側は地山がせりあがっており、土地の高低を利用して形成された区画と考える。溝の西側は平成13年度調査188-SDにつながる。このときは古墳時代後期の須恵器・土師器が数多く発見されている。さらに西側は62年度調査A地区のSD28につながる。このときの調査では古墳時代後期の土器とともに黒色土器もまとまって発見されており、6世紀頃に掘削されたものが、9世紀頃に廃絶したと捉えている。

斜行溝2-12は、斜行溝2-11の南に併行してみつかった。現存長25.0m、幅0.4mを測る。西側は地山面が低くなり、途切れる。東側は調査区外へと延びる。埋土は茶褐粘土で、流水の痕跡はない。出土遺物もなかった。

落ち込み状遺構2-1は調査区北西隅で発見された。厚さ0.2m程度の黒茶褐粘土によって覆われ、その下はほぼ平らである。遺物はほとんどなく、足跡の痕跡がみられた。西側の調査区外でおこなわれた平成7年度1区の調査ではこれに対応する粘土層がみつかっており、古墳時代前期の土師器が発見され、水田痕跡の可能性が示されている。先に記述した溝2-11、溝2-12の続きがこの調査区では確認されておらず、北西部は地山面がさがり、湿地となっていたのかもしれない。

井戸2-1・井戸2-2は2区北隅で発見された南北に並ぶ木組みの井戸である。構造は1区で発見された井戸1-1と共通する(図15・図版29・30)。

井戸2-1は南北3.3m、東西3.5m、深さ5.3mを測る。検出面から約1.3m掘り下げると井戸枠の支柱がみつかった。井戸の内法は0.9m四方の方形である。掘方は円形で、ほぼ垂直に掘り下げて井戸枠を設置したようだ。井戸枠の下層は二段の桶を重ねたもので、その上の四隅に長さ2mの支柱を据え、六本の桟木をホゾに差し込んで支えた井戸枠を二段重ねしている。角材による支柱の外側は幅約0.6m、長さ1.8mの杉板で覆い、井戸枠の中に土砂が流入することを防ぐ。井戸枠内は灰褐強粘土層や淡灰強粘土層が堆積しており、遺物は近世の瓦が少量みられたのみである。しかし、構造からみて井戸1-1同様、大和川付替え以降のものと考える。

井戸2-2は南北3.0m東西2.8m、深さ5.1mを測る。検出面から約0.6m掘り下げると井戸枠の支柱がみつかった。井戸枠の木組み構造は井戸2-1と共通し、0.9m四方の方形である。掘方は円形で、ほぼ垂直に近く掘り下げて井戸枠を設置する。井戸枠の下層は二段の桶を重ね、その上の四隅に長さ2mの支柱を据え、六本の桟木をホゾに差し込んで支えた井戸枠を二段重ねする。角材による支柱の外側は幅約0.6m、長さ1.8mの杉板で覆い、井戸枠の中に土砂が流入すること

を防ぐ。井戸最下層から完形に近い40枚以上の井戸瓦がまとまって落ち込んでいた（図43）。井戸の上部構造だろう。この井戸も井戸2-1・井戸2-1同様、大和川付替え以降のものと考える。ただし、井戸2-1と井戸2-2は切り合いがなく、二つが並存したものか、一方が廃絶後に掘削されたものは判然としない。

井戸2-4は2区北西で発見された素掘り井戸である（図16）。直径は1.4mで深さ2.1mを測る。埋土は地山粘土ブロックが大量に含まれ、上層が青灰粘土で下層は青灰粗砂、出土遺物はなかった。底が湧水層に達せず、水溜め施設と考える。

井戸2-5は井戸2-2の東で発見された素掘り井戸である（図16）。直径は2.4mで深さ4.9mを測る。埋土は上層が淡褐粗砂で、下層は黒灰粘土や青灰砂などの互層で、出土遺物はなかった。最下層が崩落しており、十分に断面観察できなかった。

井戸2-6は2区中央北よりで発見された素掘り井戸である（図16）。直径は1.2mで深さ2.6mを測る。埋土は上層が淡灰褐粘土で、下層は暗灰褐強粘土、下層の壁が崩れ、フラスコ状となる。調査中に崩落し、十分に断面観察できなかった。出土遺物はなかった。

#### b 2区中央の調査

2区の中央では斜行溝、土坑などが発見された（図11）。

斜行溝2-16・斜行溝2-17は2区中央の東により併行してのびる溝である。溝の北東は地山面が高くなっている、傾斜地の段差に沿ってつくられたものである。溝の間に柵列状の柱穴が並ぶ。ただし、この穴は上面の耕土を含み、新しい時期のものようだ。溝と柱穴列は北側が地山の削平で失われ、南側がかく乱によって破壊されている。

斜行溝2-16・斜行溝2-17ともには現存長9.5m、幅0.6mを測る。埋土は茶褐粘土で、流水の痕跡はない。出土遺物もなかった。

大土坑2-1は2区中央で発見された浅い円形土坑である。直径5.2m、深さ0.2mを測る（図13）。埋土は黒褐粘土で、土坑の北隅から古墳時代後期の須恵器蓋杯・土師器高杯などがまとまって出土した（図25）。

土坑2-15は大土坑2-1の北側で発見された南北1.4m、東西2.4m、深さ0.3mの方形土坑である（図13）。埋土は黒褐粘土で、鎌倉時代はじめの瓦器梶3点が出土した（図37）。

土坑2-18は土坑2-15の西側で発見された南北1.6m、東西1.2m、深さ0.2mの方形土坑である（図14）。埋土は暗褐粘土である。

土坑2-33は大土坑2-1の北東で発見された不定形土坑である。南北長3.4m、東西長3.5m、深さ0.3mを測る。埋土は砂礫混じりの灰褐粘土で、出土遺物はなかった。

土坑2-34は2区中央東よりで発見された不定形土坑で、南北長3.2m、東西長4.6m、掘り底は平らで深さ0.1mを測る（図14）。埋土は暗褐粘土で遺物はなかった。

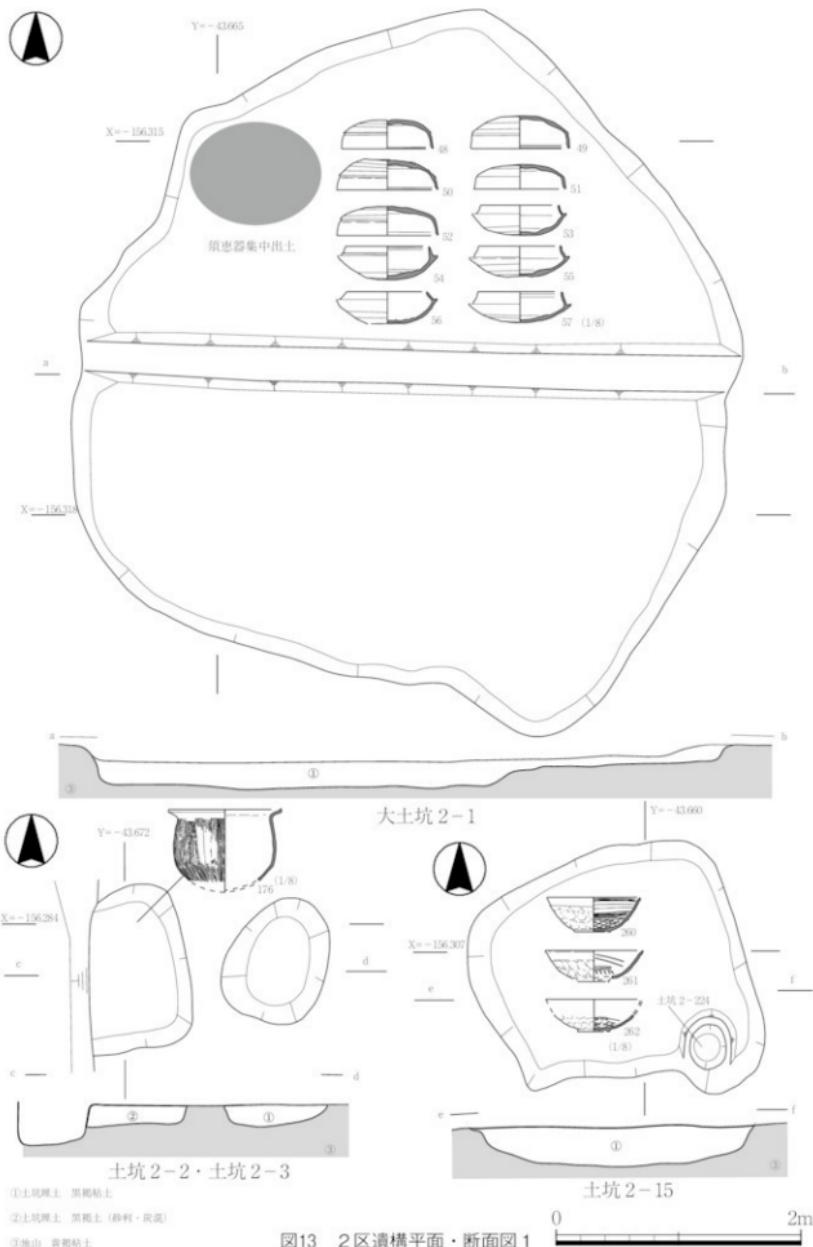


図13 2区遺構平面・断面図1

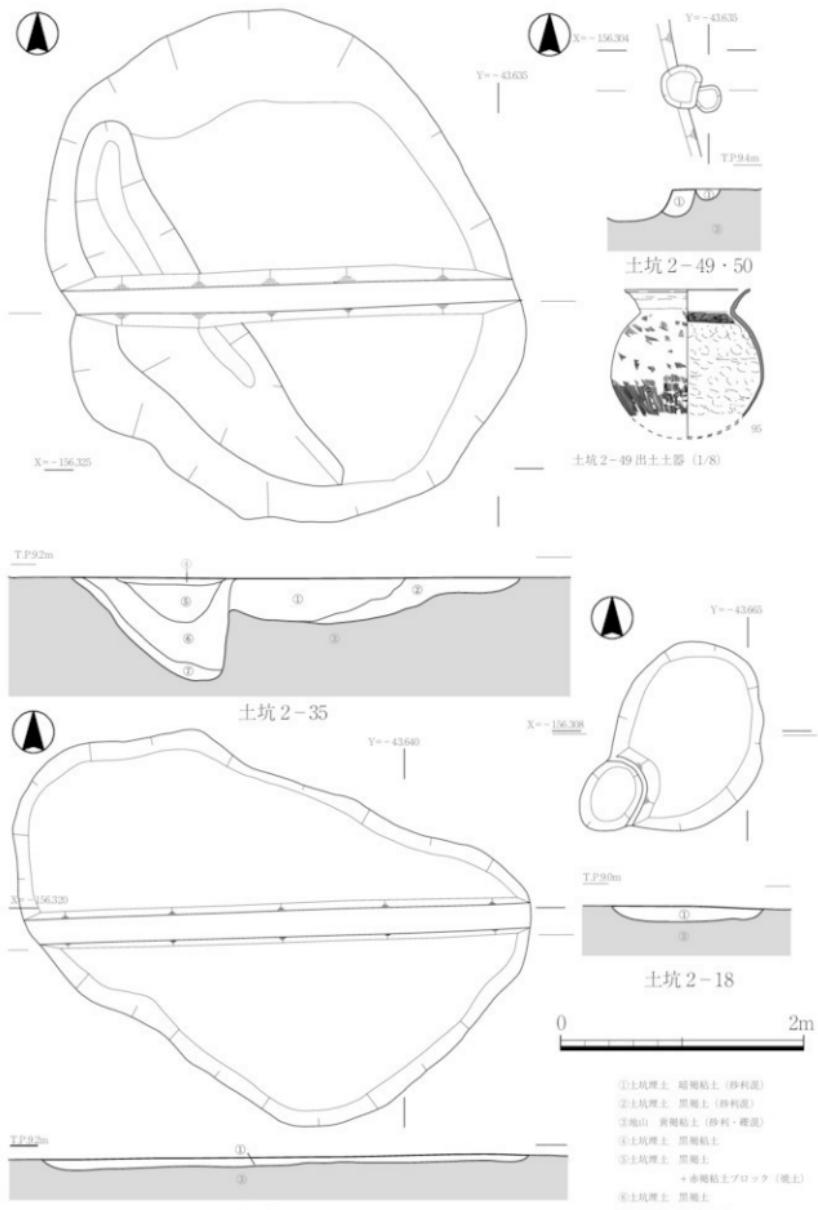


図14 2区遺構平面・断面図 3

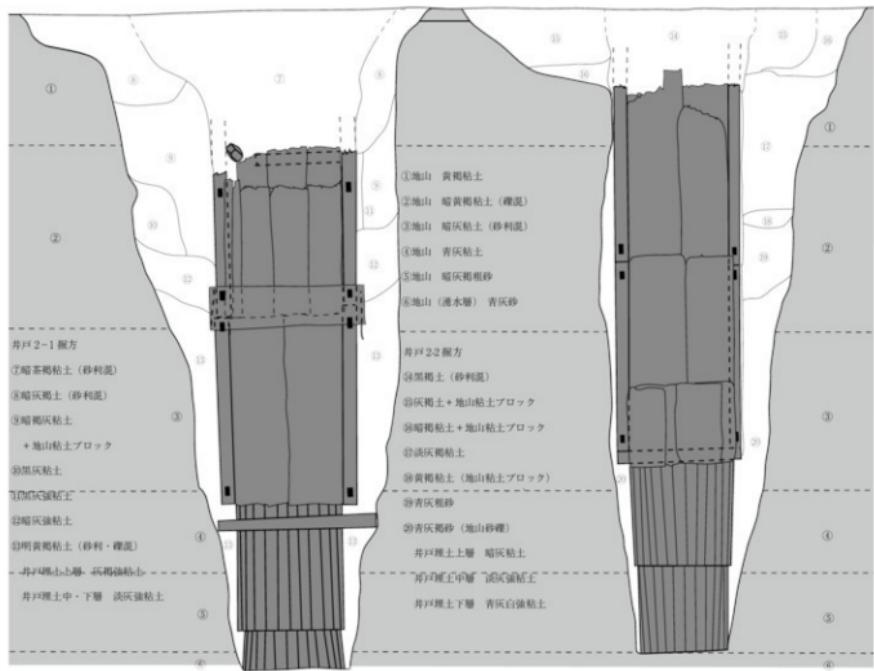
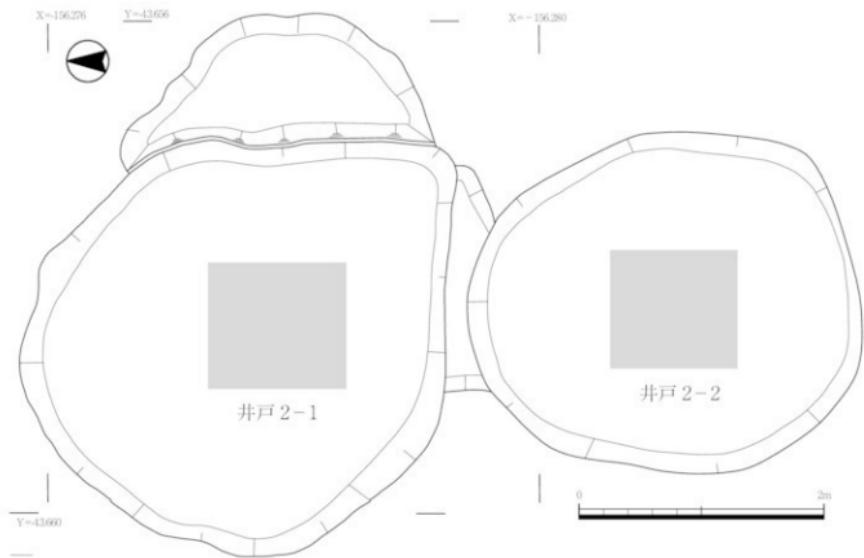


図15 2区遺構平面・断面図4

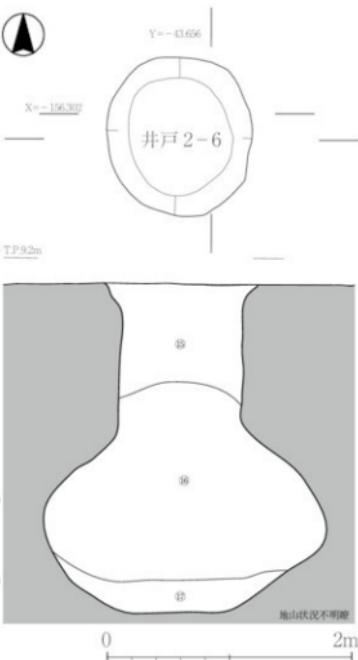
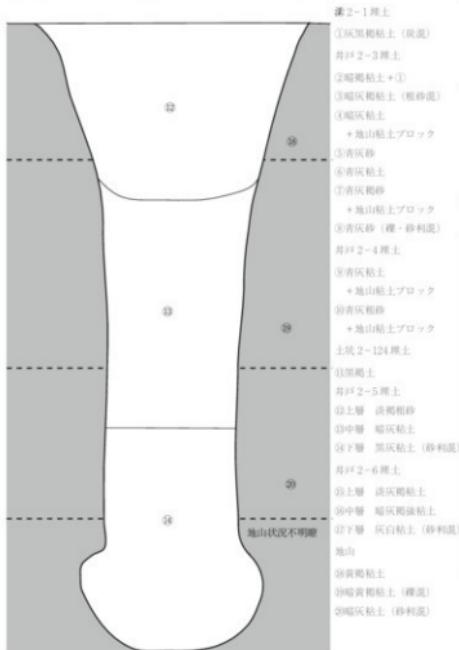
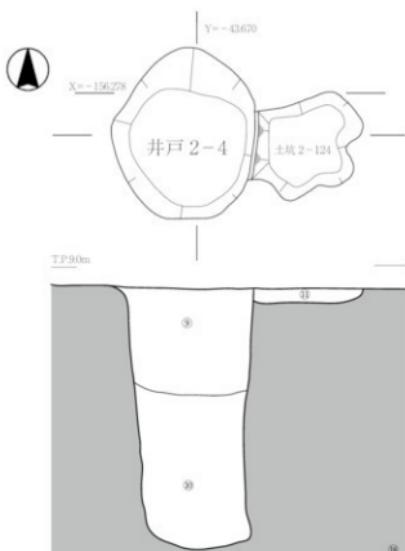
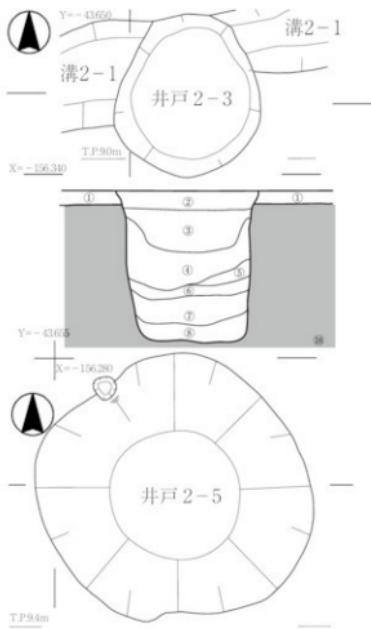


図16 2区段構平面・断面図5

土坑2-35は土坑2-34の南で発見された円形土坑である（図14）。直径4.5m、西側が深くなく0.8mを測る。埋土は上層が炭混じりの黒褐土に赤褐粘土ブロックの焼土跡が含まれ、下層は黒褐強粘土で、出土遺物はなかった。

土坑2-49は2区中央東よりで発見された直径0.4m、深さ0.25mの小規模な穴である（図14）。東側にやや小ぶりの土坑2-50が接する。埋土は暗褐粘土で、飛鳥時代の土師器甕が出土した。

土坑2-74は大土坑2-1の東で発見された不定形土坑である。南北長3.5m、東西長3.2m、深さ0.3mを測る。中央部はかく乱によって失われていたものの、埋土は砂利混じりの暗褐粘土で、出土遺物はなかった。

#### c 2区南側の調査

2区の南では今池の北堤が検出された（図17）。堤の北斜面には溝2-1がある。堤南側の池埋土からは明治から昭和前期にかけての陶磁器や炭などが確認された。溝2-1は平成13年度に行われた西側部分の調査で検出された706-SD・709-SDに連続するものである。堤2-1の下層からは溝、井戸などが発見されている。

堤2-1の下層から溝2-20が発見された。溝2-20は堤2-1を完全に除去した段階で確認できた。今回調査区で長さ35m 幅8.5m、深さ0.8mを測る。平成13年度に行われた西側部分の調査で検出された503-SD、昭和62年度調査のA地区発見の溝に連続し、さらに西に伸びることがわかる。しかし、2区の東に近接して行われた平成7年度1区の調査ではこの溝のつづきは確認されておらず、溝2-20は今回調査区東側で途切れるか、南に折れるようだ。溝2-20の中央には長さ9.0m、幅4.0m、深さ0.6mの掘り込みがあった。

井戸2-3は堤2-1と溝2-1の下層から発見された素掘り井戸である。直径は1.2mで深さ1.4mを測る（図16）。埋土は上層が暗褐粘土と溝2-1の堆積物がしみこんだ様相で、下層は暗灰粘土・青灰褐砂などの互層で、出土遺物はなかった。底は湧水層に達しておらず、天水をためたものと考える。

溝2-37・溝2-38は溝2-1の北側で併行して切り込まれた東西溝である。溝2-37は長さ7.1m、幅1.5mを測る。溝2-38は東側が調査区外へと続き、現存長5.8m、幅1.2mを測る。両溝とも埋土は上層の耕土ブロックを含む暗褐粘土で、流水の痕跡、出土遺物はない。

#### d 1・2区上層遺構の調査

現在の地表面を形成する盛り土を除去する段階で、旧今池の堤が1区の北側と2区の南側で確認された。今池は昭和30年代までは池の形状を保っていたことが航空写真などで確認できるものの、次第に埋め立てられる過程で、堤も幾分、破壊されたようだ。今回調査区は今池の

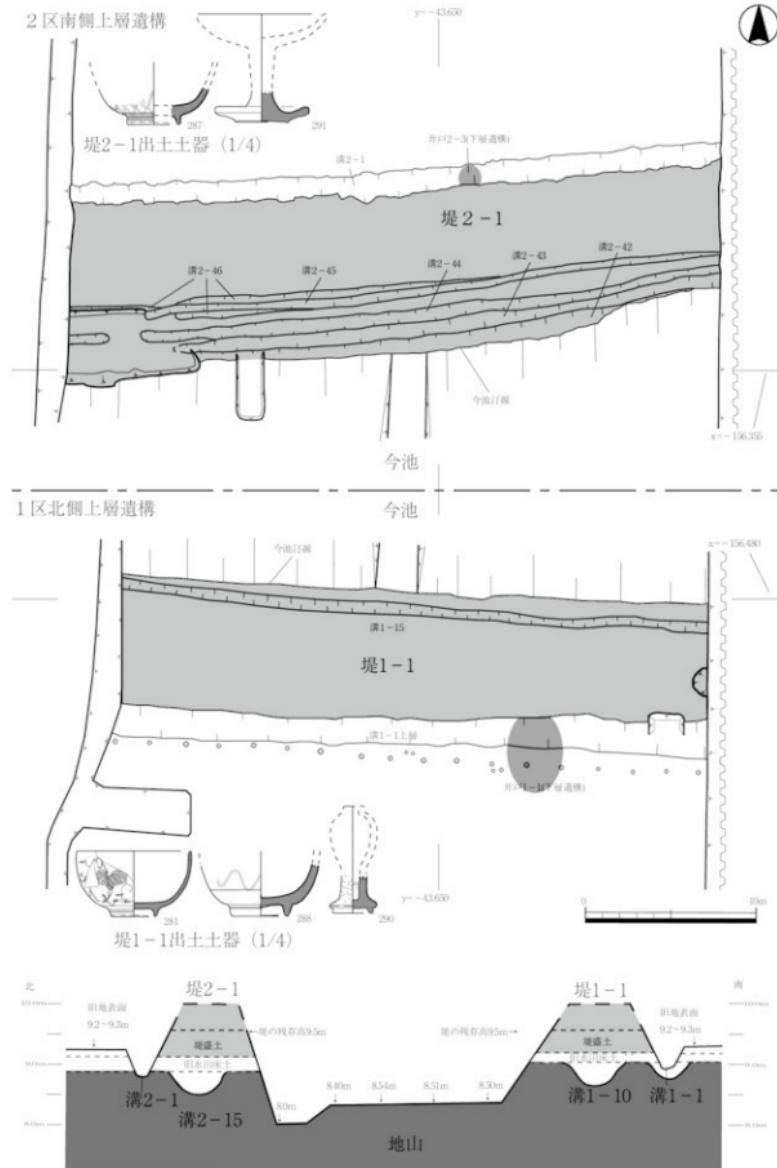


図17 1・2区上層遺構と今池断面模式図

東側に増設された副池に接する。調査の結果、良好な形で堤がのこされたため、その形成時期と包含する遺物を確認するため、人力で掘削を行い、遺構の詳細を調査した（図17上・図版1・11）。

1区で発見された堤1-1は旧水田の床土上に築かれている。底面の幅が約13m、高さが1.3mを測る。堤上には樹木の痕跡が残されており、検出面はあまり削平されていないことがわかる。堤上面から地山を約0.3m掘削する「はがね」と思われる溝1-15を検出した。

溝1-15は幅0.6m、深さ1.4mをはかり、青灰微砂で充填されている。南側には壁状に薄い乳白粗砂層がある。この溝の南北で堤の盛り土が異なることから、堤改修時に形成されたものかもしれない。

ちなみに、「はがね」とは本来、堤内に水の浸透を防ぐための硬質な粘土と考えられがちだが、むしろ堤内の浸透水を抜くための機構を示す場合が多いという。「はがね」の技法は中世末の築城と水濠により全国に広められ、ため池や河川堤に取り入れられるのは近世初頭以降と考えられている。

このような溝状遺構は堺市美原区日置荘遺跡の剣池と今池を画する堤防の発掘調査（その5）や河南町山城の山城庵寺の新池などで確認されている。日置荘遺跡の調査では掘った溝に粘土を楔状に埋め込み、堤防の強度を考慮したものと考えられている。しかし、今回調査では必ずしも堤防の土より強靭な粘土ブロックが充填されているわけではない。

堤2-1は2区南端で確認された今池の北堤である。水田床土上に築かれている。堤は底面の幅が約13m、高さが1.1mを測る。堤上には地山に達する深さで「はがね」と思われる東西溝が6条検出された。いずれも地山面には達していない。

多数の溝が切りあいながら形成され続けたことより、長期にわたって今池堤の浸透水処理に苦慮していた状況がうかがえる。

このうち、もっとも新しいと思われる溝2-45は幅0.6m、深さ1.4mをはかり、青灰微砂で充填されている。北側には壁状に薄い乳白粗砂層がある。この溝は1区の堤1-1上で発見された溝1-15に連続するものだろう。

堤上のもっとも南端で見つかった溝1-42は池の汀線に沿って形成されている。幅0.7m深さ、0.7mをはかり、灰微砂で充填される。出土遺物はなかった。

溝2-42の北側で発見された溝2-43は幅0.8m、深さ0.3mをはかり、灰微砂で充填される。出土遺物はなかった。

溝2-43の北側で発見された溝2-44は、南肩を溝2-43に、北肩を溝2-47に切られる。幅1.2m、深さ0.9mをはかり、黄灰微砂で充填される。出土遺物はなかった。

溝2-44の北側で発見された溝2-47は幅0.6m、深さ0.3mをはかり、灰微砂で充填される。出土遺物はなかった。

溝2-47の北側で発見された溝2-46は溝2-44と溝2-47に南肩を切られ、ほぼ重なって溝2-45にも切られ、もっとも古い段階に形成された溝だとわかる。幅1.2m以上、深さ0.9mをはかり、淡褐色砂を充填される。出土遺物はなかった。

発掘調査終了後、水処理施設の建設に伴って今池の池底を掘削する工事が行われたため、底面の状況を確認する立会いをおこなった。その結果、池底は海拔8.4~8.5m程度のほぼ平坦であることがわかった(図17下)。南北の旧地表面が海拔9.2~9.3m程度であるから、地表面から約0.7m程度の掘削を行って、その土で1m程度の高さをもつ堤を形成したと推定する。池底には0.1m程度の植物遺体をふくむ黒灰粘土の堆積層があった。ただし、2区南端の調査で確認された池底面は、海拔約8.0mで、池の中央部に比べ、0.5m程度低い。この部分は溝状に深くなり、池の水を抜くときの水道となっていた可能性がある。

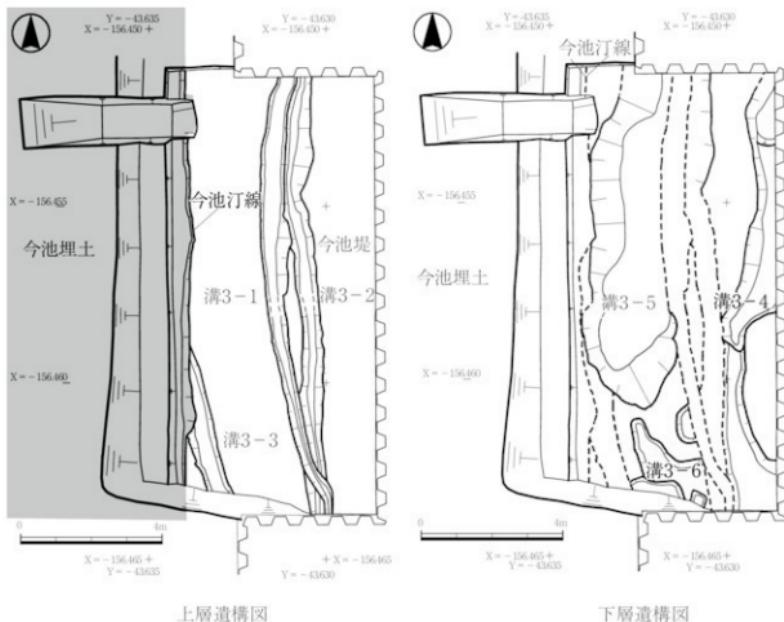


図18 拡張区（3区）上層・下層遺構図

### 3節 拡張区（3区）の調査

#### a 拡張区上層遺構の調査

拡張区は1区の北東に位置する（図6・図版10）。1区北側で検出された今池の堤と汀線は北において、2区南側で検出された堤にとりつく。北における堤をこの拡張区上層で確認した（図18左）。

発見された今池東堤3-1は全容がわからないものの、水田床土上に地山の黄褐色粘土ブロックや砂礫を盛り上げて形成したものである。堤の上面には溝3-1がある。

溝3-1は幅0.6m、深さ1.0mをはかり、青灰微砂で充填されている。北側には壁状に薄い乳白色粗砂層がある。この溝は1区の堤1-1上で発見された溝1-15、2区の堤2-1上で発見された溝2-45に連続するものだろう。

溝3-1の西側は池の汀線となり、埋土には明治から昭和前期にかけての陶磁器や炭などが含まれる。

溝3-2は幅0.6m、深さ0.8mを測り、黄褐色粘土ブロックなどで充填されている。この溝は溝3-1とほぼ重なるように南北にのび、切り合いからそれ以前の時期に掘削されたことがわかる。

溝3-3は幅0.7m、深さ0.4mを測り、黄褐色粘土で充填されている。北側は池の汀線で途切れる。出土遺物はなかった。これら、堤の上に形成された溝3-1～溝3-3は堤にしみこんだ水分を調節する「はがね」の機能を考えられる。いずれも地山面より0.1～0.2m程度深く掘り込まれている。

#### b 拡張区下層遺構の調査

堤3-1を除去すると、その下層から溝3-4・溝3-5・溝3-6がみつかった。これらの溝は今池形成以前のもので、溝1-1下層・溝1-10・溝2-20に取り付き、坪境などを示す区画溝の一部と考える。ただし、溝1-1下層も17世紀の磁器を含む井戸1-1より新しいので、一連の区画も江戸時代の改修による区画であると思われる（図18右）。

溝3-4は東側と北側が調査区外になる南北溝で、深さ0.4mを測る。暗灰砂で充填されている。流水痕跡はない。出土遺物もなかった。

溝3-5は幅3.3m、深さ0.3mを測る南北溝で、暗灰砂で充填されている。北側は調査区外へと延び、流水痕跡はない。出土遺物もなかった。

溝3-6は溝3-5の南に接して発見された。深さ0.3mを測り、溝か土坑か判然としない。溝3-5の埋土に共通する暗灰砂で充填されており、一連のものかもしれない。出土遺物はなかった。

#### 4節 出土遺物

今回調査ではコンテナ約30箱の遺物が発見された。大半は土器類で古墳時代後期～近世にかけてのものである。土器のほかに瓦類と、サスカイト製石器、砥石などの石製品、鉄釘・銅錢などの金属製品がある。木製品は井戸の部材がある。

##### a 古墳時代以前の遺物（図版31）

大和川今池遺跡ではこれまでの調査で旧石器時代から弥生時代までのサスカイト製打製石器や石器製作に伴う剥片などが発見されている。しかし、石器時代の地表面は後世の土地改変で削平が著しく、遺構はない。

今回調査で発見された石器はすべてサスカイト製で、大半は小型の剥片である。この他、縄紋時代後・晩期の特徴をもつ石鎌が4点発見されている（図19）。いずれも凹基式で丁寧に左右対称の三角形の形態をつくり出す。左右の辺は直線にならず、ややくびれる特徴がある。もっとも小さな1点は長さ2.1cm、最大幅は1.2cmで、2区大土坑2-1から発見された（1）。もう

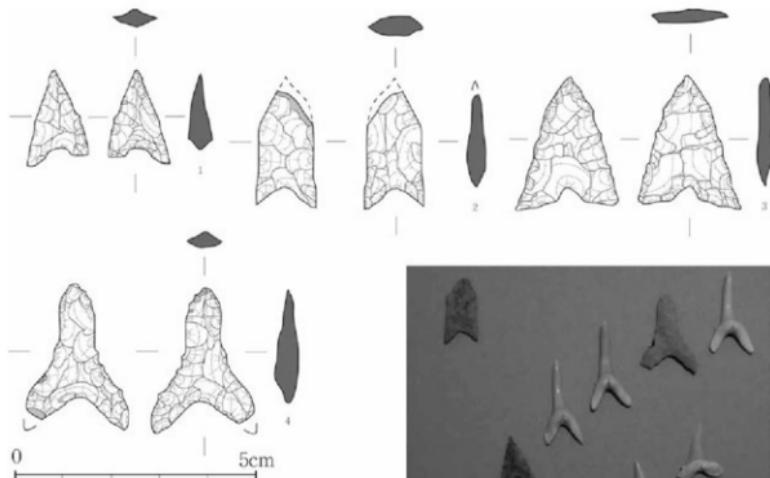


図19 打製石器



図21 弥生土器

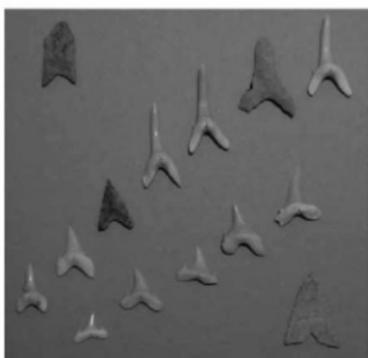


図20 鮫齒と石鎌

1点は長さは2.7cm、最大幅は2.1cmで1区の地山直上面から発見された（2）。もう1点は頂部を欠損し、現存長は3.1cm、最大幅は2.2cmで、これも1区地山直上面から発見された（3）。残る1点も頂部を欠損し、現存長は2.4cm、最大幅は1.2cmで、2区の地山直上面から発見された（4）。

石鎚の形態の多様性は年代や集団の差によるものではなく、原形となる骨鎚の多様性によるものと考える。すなわち、形態が酷似する鉤齒に多様性があり、その模倣が形態差となって現れたものだろう（図20）。

弥生土器は小片2点がある。ひとつは高杯の脚部で摩滅が激しい（5）。もうひとつは甕の底部で外面に指おさえの痕跡を残す（6）。底部径3.5cmを測る（図21）。いずれも明るい赤褐色で、弥生時代終末段階に在地でつくられたものだろう。

#### b 古墳時代の遺物（図版31～34）

古墳時代の遺物には須恵器・土師器がある。食器類の杯・高杯・鉢などと貯蔵用の甕・壺類がある（図22）。その他、石製紡錘車と砥石がある（図23）。砥石は明確に時期を判別することはできない。土器は6世紀初頭の一群が大半を占める。

須恵器鉢は小型品が2点出土している。1点は外面に刺突紋を密にめぐらせ、口径6.0cmを測る。口縁部に段があり、端部を平らに仕上げる。把手と蓋を伴うものだろう（7）。もう1点は外面に波状紋をほどこし、底部を回転ヘラ削りで丁寧に仕上げる（8）。

須恵器ハソウは口縁端部を丸くつくりだし、頸部に波状紋をほどこす。口径がわかるものは11.8cm・14.0cmである（9）・（10）。体部の小片は、外面の沈線で区画した内側に密な波状紋をほどこす（11）。他に注口とおもわれる筒状の小片がある。内径は0.8cmを測る（12）。

須恵器杯蓋は口縁端部を丸くつくり出すものと段をつけて仕上げるものがある（13）・（14）。

須恵器杯身は口縁部が直立気味に内傾する。口径が11.3cm程度の古式のものから（15）・（16）、12～16cmに及ぶ6世紀代のものがある（17）・（18）・（22）。底部が不明の大型品は高杯の可能性がある。

高杯は脚端部を丸く仕上げ、方形の透かし穴をもつもの、粗くカキメ仕上げするものなどがある（19）～（21）。

甕はラッパ状に開く短い口縁部の甕Aが大半を占める。外面は格子タタキで、ナデ仕上げするものもある。甕の口縁端部は形態がいくつかある。すなわち、端部を平らにして上につまみあげるもの（23）・（27）、丸く仕上げるもの（31）・（32）、端部を肥大させて下方につまんで曲げたり、段をつくるもの（28）・（29）などである。もっとも小型のものは口径15.7cmを（23）、大型のものは口径35.0cmを測る（32）。

石製品には紡錘車と砥石がある（図23）。紡錘車は滑石製のドーム形で、細かい格子刻みがある。直径4cm程度、孔の径は0.8cmを測る（33）。材質が軟質で悪く、節理で剥離する。

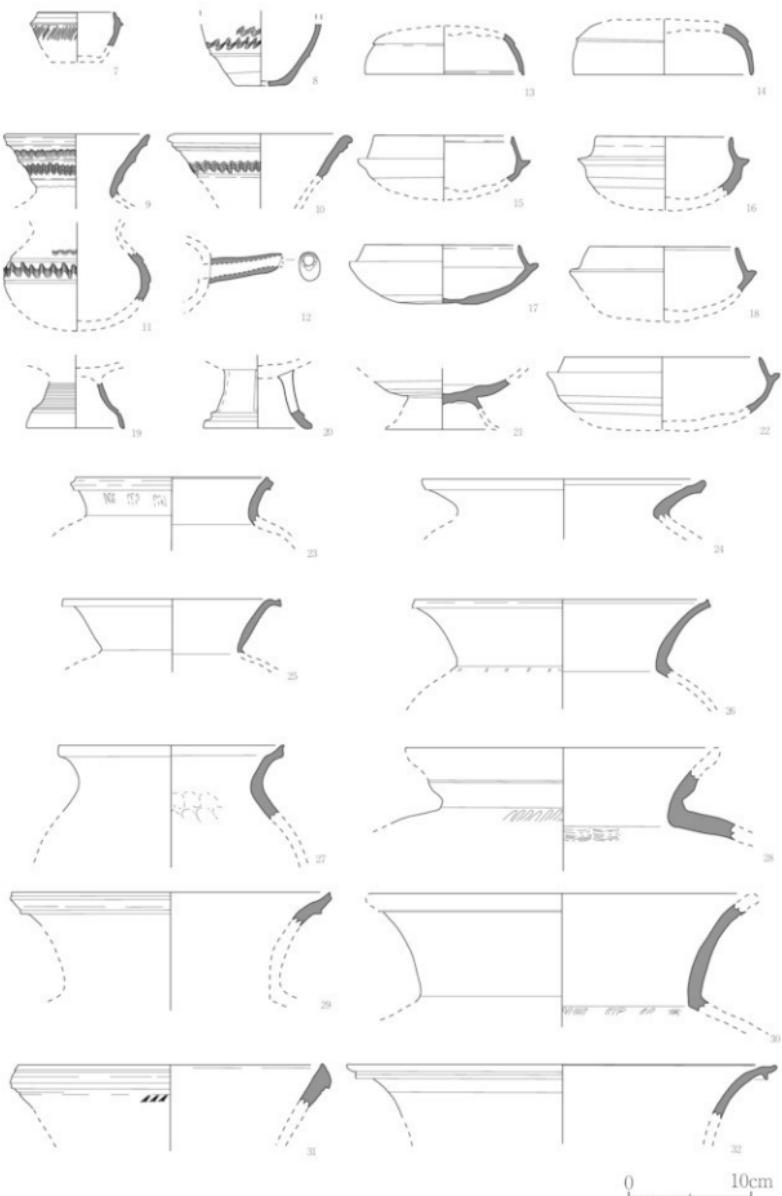


図22 古墳時代の土器

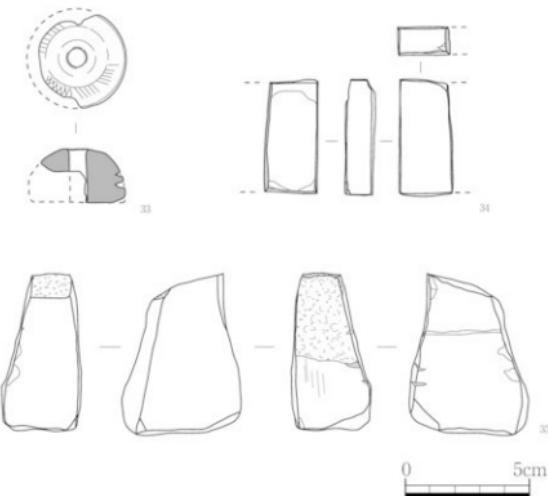


図23 石製品

砥石は2点出土している。ひとつは現存長 $4.5 \times 2.1 \times 1.1$ cmを測る粘板岩製で、乳白色である。肌理は細かく、仕上げ砥石と考える(34)。もうひとつは釣鐘形で最大長6.6cmを測る。二つの面に自然面が残る。他の面はよく使い込まれている(35)。凝灰岩製である(図版31)。

溝2-11からは5世紀後半の須恵器杯身(42)と6世紀初頭の須恵器杯蓋(36)～(41)、須恵器杯身(43)・(44)、土師器高杯(45)～(47)が発見された(図24)。土師器高杯は口縁部が曲線的に開くもの(45)、直線的に開くものがある(47)。5世紀後半の杯身は灰白色で、口径9.6cmを測る。小型で口縁部が直立する(42)。6世紀初頭の蓋杯は概して大振りで、内面に当

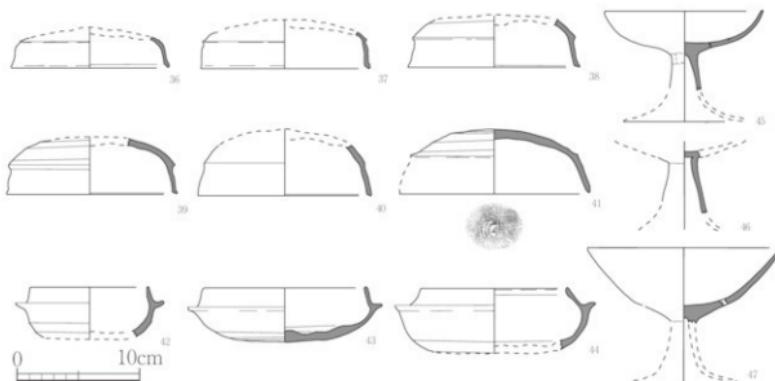


図24 溝2-11出土土器

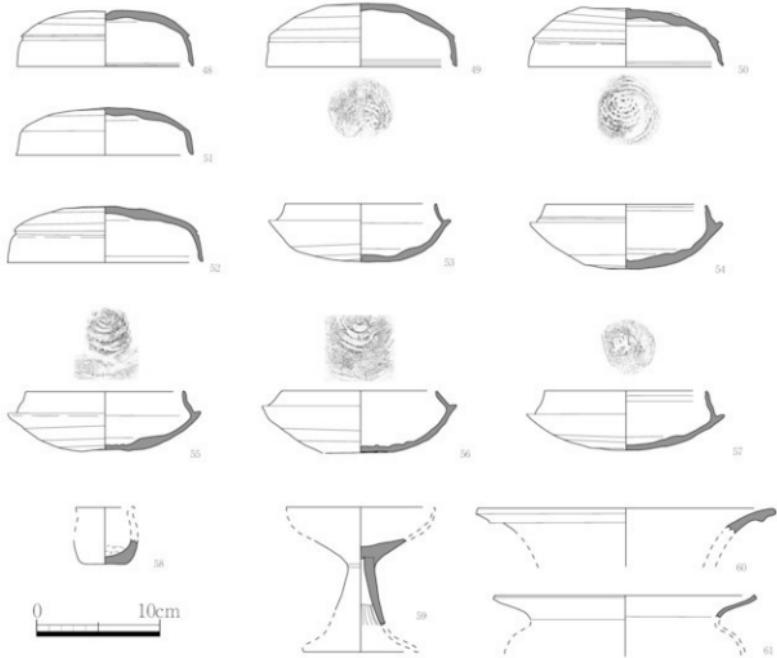


図25 大土坑2-1出土土器

て具の同心円痕跡を残すものがある（41）。ただし、溝2-11からは瓦や瓦器碗の小片も発見されており、溝の埋没時期は中世と考える（図版32下）。

大土坑2-1からは6世紀初頭の須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器高杯・甕・手づくね土器などが発見された（図25・図版32）。

須恵器蓋杯は概して大振りで、内面に当て具の同心円痕跡を残すものが多い。杯蓋は口縁端部を丸くつくり出すものと段をつけて仕上げるものがある（48）～（52）。杯身は口縁部が直立気味に内傾する。底部外面の回転ヘラ削りは小さく粗い（53）～（57）。

甕は口縁部の小片で、ラッパ状に外反し、端部を丸くつくり出す（60）。

土師器高杯は明赤褐色、脚部のみの小片で脚内面にしづり目が明瞭に残る（59）。

手づくね土器は乳白色で上半を欠損、内面などに指押さえの痕跡が明瞭に残る（58）。

土師器甕は口縁部を強く屈曲させ、暗赤褐色で薄く、口縁端部をつまみあげる。剥離が著しい（61）。

### c 飛鳥時代の遺物（図版35・36）

飛鳥時代の土器は須恵器・土師器がある（図26）。小片が多く、遺構に伴うものは少ない。

須恵器は蓋杯・高杯・ハソウ・タコ壺・コネ鉢・壺・甕などがある。土師器は高杯と甕がある。遺構に伴うものはなかった。これまでの大和川今池遺跡の調査では難波大道に飛鳥II～III期の土器が伴い、付近に同時代の集落の存在が推定されていたが、今回発見の遺物は飛鳥I期を中心でややさかのぼる。

杯蓋Gは小型で高いつまみがつく（62）・（63）。杯蓋は口径14cm程度、天井は粗いヘラ削り痕跡が残る。杯蓋Hは外面上部を粗く削り、口縁部との境が明瞭でない（64）・（65）・（68）・（69）。

杯身Gは杯蓋Gとつくりが共通し、立ち上がりはいずれも短く痕跡的である。底部ヘラ切り痕を明瞭に残すものと（71）、未調整のものがある。ひとつは立ち上がりが直線的でやや内傾し、口縁端部は丸くつくり出し、口径12.0cm、器高2.8cmを測る（72）。

高杯は短脚と長脚がある。短脚の高杯は端部をつまみ出し、円形の透かし孔のあるもの（76）と透かし穴のないものがある。底径のわかるものは10.6cmを測る（75）。杯部の残るものには内面に朱が付着したものがある（77）。

長脚の高杯も小型化が進み、二段の方形透かしを作り、外面をカキメ調整するものもある（80）。また、底径がわかるものは15.0cmを測る（82）。

提瓶は頸部のみ発見された（78）。口縁部は直立気味で、端部は丸く仕上げる。頸の付け根にヘラ描きで×印の記号がある。

タコ壺は釣鐘形の小型品でイイダコ用である（85）・（86）。焼きはあまり乳灰白色である。体部外面は粗くナデられる。

コネ鉢は体部の器厚が厚く、口縁部がラッパ形に開き、外面にカキメ痕跡を明瞭に残す。口縁端部のわかるものは平らに仕上げ、口径は16.2cmを測る（83）。底部は粘土円盤からなり、底径は9.6cm、厚さは1.5cmを測る（84）。

須恵器の甕は丸底甕（87）とソロバン玉形の体部のもの（88）がある。前者は短頭で波状紋などの装飾はない。後者は長頭で高台を伴うものだろう。

須恵器の甕は小型・大型があり、いずれも口縁端部を折り返し丸く仕上げる。前者は口径13.0cm、後者は口径22.8cmを測る（89）・（90）。

土師器高杯は暗褐色の小型品で杯部は不明瞭である（91）～（93）。最も小型品は底径約5.8cmを測る（91）。

土師器甕は球形の体部に短く開く口縁がつく（94）・（95）。内面は指押さえの痕跡が、外面はハケ目痕跡が明瞭に残る。いずれも外面が煤ける。前者は土坑2-225、後者は土坑2-49から出土した。

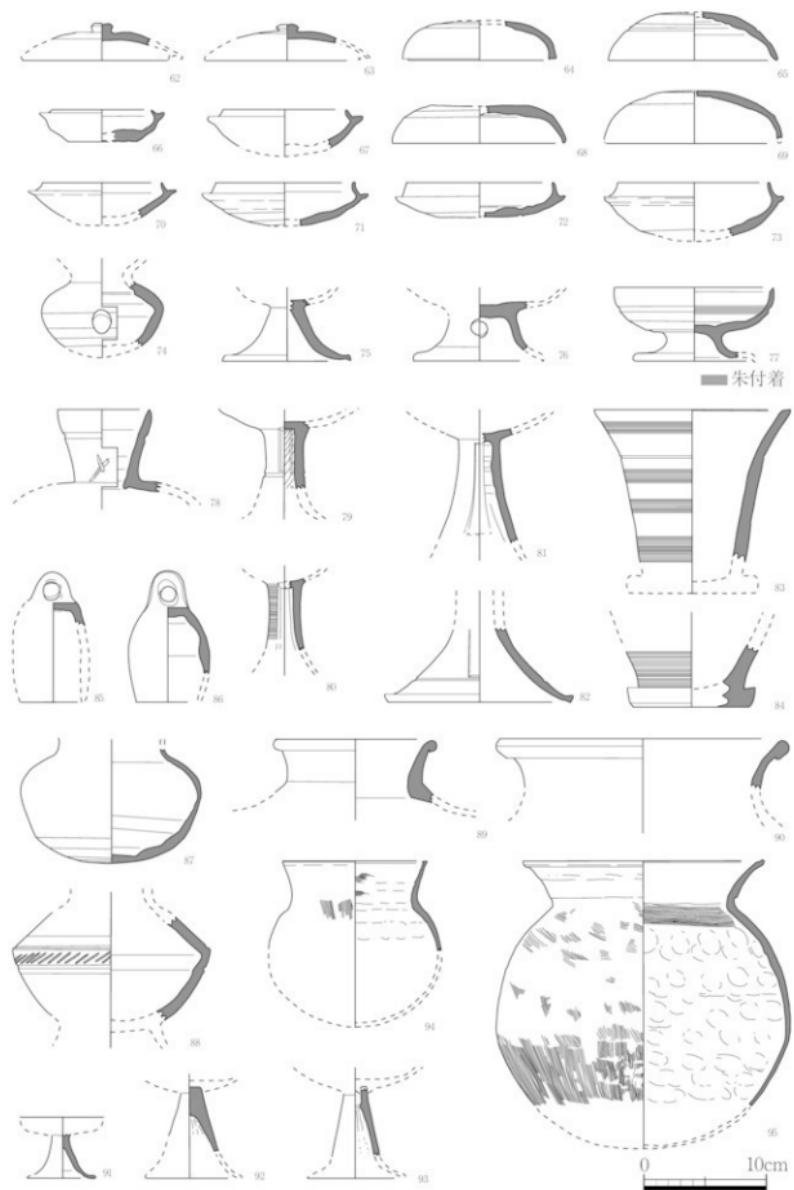


図26 飛鳥時代の土器

#### d 奈良～平安時代の遺物（図版36～40）

奈良～平安時代の遺物には須恵器・綠釉陶器・土師器がある。須恵器は蓋杯・皿・壺・鉢・甕などがある（図27・28）。綠釉陶器は碗のみである（図29）。土師器には杯、高盤（高杯）、甕などがある（図30）。遺物は小片が多く、杯・甕などは厳密にこの時期のものか判別しにくい。遺物の出土からこの時期のものとわかる遺構は土坑2-2だけである（図31）。

須恵器杯蓋Bは直径13cm程度の小型品が目立つ。体部は扁平で宝珠つまみも平たい。体部と口縁部がほぼ同じ厚みで、口縁端部のみを垂直に折り返す（96）～（101）。口径は12.8cm～17.8cmを測る。

須恵器杯身Aは底部が平らで、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。底部と体部の境を回転ヘラ削りするものもある（102）。

須恵器杯身Bは底部に低い高台をつけ、立ち上がりは杯身A同様、直線的に開く（103）～（110）。口径は16.0～22.1cmを、高台径は11.4cm～19.0cmを測る。立ち上がりの屈曲部分はほぼ高台に接するものが多く、この器種の中でも新式の様相を示す。

須恵器皿はほとんどない。皿Cは器高が低く厚い。丁寧になで仕上げするものの、焼きは甘い。口縁端部はやや平たい。口径26.0cm、器高2.0cmを測る（123）。

壺には短頸壺と長頸壺があり、長頸壺には小壺もある。それぞれ、底部に高台を伴うものと、糸切り痕跡を明瞭に残す平底がある。

糸切り底の壺底部は底径7.3cm～11.8cm、粘土板をつくって体部を立ち上げた痕跡が明瞭に残るものもある（114）。体部は球形につくりだすものと、大きく開くものがある。後者は鉢の可能性もあるが、内面はクロロ目が明瞭である（113）・（116）。

長頸壺は頸部のつけ根が狭くそばまって口縁部がラッパ状に開く壺Iがある。（121）・（122）。口縁端部は外側に面をもたせ、口径は10.0cm・12.0cmを測る。

小型壺は、頸部が細くほぼ直線的に立ち上がる（133）・（134）。口縁端部がわかるものは丸く仕上げている。底部に高台がないものは粘土板と糸切り痕跡が明瞭に残る（130）～（132）・（135）～（137）。高台を作りだすものは底部を丁寧になで、高台径3.3cm～6.6cmを測る。

直立する短い口縁部の広口短頸壺である壺Aは肩が張り、外面を丁寧にナデ仕上げする（140）・（141）。口縁短部を平らにつくり、高さは0.9～1.5cm程度である。口径13.0cm・13.4cmを測る。

直立気味の長い頸部をもつ広口長頸壺の壺Bも肩が張り、外面を丁寧にナデ仕上げする（142）～（144）。灰白色のよくしまった胎土で緑褐色の自然釉が外面にかかり、愛知県の猿投産と考える。

甕はほぼ球形の体部で、強く屈曲する短い口縁の甕Aが大半を占める（124）。外面は格子目タキで、ナデ仕上げするものもある。甕は口縁端部を平らにつくりだす。

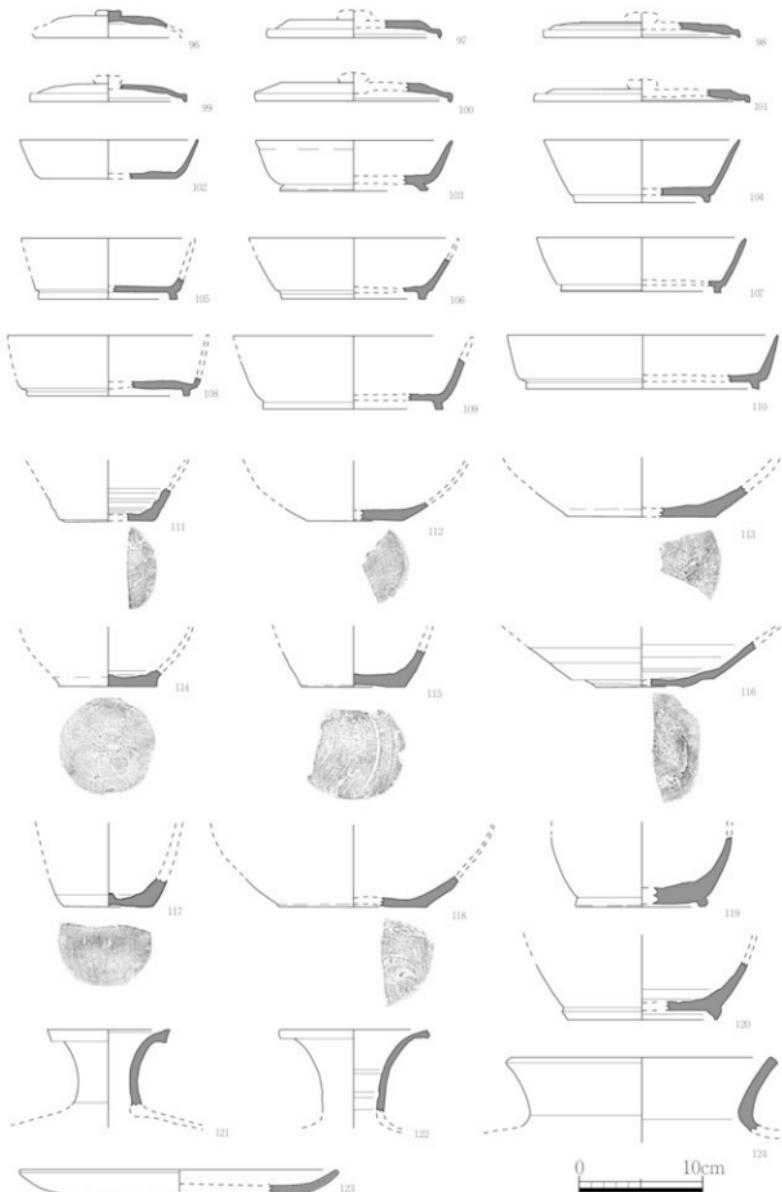


図27 奈良・平安時代の須恵器 1

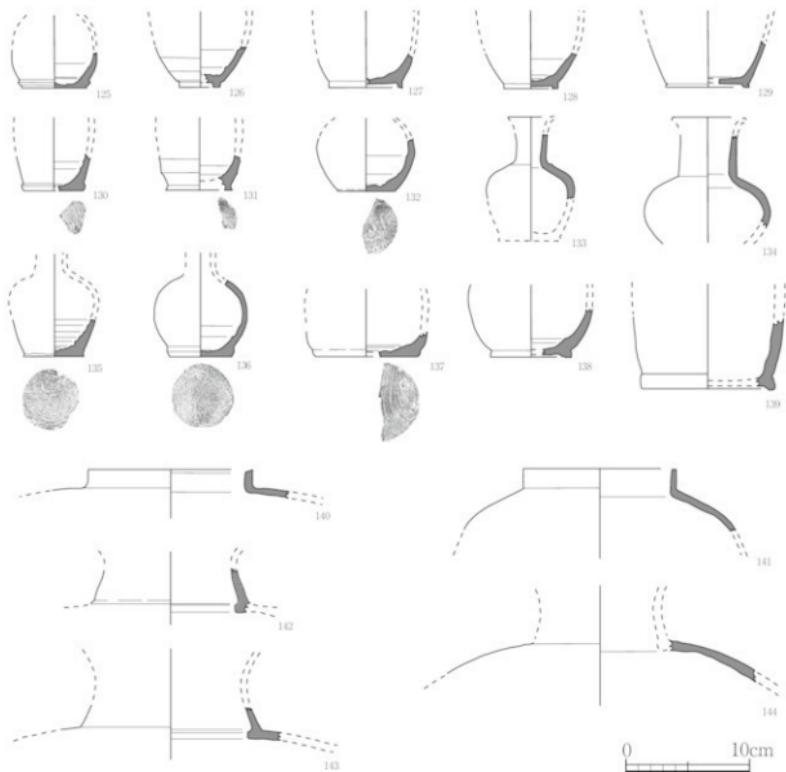


図27 奈良・平安時代の須恵器 2

平安期の緑釉陶器が六点出土している(図29・図版38上)。すべて硬質の碗で、2区から出土した。遺構には伴っていない。口縁部のわかる一点は体部を内傾、口縁端部を弱く端反りさせる。器高3.6cm、口径7.0cm、底径7.1cmを測る(145)。暗灰色の胎土に内外面とも薄く緑釉を施し、高台とその内側は削りだして釉を剥ぐものが3点ある(145)～(147)。他の一点は高台の高さが1.1cm、器壁が厚く、内面のみに緑釉がかかる(148)。貼り付け高台と考える。いずれも9世紀後半の畿内産だろう。

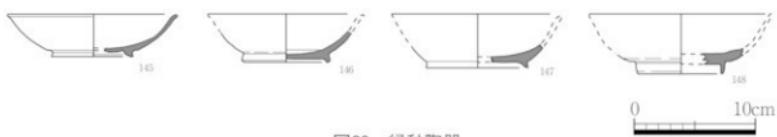


図29 緑釉陶器

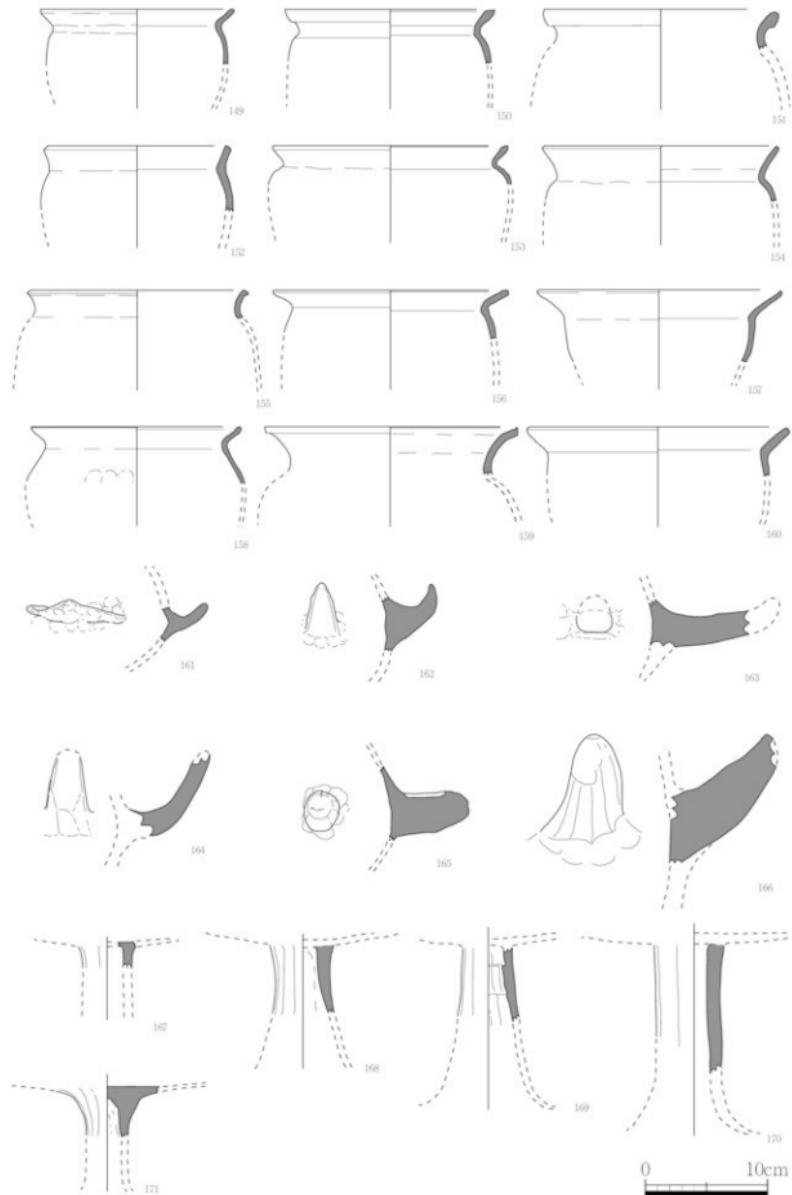


図30 奈良・平安時代の土師器

土師器は大半が表面剥離したり、磨耗が激しく、出土量に対し詳細な観察ができる個体は少ない。杯・甕・高盤（高杯A）などがある（図30・図版39）。

甕は把手を伴う大型の甕Bと把手のない小型の甕Aに大別でき、後者が大半である。体部は球形と長胴形があり、外面をハケメ調整し、内面に削りの痕跡や指頭圧痕が残る。甕Bは口縁端部の形態で区分することが出来る。端部を丸く仕上げるもの（149）・（151）・（153）・（154）・（158）、端部を上につまみ上げて尖らせるもの（156）・（157）・（159）、平らにして面をなすもの（150）・（152）・（155）・（160）である。長胴形甕の口縁部も同様の多様性があり、鍔を伴うものもある。概して、外面から口縁部にかけて煤けたものが多く、煮沸容器と考える。内・外面の調整は摩滅でよく観察できない。

甕Bは体部中央の左右に舌状の把手、棒状の把手を貼りつける。形状や大きさはさまざまである（161）～（166）。

高盤（高杯A）は皿に脚を伴うもので、脚部は筒状である（167）～（171）。概して、器高10cm以上の大型品が多く、奈良時代後半以降と考える。

2区の北隅で発見された土坑2-2からまとまって土師器が発見された（図31・図版33・40上）。杯・高盤・甕・鉢がある。杯は体部の立ち上がりが曲線的なものと、平らな底部から直線的に屈曲するものがある。前者は口縁端部を平らにし口径12.8cmを（172）、後者は口縁端部に段をつけたつまみ上げ、口径16.6cmを測る（173）。2点の高盤は脚部のみで、脚高8.5cm・9.0cmを測る（174）・（175）。脚は筒形で暗赤褐色、丁寧に面取りされる。

甕は小型で暗茶褐色、外面は丁寧にハケメされ調整、煤ける（176）。口縁端部は上方につまみあげ、口径を17.6cmを測る。

鉢は球形の大型で、暗茶褐色である。口縁部は内傾し、端部を平らにつくりだし、口径28.6cmを測る（177）。

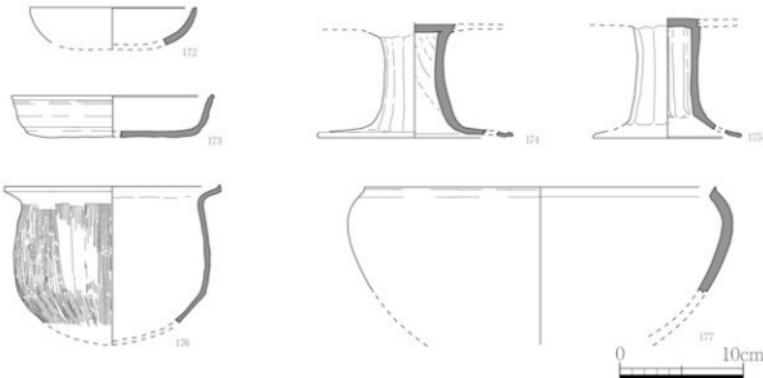


図31 土坑2-2出土土器

#### e 中世の遺物（図版40～43）

中世の遺物には土師器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・中国製磁器（青花・白磁・青磁）、などがある。土師器は皿・壺・甕など、瓦器は皿・碗・鉢・瓦質土器は甕・羽釜など、陶器には東播系すり鉢、常滑焼甕がある（図32）。中国製磁器は碗・皿がある（図33）。

土師器皿はいずれも摩滅が著しく、白色気味のもの、褐色気味のものがある。口径7.2～10.1cm、器高1.0～2.0cmを測る（178）～（187）。内面は粗くナデ、外面は立ち上がりを強く横ナデ、底部は無調整で、指押さえのあとが残るものもある。口縁端部は丸く仕上げるもの、端部を端反りさせるものは口縁端部にススが付着する。灯明皿だろう（187）。

土師器鉢は赤褐色で口径21.3cmを測る（207）。口縁部外面を強く横ナデし、段をつけ、端部は丸く仕上げる。内面は丁寧にナデる。

土師器羽釜は小型、明赤褐色で口径22.0cmを測る（213）。羽部は厚く角張る。口縁部は短く内傾し、端部は平らである。

瓦器皿は口径8.4～10.1cm、器高1.5cm程度を測る（188）～（197）。内面は粗くナデ、外面は立ち上がりを強くナデ、口縁端部は丸く仕上げる。底部は無調整で、指押さえのあとが残るものもある。

黒色土器は内面のみに炭素を吸着させた「内黒」と呼ばれるA類（200）・（201）がある。口径や器高を確定できるものではなく、底径は4.8～7.2cmである。

瓦器碗は黒色土器よりやや小型の高台をもち、ヘラ磨きは簡略気味である（198）・（199）・（202）～（205）。確認できたものはすべて和泉型である。高台は断面三角形で、形骸化する。口径に対し、高台径が極端に小さい1点は高台径2.8cmを測る（204）。

瓦質土器壺は体部が球形で、外面は丁寧に磨かれる（206）。

瓦質土器甕は大型と小型がある。体部外面にタタキ痕跡がある。小型は端部を下方に折り返す（208）、大型は屈曲部は分厚く、口縁端部近くで強く折り返して平らな端面をつくりだす（216）。口径19.6cm、34.1cmを測る。

瓦質土器羽釜は口縁部をゆるやかに内傾させ、外面はほぼ等間隔にいくつかの段を形づくる。口縁端部は平らで、内面はハケメ痕が残る。外面の鉄下はヘラ削りを施す（214）・（215）。

東播系すり鉢は灰白色で、体部から口縁部が直線的に立ち上がり、内外面共に粗くナデる。口縁端部は折り返して丸くし、下方向にやや尖らせて厚く仕上げる（209）～（211）。

常滑焼甕はアズキ色の胎土で、外面の所々に暗緑色の釉がかかる。小片ばかりを10片以上確認している。外面はタタキ目をナデ仕上げし、内面のタタキ痕跡も粗くナデ消す（図版38下）。

中国製磁器には青花・白磁・青磁がある（図33・図版43上）。

染付磁器（青花）には小碗がある（217）・（218）。口縁部の小片は強く端反りし、外面に唐草を描く。口径12.0cmを測る。底部の小片は内面に唐草紋を描く。高台端部の小片は欠損するが高台径約4.2cmとなる。いずれも国産磁器が出現する直前の16世紀代の江西省景德鎮窯系だろう。

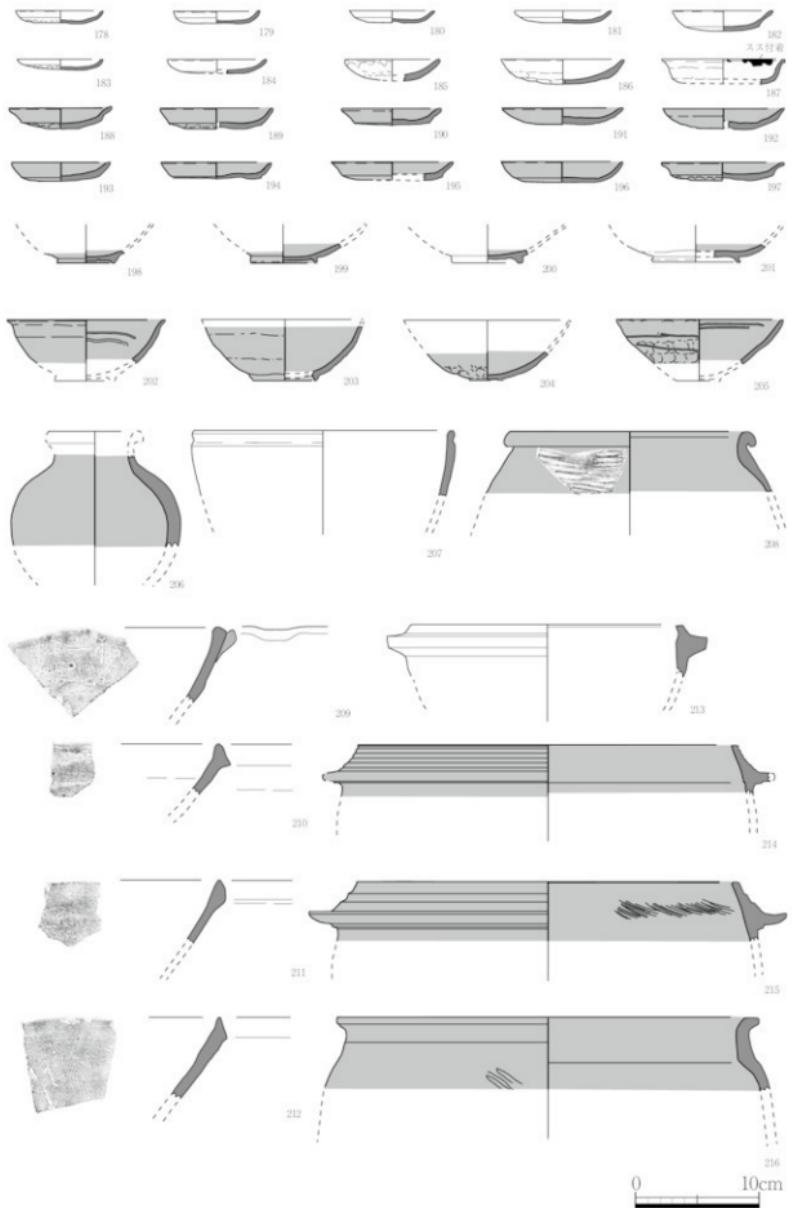


図32 中世の土器

白磁は碗のみで、華南産白磁と呼ばれる一群である。底部を浅く削りだしして高台をつくり、口縁部は外側に1cm程度折り曲げて、厚い玉縁とする特徴がある。(219)～(225)。福建省廈門碗窯に類例が知られ、13世紀前半までのものだろう。

青磁は碗と小碗・皿がある。表面の釉薬が青白色で胎土が灰白色の浙江省龍泉窯系と(235)～(241)、釉薬が緑褐色で胎土が暗灰色の福建省同安窯系がある(226)～(234)。

碗は底部から体部にかけて曲線的に立ち上がり、口縁部は直線的で端部は丸く仕上げる。概して底部は厚手で、見込みに「福寿」のスタンプを押して紋様とするもの(240)、外面に硬直化した蓮弁紋を飾るものがある(228)・(232)・(238)・(239)・(241)。いずれも削りだしによる無釉の高台である。見込みにスタンプのある1点は高台径6.4cmを測る(240)。蓮弁紋を飾る碗は高台径が4.3cmとなる(232)。鎌倉時代後半から室町時代前半にかけてのものだろう。

小碗・皿は小片で明瞭に区別しにくい。口縁部が内傾するもの(227)、口縁部が端反りするものがある(231)・(236)・(237)。

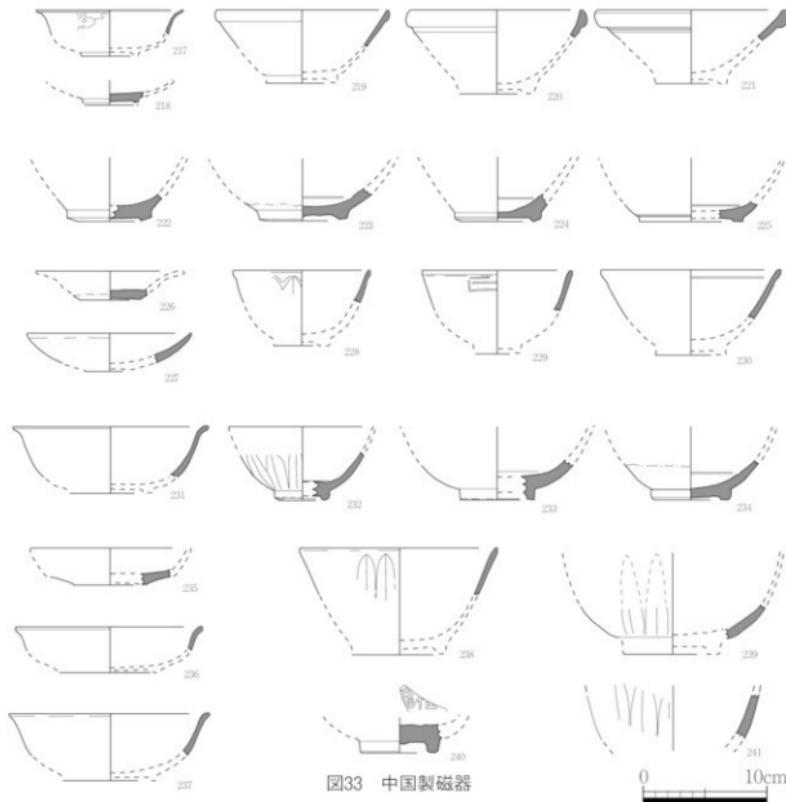


図33 中国製磁器

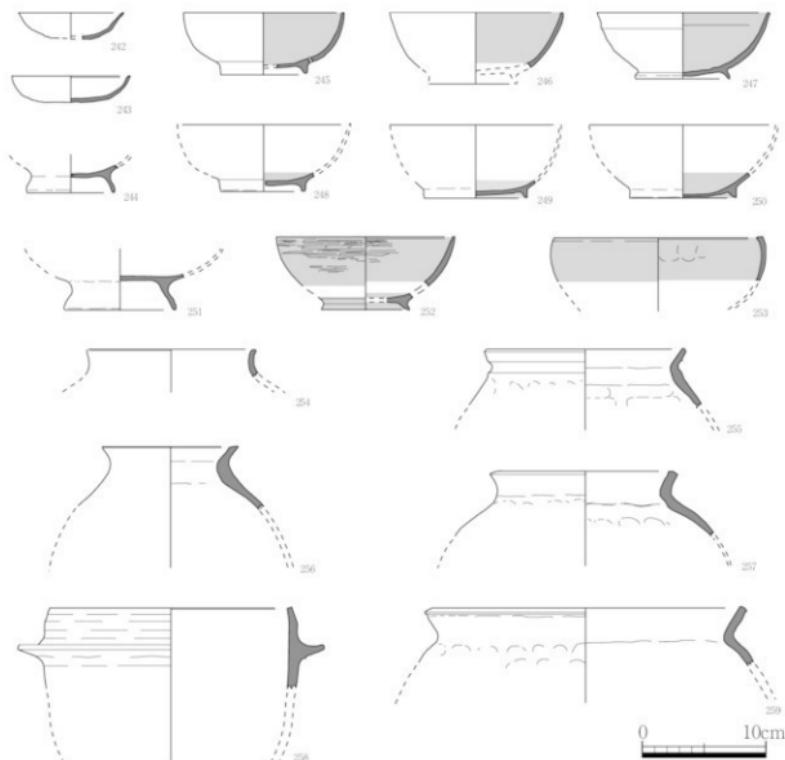


図34 土坑1-1出土土器

1区南端で発見された土坑1-1から黒色土器碗・鉢と、土師器杯・甕・羽釜などがまとまつて発見された(図34・図版40下・41上)。黒色土器の碗は大半が「内黒」のA類で(245)～(247)、(248)～(250)、「両黒」のB類を少量含む(252)。10世紀後半ころのものだろう。

土師器皿は淡褐色で、口径8.4cm・9.8cm、器高2cm程度である(242)・(243)。

土師器碗は黄褐色で、高い高台をもつ(244)・(251)。

土師器甕は中型と大型がある。口縁部は短く屈曲し、端部は丸く仕上げるものと、平らに面をなすものがある(255)・(257)・(259)。また、直立する短い口縁部のものと、外反するものもあり、壺かもしれない(254)・(256)。

2区中央で発見された土坑2-15からは13世紀はじめころの瓦器碗3点が発見されている(図35・図版42上)。いずれも、外面は指押さえが明瞭で、口縁部を強く横ナデする。内面は粗くへ

ラ磨きし、見込みに格子目の磨きが明瞭である。口縁端部は丸く  
つまみだす (260) ~ (261)。

金属製品には鉄釘と銅銭がある (図36・図版31)。いずれも2  
区の遺物包含層から発見された。鉄釘は断面方形と円形がある。  
方形は一辺0.5cm程度で、断面は鍛造時に折り返した層がみられ  
る (262)・(263)。断面円形のものは先端部分の小片で、釘かど  
うかか、中世のものかどうかは判然としない。

銅銭は1078年初鋤の「元豊通宝」銭である。両面とも鋤出され、  
方孔の縁取りも明瞭で中世後半以降の模鋤銭とは峻別できる  
(265)。

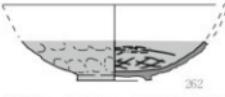
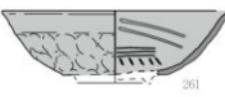
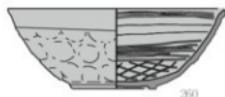


図36 土坑2-15出土瓦器

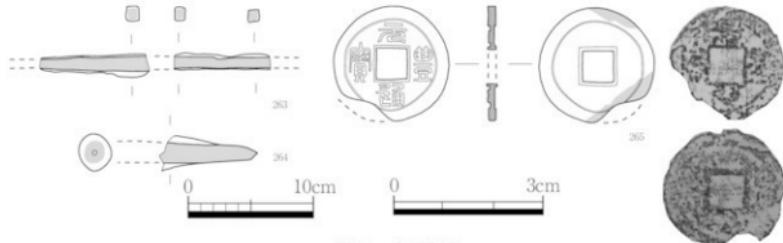


図36 金属製品

#### f 近世の遺物 (図版44上)

近世の遺物には肥前陶器、肥前磁器、瀬戸・美濃焼陶器、土師質土器などがある (図37)。

肥前陶器は17世紀初頭～前半の唐津焼皿・碗がある。肥前磁器には碗、皿がある。草花紋碗、いわゆる「くらわんか碗」が多い。その他、瀬戸・美濃焼碗、産地不明の陶器皿、仏飯具などがある。土製品には泥面子がある。

肥前陶器にはいわゆる唐津焼皿・碗がある。重ね焼きの胎土目技法によるもの (266) ~ (269)、砂目技法のもの (270) ~ (273)、蛇の目釉剥ぎによるものがある (274)・(275)。砂目技法のものにはいわゆる三島手と呼ばれる搔落し技法のものもある (272)・(273)。

その他、産地不明の灰釉陶器皿がある。灰白色の薄手で、口縁端部を強く端反させる (276)。井戸1-1の井戸柱埋土から発見された。

瀬戸・美濃焼碗にはいわゆる瀬戸天目碗がある。口縁部の小片で、口縁部外面を強く横ナデして端部を尖り気味にし、暗茶褐色の褐釉をかける (277)。

その他、仏飯具の御神酒徳利と灯明台がある。徳利は胎土が軟質の乳白色で表面に濃緑褐色の釉がかかる (290)。底部裏面は削り出しで形成する。灯明台は胎土が灰白色、淡褐色の釉がかかる。底部裏面は無釉で糸切り痕が残る (291)。いずれも19世紀後半以降のものだろう。

「くらわんか碗」などと呼ばれる肥前磁器碗は直立する高い高台で、体部が厚く、立ち上がり

が強く屈曲して口縁部が薄いつくりである。外面に粗い草花紋や網目紋がある（282）～（288）。もっとも大きなものは高台径4.9cmを測る（288）。薄手の底部小片の一点は井戸2-2の井戸枠埋土中層から発見された（282）。網目紋のある一点は今池堤2-1上層から（287）、もう一点は今池堤1-1最下層から発見された（288）。

肥前磁器小碗は唐草紋があり、体部は口縁部に向けて直線的に立ち上がる（280）。高台内に「大明年造」銘がある。薄手の葡萄唐草紋碗は立ち上がりが曲線的で口縁部はほぼ直立する（281）。「大明□□」銘があり、今池南堤の堤1-1上層から出土した。

肥前磁器皿は見込み部分の小片で蛇の目釉剥ぎである。内面中央に松枝紋を描く（289）。井戸1-1の井戸枠埋土中層出土である。

泥面子は明赤褐色で、一つは中央に「寛永通宝」のスタンプを、もう一つは紋様不明のスタンプを施す。直径3.4cmと2.6cmを測る（278）・（279）。泥面子は江戸では享保期（1716年）以降に流行する子供の玩具として知られる。

他に京焼系陶器見込内に「苛」？墨書を記すものがある（図版45）。

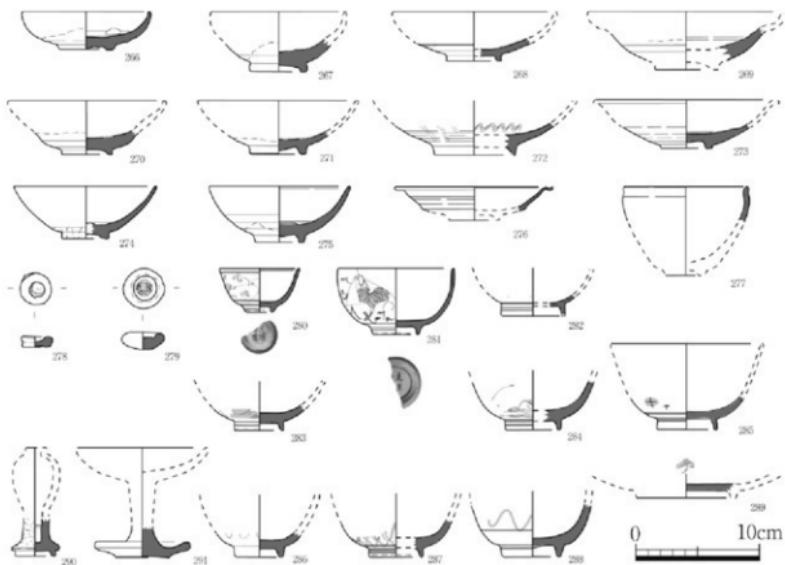


図37 近世の陶磁器

### g 瓦磚類（図版44・45）

瓦は調査区各地から発見されている。平瓦・丸瓦・軒瓦・鬼瓦・井戸瓦がある（図38～41）。遺構に伴うものは近世の井戸瓦のみで、古代から近世まで各時期のものが含まれるため、まとめて報告する。

軒平瓦は小片2点がある。1点は均整唐草紋を（292）、もう1点は波状紋を主紋様とする（293）。同范と思われる波状紋瓦が近接する平成7年調査1区で発見されている。いずれも小型で、外縁も低く、中世後半のものだろう。

軒丸瓦は3点発見されている。瓦当の残るものは、外区の図線・連珠紋・巴紋の一部がわかる程度である（294）～（296）。直径や時期は決定しがたい。

鬼瓦と考える小片は厚さ約1.5cmの板に層状の突起を貼り付け、沈線を刻む（297）。

丸瓦は平瓦の量に対して少ない。凸面はタタキ目をナデ消し、凹面に布目が残る。玉縁をつくりだし、厚さは1.6cmを測る（298）～（300）。

平瓦は凸面に繩目を残すもの、ナデ消すものがある（301）～（307）。凹面は布目や桶巻きつくりの模骨痕がある。いずれも端部はヘラ削りで角を整える。厚さにはばらつきがあり、薄いもので1.6cm、厚いものは3.2cmを測る。全容がわかる一枚は長辺38.0cm、幅25.0cmを測る（302）。凸面の中央に朱線が残る（図版45上）。飛鳥～奈良時代のものだろう。今池堤2-1下層の溝2-20から発見された（図39）。

井戸2-1井戸枠内最下層から井戸瓦がまとまって発見された（図41・図版45下）。40個体以上を確認している。地表の井戸枠に利用されたものだろう。凹面・凸面ともナデ調整で、四周をヘラ削りして形態を整える。長辺約28cm、幅約26cm、厚さ約2cmを測る、規格的な一群である（308）～（313）。

### h 今池埋め土出土遺物（図版46）

航空写真の観察などによって今池が本格的に埋め立てられたのは昭和40年代以降とわかる。しかし、今池の底ではさまざまな廃棄物が確認された。なかでも、1区北西隅と2区南西隅は焼土を伴う明治～昭和前期の大量の廃棄物が確認できた。これらは継続的に埋め立てられたものではなく、一気に客土とともに廃棄されたと考える。これらを機械掘削の過程でサンプル的にとりあげた。

印判手帳は明治後半の銅版印刷によるもの、その後のプリント印刷によるものもある。家紋と草花紋（314）、桜と日の丸（315）を配した幾何学紋、網籠紋（316）、富士と磯辺を描く田子の浦図（317）～（319）などがある（図42・図版46上）。

また、2区東南部から、戦中の遺物がまとめて出土した（図43・44・図版46下）。

いわゆる「軍杯」などと呼ばれる鉄カブト形の猪口は「■兵四■■記念」・「質素」銘がある。欠字を含め「輪重兵四退營記念」・「騎兵四歸還記念」などが考えられる。輪重兵第四聯隊、騎兵

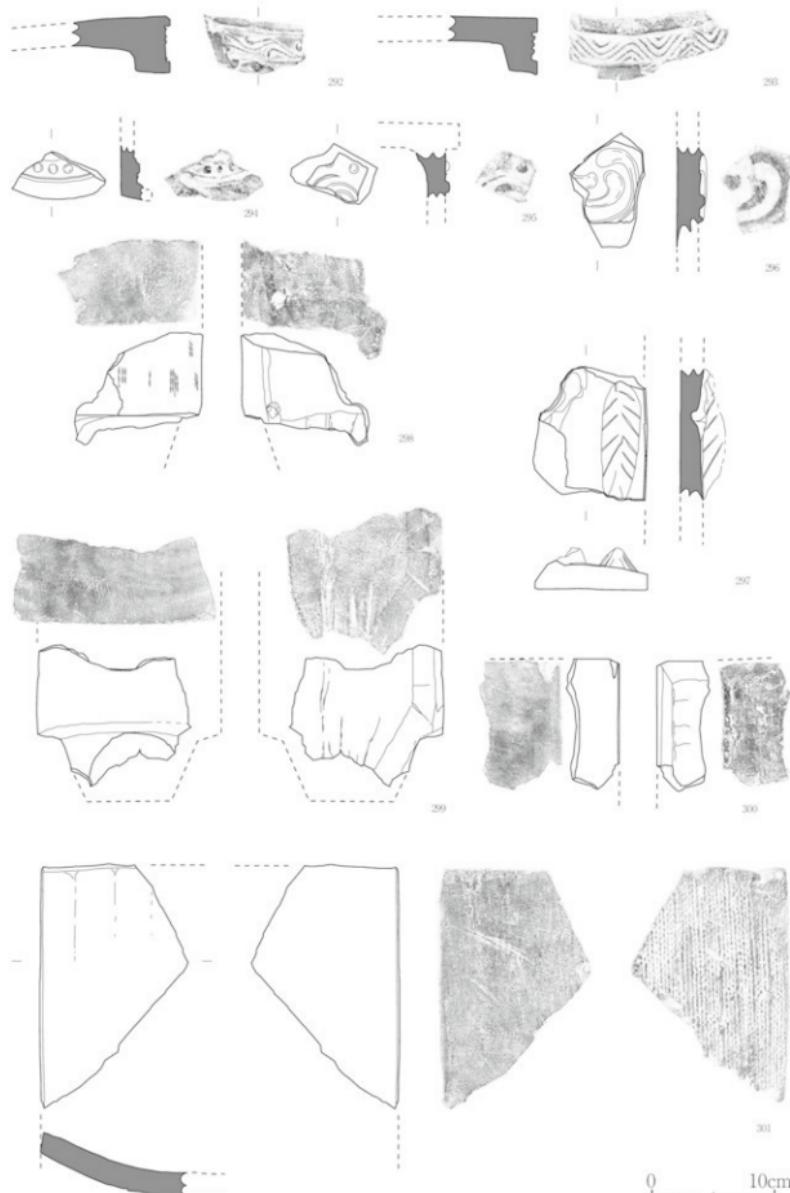


図38 軒瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦

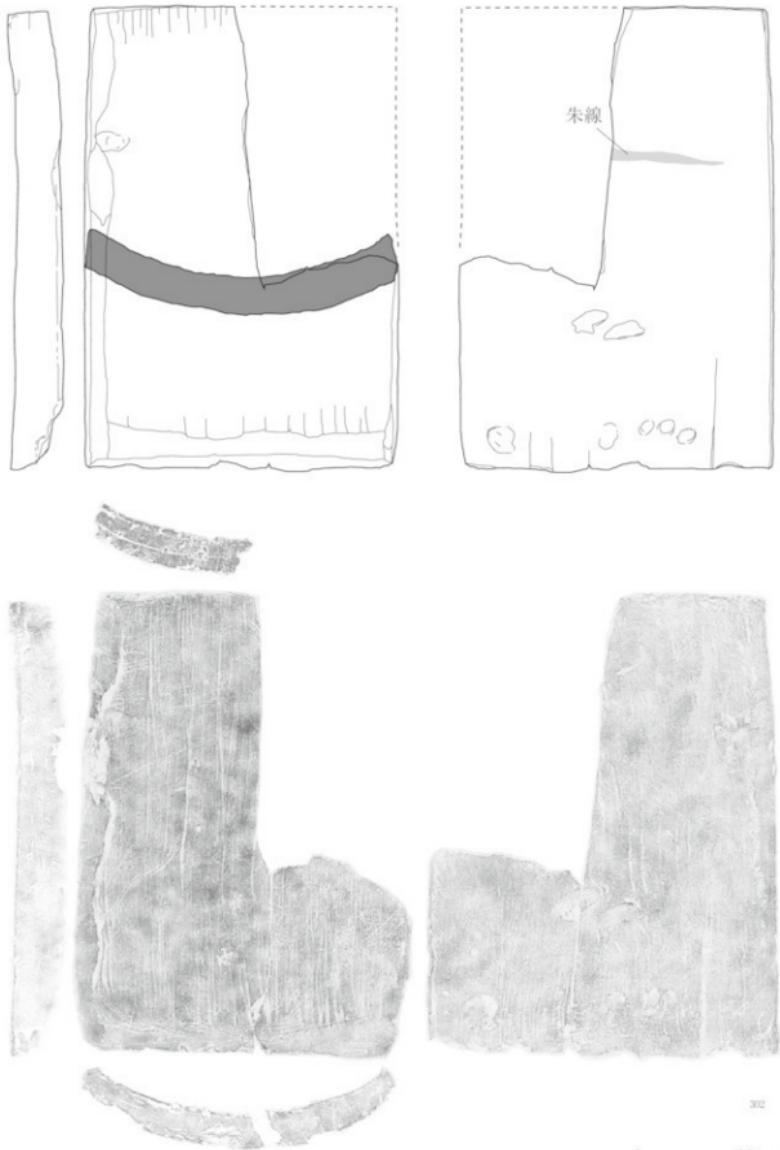


図39 平瓦 1

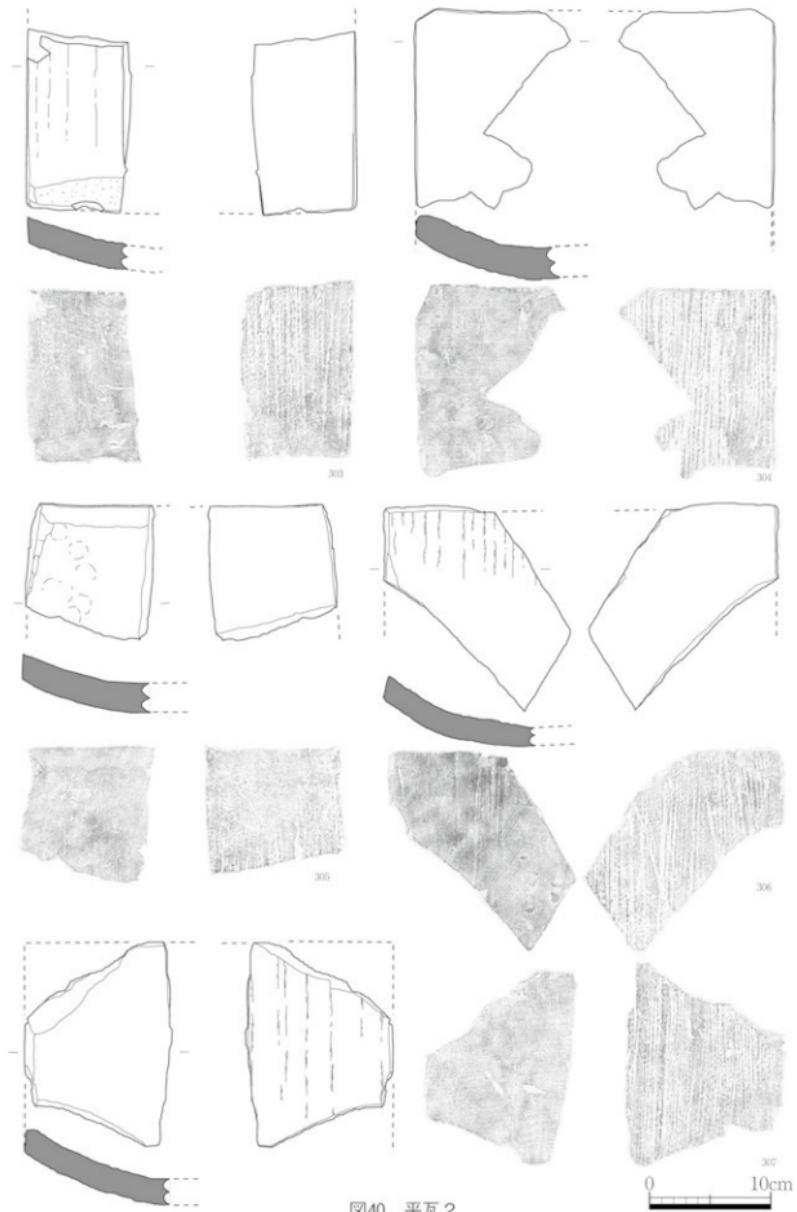


図40 平瓦2

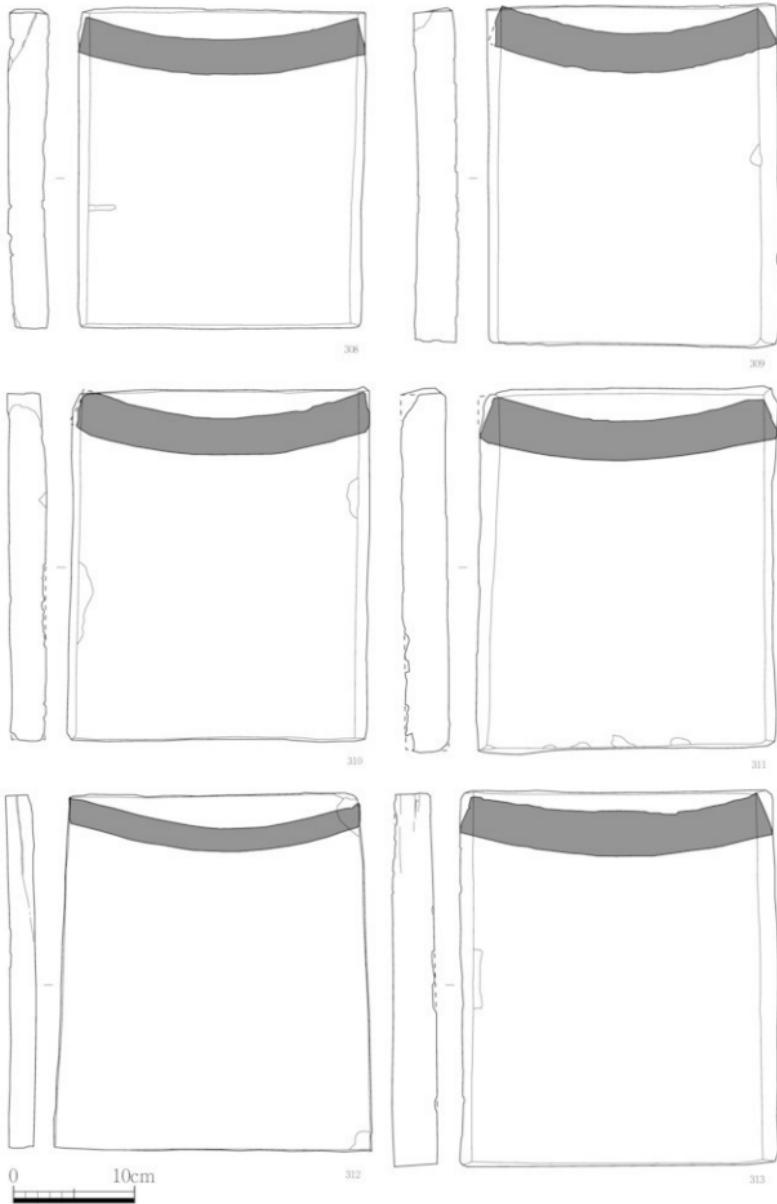
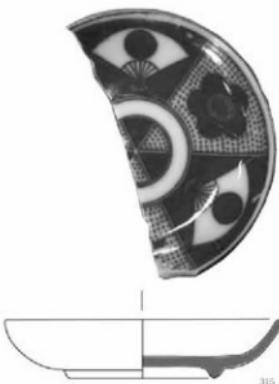


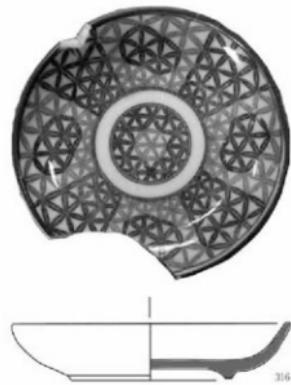
図41 井戸瓦



314



315



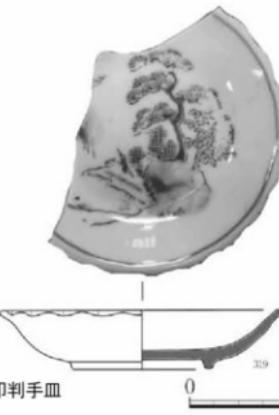
316



317



318



0 5cm

図42 今池埋土出土印判手皿

第四聯隊はともに大阪の部隊で、騎兵第四聯隊は今池から西南に2kmの堺市金岡町に衛戍していた。もともと、銘は軍人勅諭五箇条にある「忠節」・「禮儀」・「武勇」・「信義」・「質素」を記した五個セットのものだろう。旧日本軍が鉄カブトを採用する時期は昭和5年（1930年）以降とされ、この磁器もそれ以降から終戦までの製作だろう。兵役を終えて離隊するときや外地から凱旋したときなど、退役兵士が郷里で配る記念品である。

「統制陶磁」などと呼ばれる生産者別標示記号（統制番号）を記した陶磁器が数多く見られた。「統制陶磁」の生産は昭和15年の国家総動員法による経済統制で、生産から販売までを国の管理下におくもので、終戦まで続けられた（図版46下）。

ガラス瓶の代用と思われる小瓶には壺形の磁器と筒形の陶器がある（321）・（322）。前者は「セ885」、後者は「岐682」の刻印がある。「セ」・「瀬」は瀬戸窯を「岐」は美濃窯を示す。「岐682」は記録が残り、旧土岐郡妻木町の仙石周太郎窯の製品である。

統制番号のある陶磁器は碗などで「岐64」・「岐133」・「岐507」・「瀬297」・「瀬905」を高台内に記す（323）・（324）・（326）～（328）。「岐64御陶」は旧土岐市笠原町の小竹宇一窯、「岐133」は旧多治見市の加藤惣吉窯、「岐507」は旧土岐市土岐口の森川宮吉窯の各製品である。

また、同時期に名古屋製陶所で焼かれたいわゆる名陶食器がある（325）。直径8.2cm、器高4.9cmを測る完形で、口縁外面に深緑色の釉薬で二本の囲線を描く。軍用品によくみられる。

その他、12.7mm銃の薬きょうがある（図44）。50口径（0.5インチ）弾で、米軍M2プローニング重機関銃に使用されたものと考える。この機関銃はB-29重爆撃機や海軍艦載機などにも搭載されている。しかし、旧日本軍・米軍とも同口径の銃弾を使用している。旧日本軍のものとしても昭和16年以降である。また、戦後の進駐軍に関連するものかもしれない。

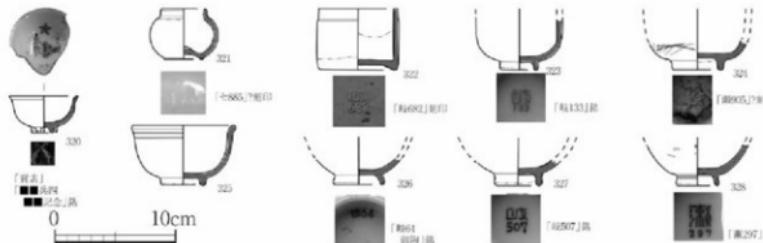


図43 今池埋土出土統制陶器



図44 今池埋土出土12.7mm銃の薬きょう（実大）

### 三章　まとめ

今回調査区は大和川今池遺跡のほぼ中央、水みらいセンター内の調査では南部の様相が明らかにされた。その結果、この地域では比較的遺構・遺物が希薄で、各時代の生活痕跡は明瞭に残されていないことがわかった。

ただし、縄紋時代・古墳時代後期・飛鳥時代・奈良～平安時代、鎌倉時代、江戸時代から近・現代にいたるさまざまな遺物を包含しており、付近に各時代の集落域があったものが、のちの水田耕作によって削平されたと考えられよう。

発見された土器類は弥生土器、須恵器・土師器、中世の中国製磁器や国産陶器、近世から現代に至る陶磁器がある。また、中世の瓦と近世の井戸瓦、井戸枠部材となる木製品である。加えて、石製品に縄紋時代の打製石器、古墳時代の紡錘車、砥石、金属器には鉄釘と中世渡来銭がある。

遺構は古墳時代後期の土坑・溝、奈良時代の掘立柱建物・土坑・溝、平安時代の土坑・溝、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑、江戸時代の井戸、条里区画の溝、今池堤などが検出されている。

これまで、今池は明確な造営時期が判明しておらず、鎌倉時代の可能性も指摘されていた。今回、南側堤の下から発見された井戸1-1に1700年以降の肥前磁器が見られたことより、大和川付け替え後に堤が造営された池であることが判明した。ただし、今回調査部分は今池の東端で堤が増築された可能性もある。いずれにせよ、ため池や木組み井戸の造営年代を推定できることにより、近世のこの地域に暮らす人々が大和川や西除川の流路変更後も灌漑に苦慮していた実態を示す資料として重視できる。

大和川今池遺跡周辺は狭山池造営後に本格的な灌漑がはじまり、現代まで続くことが知られる。狭山池は堤の調査によって発見された木樋を年輪年代測定法で分析することにより、616年に伐採された木を使って造営されたという測定結果が得られている。これは池内に沈んだ須恵器窯や池堤斜面にあらたに造営された須恵器窯の出土品の年代とおおよそ符合する。したがって、下流の灌漑も推古天皇時代にはじまることが推定できる。

しかし、これまでの調査では古段階の水田遺構ははっきりとしておらず、条里の施行や変更の実態もよくわかっていない。今回の調査では古墳時代後期から飛鳥時代初頭の土器が発見されており、水田開発の一端を裏付けるものかもしれない。

また、条里施行後の水田と集落域との関係も明快でない。たとえば、これまでの調査でも、奈良時代初頭や、室町時代後半の遺構・遺物はほとんどなく、居住域の移動によるものか、耕作の放棄されていた時代があったのか検討を要する。しかし、これまでに得られた遺構・遺物をみるとかぎり、概して、連続と水田耕作が続けられたことは確かだろう。

団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率	団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率
31	1	268	2	大土坑 2-1	サヌカイト石鏡	1	33	43	241	2	溝 2-11	須恵器杯身	2
31	2	12	2	地山直上	サヌカイト石鏡	1	32	44	275	2	溝 2-11	須恵器杯身	3
31	3	11	1	地山直上	サヌカイト石鏡	1	32	45	168	2	溝 2-11	土師器高杯	2
31	4	10	1	地山直上	サヌカイト石鏡	1	32	46	276	2	土坑 2-31	土師器高杯	3
31	5	270	2	堤 2-1 下層	弥生土器高杯	3	32	47	277	2	溝 2-11	土師器高杯	3
31	6	13	2	地山直上	弥生土器壺	3	32-33	48	2	2	溝 1-1 最下層	須恵器杯蓋	2
34	7	17	2	地山直上	須恵器把手付碗	2	32	49	4	2	大土坑 2-1	須恵器杯蓋	3
33	8	33	2	茶褐色	須恵器把手付碗	2	32	50	1	2	大土坑 2-1	須恵器杯蓋	1
34	9	297	2	溝 2-23	須恵器ハソウ	3	32	51	3	2	大土坑 2-1	須恵器杯蓋	2
34	10	300	2	地山直上	須恵器壺	3	32-33	52	5	2	大土坑 2-1	須恵器杯蓋	3
34	11	296	2	地山直上	須恵器ハソウ	3	32-33	53	7	2	大土坑 2-1	須恵器杯身	1
34	12	19	2	地山直上	須恵器ハソウ注口	3	32	54	37	2	大土坑 2-1	須恵器杯身	1
34	13	293	2	地山直上	須恵器杯蓋	3	32	55	6	2	大土坑 2-1	須恵器杯身	1
34	14	38	2	地山直上	須恵器杯蓋	3	32-33	56	9	2	大土坑 2-1	須恵器杯身	2
15	16	2	地山直上	須恵器杯身	3	32	57	8	2	大土坑 2-1	須恵器杯身	2	
34	16	32	2	地山直上	須恵器杯身	3	32	58	34	2	大土坑 2-1	土師器手づくね	2
33	17	42	2	地山直上	須恵器杯身	2	32	59	35	2	大土坑 2-1	土師器高杯	2
34	18	31	2	地山直上	須恵器杯身	3	32	60	21	2	大土坑 2-1	須恵器壺	3
34	19	295	2	地山直上	須恵器短脚高杯	3	32	61	36	2	大土坑 2-1	土師器壺	3
34	20	18	2	地山直上	須恵器短脚高杯	3	35	62	59	2	地山直上	須恵器杯蓋	3
34	21	294	2	堤 2-1 下層	須恵器短脚高杯	3	35	63	60	2	堤 2-1 上層	須恵器杯蓋	3
34	22	292	2	地山直上	須恵器杯身	3	35	64	39	2	地山直上	須恵器杯蓋	3
34	23	25	2	地山直上	須恵器壺	3	35	65	56	1	地山直上	須恵器杯蓋	2
34	24	23	2	地山直上	須恵器壺	3	35	66	67	2	溝 2-1	須恵器杯身	3
34	25	28	2	溝 2-20 下層	須恵器壺	3	35	67	65	1	堤 1-1	須恵器杯身	3
34	26	24	2	地山直上	須恵器壺	3	35	68	57	1	堤 1-1	須恵器杯蓋	2
34	27	27	2	地山直上	須恵器壺	3	35	69	58	1	堤 1-1 最下層	須恵器杯蓋	3
34	28	302	2	茶褐色	須恵器壺	3	35	70	66	1	堤 1-1	須恵器杯身	3
34	29	301	2	茶褐色	須恵器壺	3	35	71	63	2	溝 2-11	須恵器杯身	3
34	30	298	2	堤 2-1 下層	須恵器壺	3	35	72	62	2	堤 2-1 下層	須恵器杯身	3
34	31	299	2	堤 2-1	須恵器壺	3	35	73	61	2	地山直上	須恵器杯身	3
34	32	20	2	地山直上	須恵器壺	3	35	74	52	2	地山直上	須恵器ハソウ	3
31	33	242	2	溝 2-11	滑石製鉢鋸	2	35	75	47	2	堤 2-1 上層	須恵器短脚高杯	3
31	34	92	2	茶褐色	砾石	2	35	76	40	2	地山直上	須恵器短脚高杯	3
31	35	91	2	溝 2-36	砾石	1	35	77	49	2	溝 1-1 最下層	須恵器短脚高杯	3
32	36	273	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	3	35	78	51	1	堤 3-1 上層	須恵器提瓶	3
32	37	271	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	3	35	79	50	2	茶褐色	須恵器長脚高杯	3
32	38	15	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	3	35	80	48	2	茶褐色	須恵器長脚高杯	3
32	39	14	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	3	35	81	45	2	地山直上	須恵器長脚高杯	3
32	40	272	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	3	35	82	46	2	堤 2-1	須恵器長脚高杯	3
33	41	41	2	溝 2-11	須恵器杯蓋	2	36	83	44	2	堤 2-1	須恵器こね鉢	3
32	42	274	2	溝 2-11	須恵器杯身	3	36	84	43	2	茶褐色	須恵器こね鉢	3

実測遺物対照表 1

残存率 1 = 完形 2 = 1/2 以上残存 3 = 1/2 以下の小片

団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率	団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率
35	85	291	2	茶褐色土	須恵器イダコ壺	3	44	126	279	2	茶褐色土	須恵器小壺	3
35	86	55	2	地山直上	須恵器納壺	2	37	127	144	2	地山直上	須恵器小壺	3
36	87	54	2	地山直上・溝2-11	短頸壺	2		128	146	2	堤2-1下層	須恵器小壺	3
36	88	53	2	堤2-1上層	須恵器附付壺	3	37	129	80	2	堤2-1下層	須恵器壺	3
36	89	26	2	茶褐色土	須恵器壺	3	37	130	148	2	地山直上	須恵器小壺	3
36	90	22	2	地山直上	須恵器壺	3	37	131	280	2	堤2-1下層	須恵器小壺	3
36	91	166	1	堤1-1	土師器高杯	3		132	149	2	溝2-21	須恵器小壺	3
36	92	169	2	茶褐色土	土師器高杯	3	37	133	153	2	地山直上	須恵器小壺	3
36	93	167	2	茶褐色土	土師器高杯	3	37	134	152	2	地山直上	須恵器小壺	3
36	94	237	2	土坑2-225	土師器壺	3	37	135	150	2	堤2-1	須恵器小壺	3
33	95	243	2	土坑2-49	土師器壺	2	37	136	151	2	地山直上	須恵器小壺	2
36	96	75	2	溝2-20上層	須恵器杯蓋	3	37	137	141	2	地山直上	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	97	74	2	堤2-1下層	須恵器杯蓋	3	37	138	145	2	溝2-20下層	須恵器小壺	3
36	98	70	2	茶褐色土	須恵器杯蓋	3	37	139	140	2	堤2-1・地山直上	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	99	72	2	茶褐色土	須恵器杯蓋	3	37	140	137	2	堤2-1	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	100	73	2	地山直上	須恵器杯蓋	3		141	136	2	溝2-20下層	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	101	69	2	茶褐色土	須恵器杯蓋	3	37	142	142	2	地山直上	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	102	77	2	地山直上	須恵器杯身	3	37	143	139	2	茶褐色土	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	103	82	2	地山直上	須恵器杯身	3	37	144	143	2	茶褐色土	須恵器壺(狼投窓系?)	3
36	104	81	2	茶褐色土	須恵器杯身	3	38	145	208	2	地山直上	綠釉碗	3
36	105	90	2	茶褐色土	須恵器杯身	3	38	146	207	2	地山直上	綠釉碗	3
36	106	89	2	地山直上	須恵器杯身	3	38	147	210	2	茶褐色土	綠釉碗	3
36	107	83	2	地山直上	須恵器杯身	3	38	148	209	2	地山直上	綠釉碗	3
36	108	88	2	地山直上・茶褐色土	須恵器杯身	3	39	149	285	2	堤2-1下層	土師器壺	3
36	109	85	2	地山直上	須恵器杯身	3	39	150	173	2	地山直上	土師器壺	3
36	110	84	2	茶褐色土	須恵器杯身	3	39	151	172	2	地山直上	土師器壺	3
37	111	160	2	茶褐色土	須恵器壺	3	39	152	306	2	地山直上	土師器壺	3
37	112	159	2	地山直上	須恵器質土鉢	3	39	153	286	2	地山直上	土師器壺	3
37	113	157	2	地山直上	須恵器質土鉢	3	39	154	288	2	地山直上	土師器壺	3
37	114	156	2	地山直上	須恵器壺	3	39	155	287	2	地山直上	土師器壺	3
37	115	155	2	茶褐色土	須恵器壺	3	39	156	171	2	地山直上	土師器壺	3
37	116	154	2	茶褐色土	須恵器質土鉢	3	39	157	289	2	地山直上	土師器壺	3
37	117	161	2	堤2-1上層	須恵器壺	3	39	158	174	2	地山直上	土師器壺	3
37	118	158	2	茶褐色土	須恵器質土鉢	3	39	159	305	2	茶褐色土	土師器壺	3
37	119	78	2	地山直上	須恵器壺	3	39	160	307	2	茶褐色土	土師器壺	3
37	120	79	2	茶褐色土	須恵器壺	3	39	161	175	2	地山直上	土師器壺把手	3
37	121	170	2	溝2-11	須恵器壺	3	39	162	179	2	溝2-11	土師器壺把手	3
37	122	30	2	茶褐色土	須恵器壺	3	39	163	177	2	地山直上	土師器壺把手	3
37	123	76	2	茶褐色土	須恵器壺	3	39	164	180	2	地山直上	土師器壺把手	3
37	124	29	2	今池最下層	須恵器壺	3	39	165	178	2	地山直上	土師器壺把手	3
37	125	147	2	茶褐色土	須恵器小壺	3	39	166	176	2	茶褐色土	土師器壺把手	3

実測遺物対照表2

残存率 1=完形 2=1/2以上残存 3=1/2以下の小片

国版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率	国版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率
39	167	165	2	地山直上	土師器高盤	3	42	211	127	2	溝 2-20 上層	東播系スリ鉢	3
39	168	164	2	茶掲土	土師器高盤	3	42	212	124	2	溝 2-20 下層	瓦質土器スリ鉢	3
39	169	163	2	地山直上	土師器高盤	3	42	213	135	2	茶掲土	土師質土器壺	3
39	170	162	2	溝 2-20	土師器高盤	3	42	214	133	2	溝 2-20 上層	瓦質土器羽釜	3
	171	284	2	溝 2-17	土師器高盤	3	42	215	132	2	茶掲土	瓦質土器釜	3
40	172	247	2	土坑 22	土師器壺	3	42	216	134	2	地山直上	瓦質土器甕	3
40	173	248	2	土坑 22	土師器壺	3	43	217	182	2	茶掲土	景徳鎮系采貝器壺小鉢	3
40	174	246	2	土坑 22	土師器高盤	3	43	218	181	2	地山直上	景徳鎮系采貝器壺小皿	3
40	175	245	2	土坑 22	土師器高盤	3		219	185	2	溝 2-20 上層	華南産白磁碗	3
33	176	244	2	土坑 22	土師器壺	2	39	220	184	2	採集	華南産白磁碗	3
40	177	249	2	土坑 22	土師器壺	3	43	221	183	2	茶掲土	華南産白磁碗	3
42	178	96	2	溝 2-20 上層	土師皿	2	43	222	188	2	地山直上	華南産白磁碗	3
41	179	98	2	茶掲土	土師皿	2	43	223	186	2	地山直上	華南産白磁碗	3
	180	101	2	茶掲土	土師皿	3		224	187	2	堤 2-1	華南産白磁碗	3
	181	102	2	茶掲土	土師皿	3	43	225	282	2	茶掲土	華南産白磁鉢	3
42	182	103	2	堤 2-1 下層	瓦器皿	2	43	226	198	2	茶掲土	廈門産青磁皿	3
	183	97	2	溝 2-20 上層	土師皿	2	43	227	199	2	茶掲土	廈門産青磁皿	3
41	184	99	2	茶掲土	土師皿	3	43	228	203	2	地山直上	廈門産青磁皿	3
	185	100	2	堤 2-1	土師皿	3	43	229	202	2	茶掲土	廈門産青磁皿	3
41	186	94	2	茶掲土	土師皿	2	43	230	201	2	地山直上	廈門産青磁碗	3
41	187	95	2	溝 2-37	土師皿	3	43	231	200	2	茶掲土	廈門産青磁鉢	3
42	188	104	2	溝 2-16	瓦器皿	2		232	195	2	茶掲土	廈門産青磁碗	3
41	189	109	2	地山直上	瓦器皿	3		233	197	2	茶掲土	廈門産青磁碗	3
41	190	112	2	地山直上	瓦器皿	3	43	234	196	1	地山直上	廈門産青磁碗	3
41	191	107	2	地山直上	瓦器皿	3	43	235	193	2	茶掲土	龍泉窯系青磁皿	3
41	192	113	2	地山直上	瓦器皿	3	43	236	189	2	茶掲土	龍泉窯系青磁鉢	3
41	193	111	2	茶掲土	瓦器皿	3	43	237	281	2	茶掲土	龍泉窯系青磁鉢	3
41	194	110	2	地山直上	瓦器皿	3	43	238	190	1	地山直上	龍泉窯系青磁碗	3
41	195	105	2	地山直上	瓦器皿	3	43	239	191	1	地山直上	龍泉窯系青磁碗	3
41	196	108	2	地山直上	瓦器皿	3	43	240	194	2	茶掲土	龍泉窯系青磁碗	3
41	197	106	2	地山直上	瓦器皿	2	43	241	192	2	堤 2-1 上層	龍泉窯系青磁碗	3
41	198	114	2	茶掲土	瓦器皿	3	41	242	256	1	土坑 1-1	土師皿	2
41	199	115	2	茶掲土	瓦器皿	3	41	243	257	1	土坑 1-1	土師皿	1
41	200	116	1	堤 1-1 下層	黒色土器 A 類碗	3	40	244	267	1	土坑 1-1	土師器碗?	3
41	201	117	2	地山直上	黒色土器 A 類碗	3	40	245	262	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
41	202	122	2	茶掲土	瓦器皿	3	40	246	261	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
41	203	119	2	堤 2-1	黒色土器 A 類碗	3	42	247	263	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
41	204	120	1	茶掲土	瓦器皿	3	40	248	260	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
41	205	121	2	堤 2-1 上層	瓦器皿	3	40	249	258	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
42	206	123	2	茶掲土	瓦質土器壺	3	40	250	259	1	土坑 1-1	黒色土器碗 A 類	3
42	207	130	2	茶掲土	土師質土器壺	3	40	251	266	1	土坑 1-1	土師器鉢	3
42	208	131	2	茶掲土	瓦質土器壺	3	40	252	264	1	土坑 1-1	黒色土器碗 B 類	3
42	209	126	2	茶掲土	東播系スリ鉢	3	40	253	265	1	土坑 1-1	瓦器鉢	3
42	210	128	2	溝 2-20	東播系スリ鉢	3	41	254	254	1	土坑 1-1	土師器壺	3

残存率 1=完形 2=1/2以上残存 3=1/2以下の小片

実測遺物対照表3

団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率	団版番号	国番号	実測番号	調査区	遺構・層位	器種	残存率	
41	255	252	1	土坑 1-1	土師器甕	3	298	304	2	堤 2-1	丸瓦	3		
41	256	250	1	土坑 1-1	土師器鉢	3	299	230	2	堤 2-1 上層	丸瓦	3		
257	251	1	土坑 1-1	土師器甕	3	300	303	2	堤 2-1	丸瓦	3			
41	258	255	1	土坑 1-1	土師質土器羽釜	3	301	221	2	溝 2-20 上層	平瓦	3		
41	259	253	1	土坑 1-1	土師器甕	3	45	302	218	2	溝 2-20 上層下層	平瓦	2	
42	260	240	2	穴 2-15	瓦器碗	1	303	223	2	堤 2-1	平瓦	3		
41	261	238	2	穴 2-15	瓦器碗	3	304	222	2	溝 2-20 下層	平瓦	3		
41	262	239	2	穴 2-15	瓦器碗	3	305	219	2	堤 2-1	平瓦	3		
31	263	269	2	茶褐色	鉄釘	2	306	220	2	堤 2-1	平瓦	3		
31	264	93	2	茶褐色土	鉄釘	2	307	224	2	溝 2-20 下層	平瓦	3		
31	265	308	2	地山直上	元豊通宝銅錢	1	308	235	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1		
43	266	211	2	機械掘	肥前陶器碗胎土目	3	309	232	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1		
43	267	212	2	堤 2-1 上層	肥前陶器碗胎土目	3	44	310	233	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1	
43	268	213	2	茶褐色土	肥前陶器碗胎土目	3	311	236	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1		
44	269	332	2	井戸 2-2 棚内中層	肥前陶器碗胎土目	3	312	231	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1		
43	270	214	1	茶褐色土	肥前陶器碗胎土目	3	313	234	2	井戸 2-1 最下層	井戸瓦	1		
71	330	2	地山直上	白磁碗砂目	3	46	314	320	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	1		
44	272	331	2	茶褐色土	肥前陶器鉢砂目	3	46	315	322	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	2	
43	273	215	2	茶褐色土	肥前陶器碗砂目	3	46	316	319	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	1	
43	274	216	1	堤 1-1 上層	肥前陶器碗胎土目はぎ	3	46	317	321	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	2	
44	275	329	1	堤 1-1 最下層	肥前陶器碗胎土目はぎ	3	46	318	323	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	2	
43	276	206	1	井戸 1-1 井戸内上層	京焼系陶器皿	3	46	319	324	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印判手皿	2	
43	277	217	2	茶褐色土	瀬戸焼天日瓶	3	46	320	311	2	今池埋土	瀬戸焼磁器皿盒	2	
43	278	328	2	溝 2-38	泥めんこ	1	321	317	2	今池埋土	瀬戸焼磁器小壺	1		
43	279	327	2	地山直上	泥めんこ	1	46	322	310	2	今池埋土	美濃焼磁器筒形容器	2	
44	280	334	2	茶褐色土	肥前磁器染付猪口	3	46	323	312	2	今池埋土	美濃焼磁器湯のみ	3	
44	281	335	2	堤 2-1 上層	肥前磁器染付椀	3	46	324	316	2	今池埋土	瀬戸焼陶器続	3	
44	282	333	2	井戸 2-2 棚内中層	肥前磁器染付椀	3	46	325	309	2	今池埋土	瀬戸焼磁器湯のみ	1	
44	283	336	2	不明	肥前磁器染付椀	3	46	326	313	2	今池埋土	美濃焼磁器碗	3	
44	284	337	2	不明	肥前磁器染付椀	3	46	327	314	2	今池埋土	美濃焼磁器碗	3	
44	285	204	1	井戸 1-1 井戸内中層	肥前磁器碗	3	46	328	315	2	今池埋土	瀬戸焼磁器碗	3	
44	286	338	2	不明	肥前磁器染付椀	3	64	2	地山直上	須恵器杯身	3			
44	287	339	2	堤 2-1 上層	肥前磁器染付椀	3	36	68	2	地山直上	須恵器杯蓋	3		
44	288	340	2	堤 1-1 最下層	肥前磁器染付椀	3	36	71	2	堤 2-1	須恵器杯蓋	3		
44	289	205	1	井戸 1-1 井戸内上層	肥前磁器皿	3	86	2	溝 2-20 上層	須恵器杯身	3			
43	290	326	1	堤 1-1 上層	陶器御酒酒池利	3	87	2	地山直上	須恵器杯身	3			
44	291	225	2	今池最下層	均整唐草紋軒平瓦	3	118	2	茶褐色	瓦器碗	3			
43	292	325	2	堤 2-1	波状紋軒平瓦	3	125	2	溝 2-20 下層	瓦質土器スリ鉢	3			
44	293	226	2	堤 2-1 下層	陶器灯明台	3	129	2	地山直上	瓦質土器羽釜の脚	3			
44	294	283	2	茶褐色土	巴紋軒丸瓦	3	138	2	地山直上	須恵器蓋	3			
44	295	229	2	茶褐色土	巴紋軒丸瓦	3	278	2	地山直上	須恵器蓋	3			
44	296	228	2	堤 2-1 上層	巴紋軒丸瓦	3	290	2	地山直上	土師器甕	3			
44	297	227	2	堤 2-1	鬼瓦	3	46	318	2	今池埋土	瀬戸焼磁器印版手皿	2		

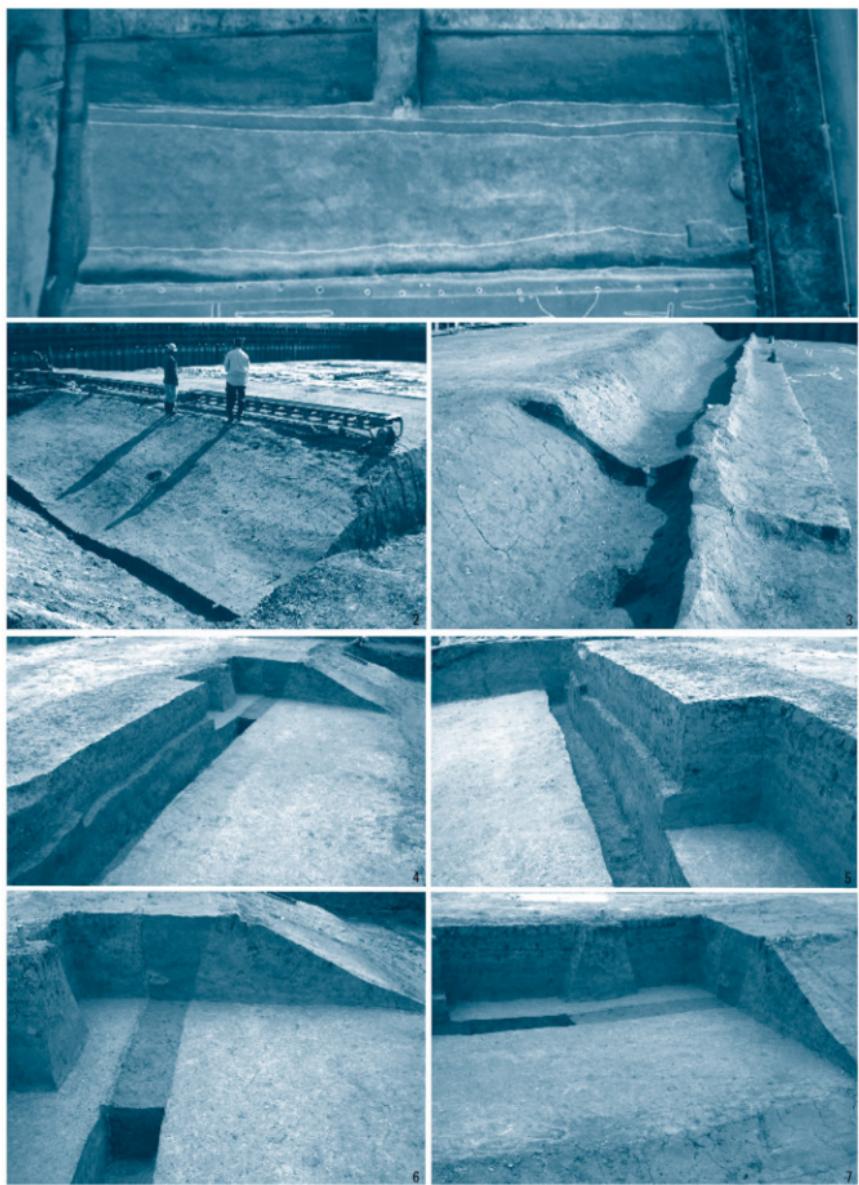
実測遺物対照表表4

残存率 1=完形 2=1/2以上残存 3=1/2以下の小片

# 図 版

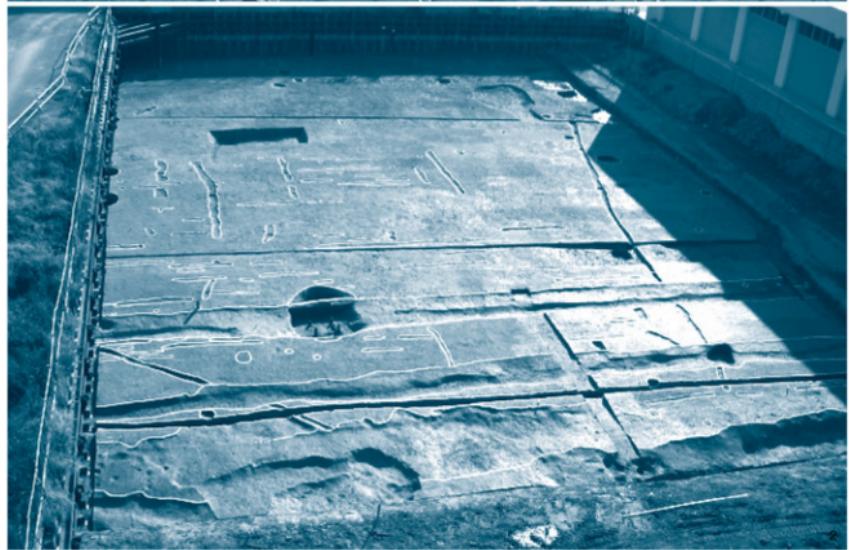


井戸 2-2 井戸枠材取り上げ状況

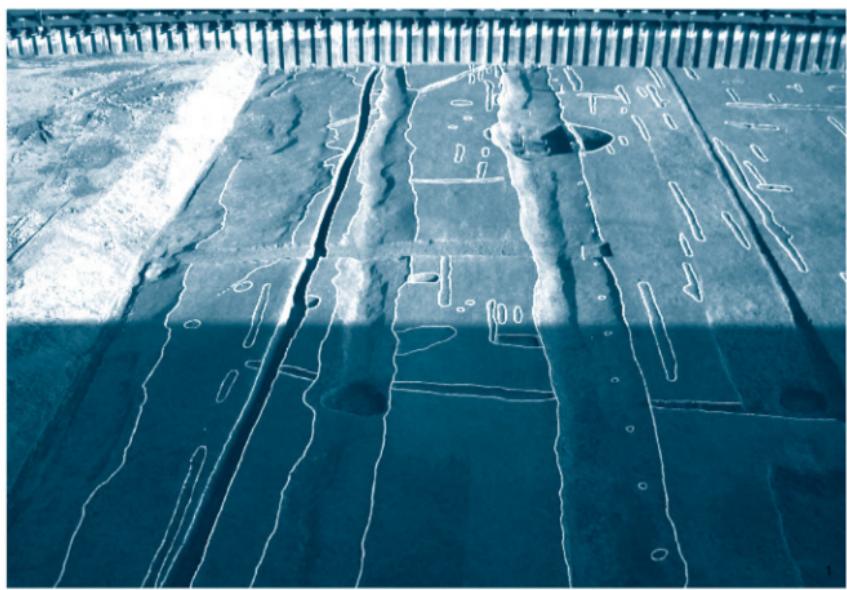


1 今池堤垂直写真（上が北で堤内） 2 今池堤検出状況（西から 左が堤内） 3 堤外周溝 I-1（西から）

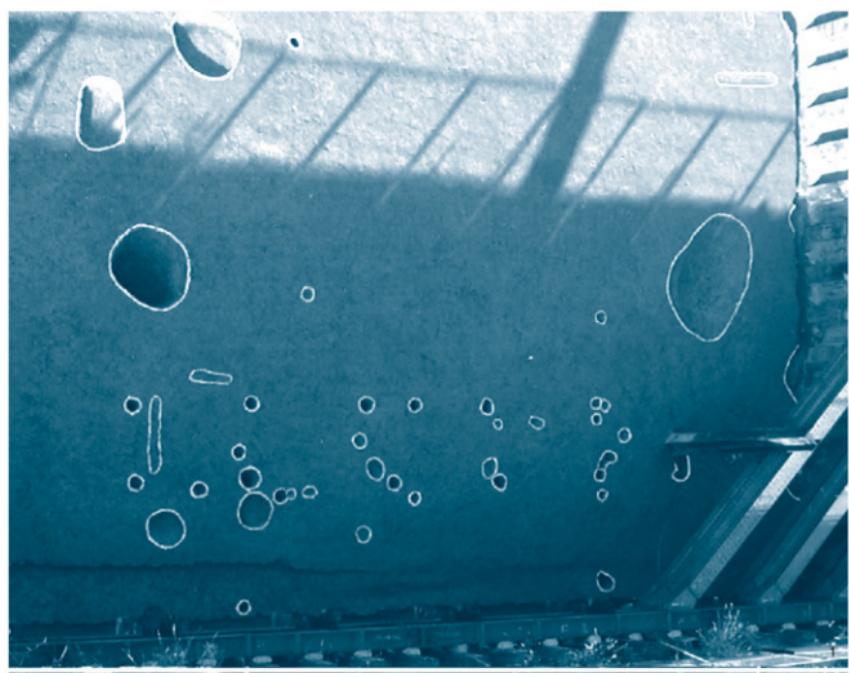
4 今池堤断ち割り状況（西から） 5 今池堤断ち割り状況（東から） 6 溝 I-15（西から） 7 同左（北から）



1 1区全景(南から) 2 1区全景(北から)



1 1区今池堤下層溝（西から） 2 1区今池堤下層溝（東から）



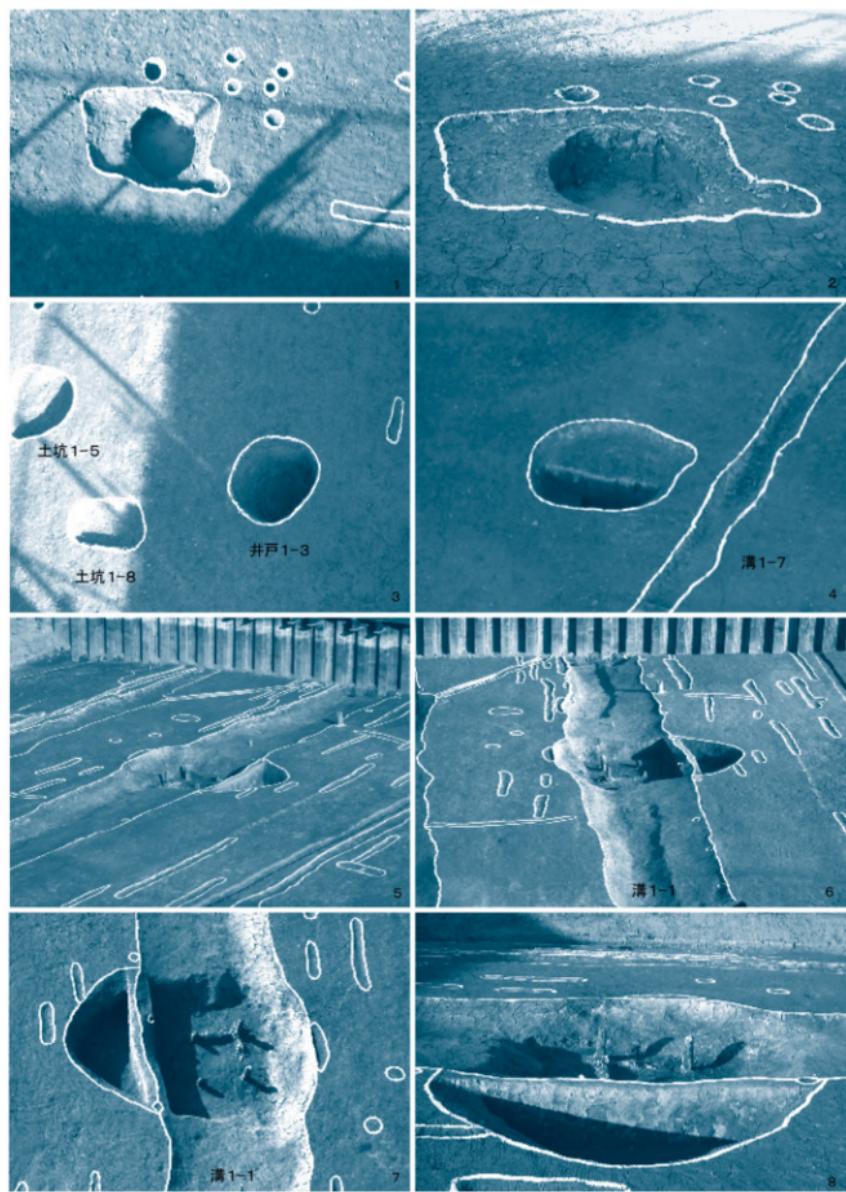
1 1区東南部の遺構群（南から）

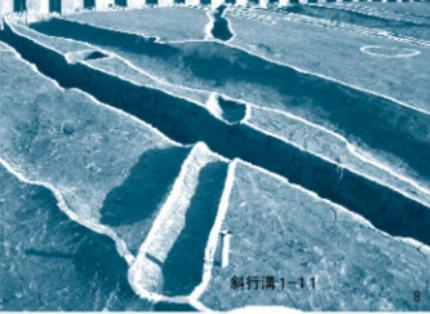
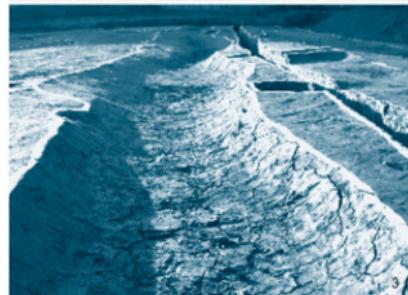
2 1区東南部の遺構群（西から）



1 1区堀立柱建物 I-I (西から)

2 1区柵列 I-I (西から)





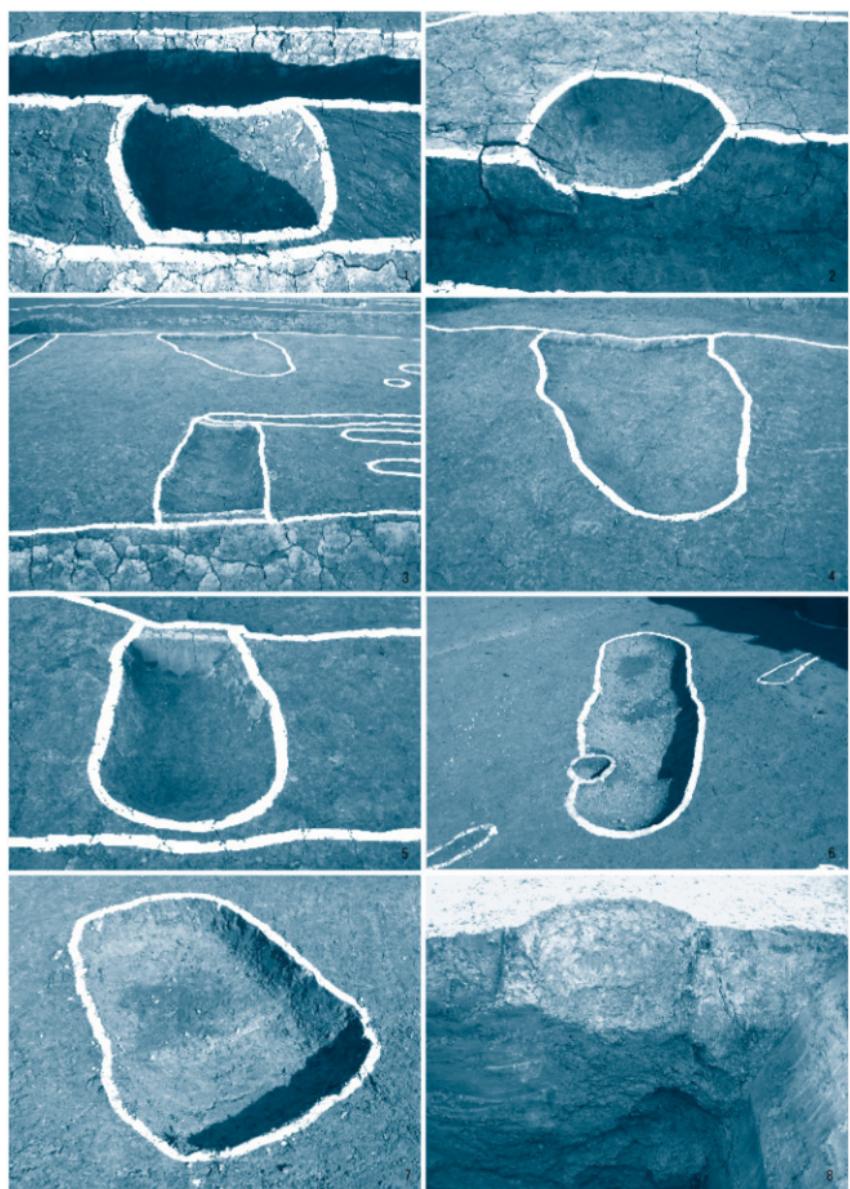
1・3 溝 1-10

2・4 溝 1-1下層

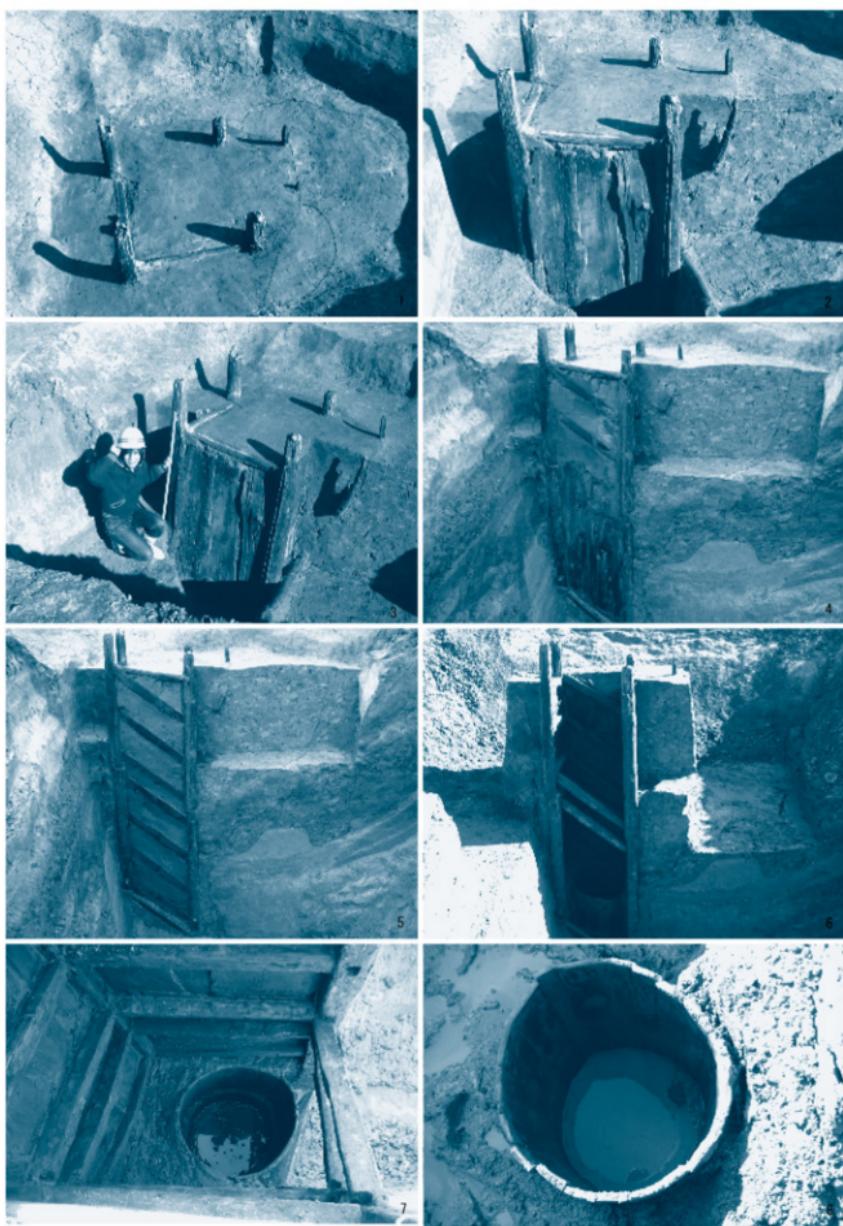
5 今池堤下層

6 溝 1-7

7・8 斜行溝 1-11

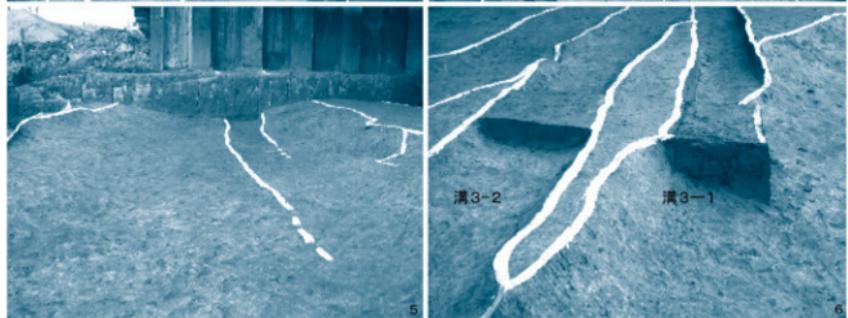


1 土坑 1-91 2 土坑 1-98 3 土坑 1-13・1-14 4 土坑 1-14  
5 土坑 1-97 6 土坑 1-4  
7 土坑 1-8 8 井戸 1-2 断ち割り状況（すべて南から）



1~6 井戸 I-I 掘削状況（西から）

7・8 井戸 I-I 下層井戸枠（北から）

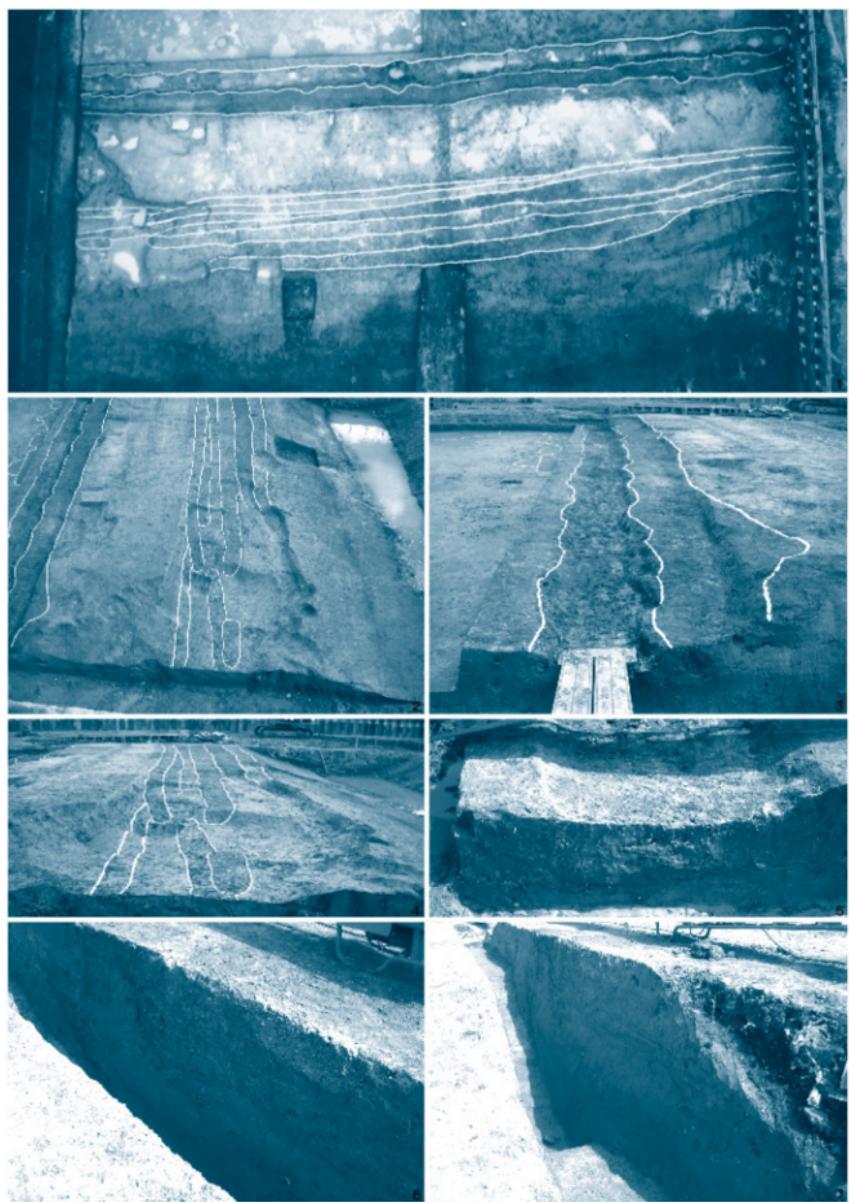


1 拡張区今池東堤

2~4 拡張区今池東堤下層溝

5 溝3-5 堆積状況(南から)

6 溝3-1・溝3-2 堆積状況(北から)



1・2 2区今池堤（下が北で堤内） 3 2区今池堤外周溝2-1（西から） 4 今池堤内溝群（西から）  
5 今池外周溝2-1堆積状況（西から） 6 今池堤断面（西から） 7 今池と下層溝2-10堆積状況（西から）



1・2 2区全景(北から)



1・2 2区全景(南から)

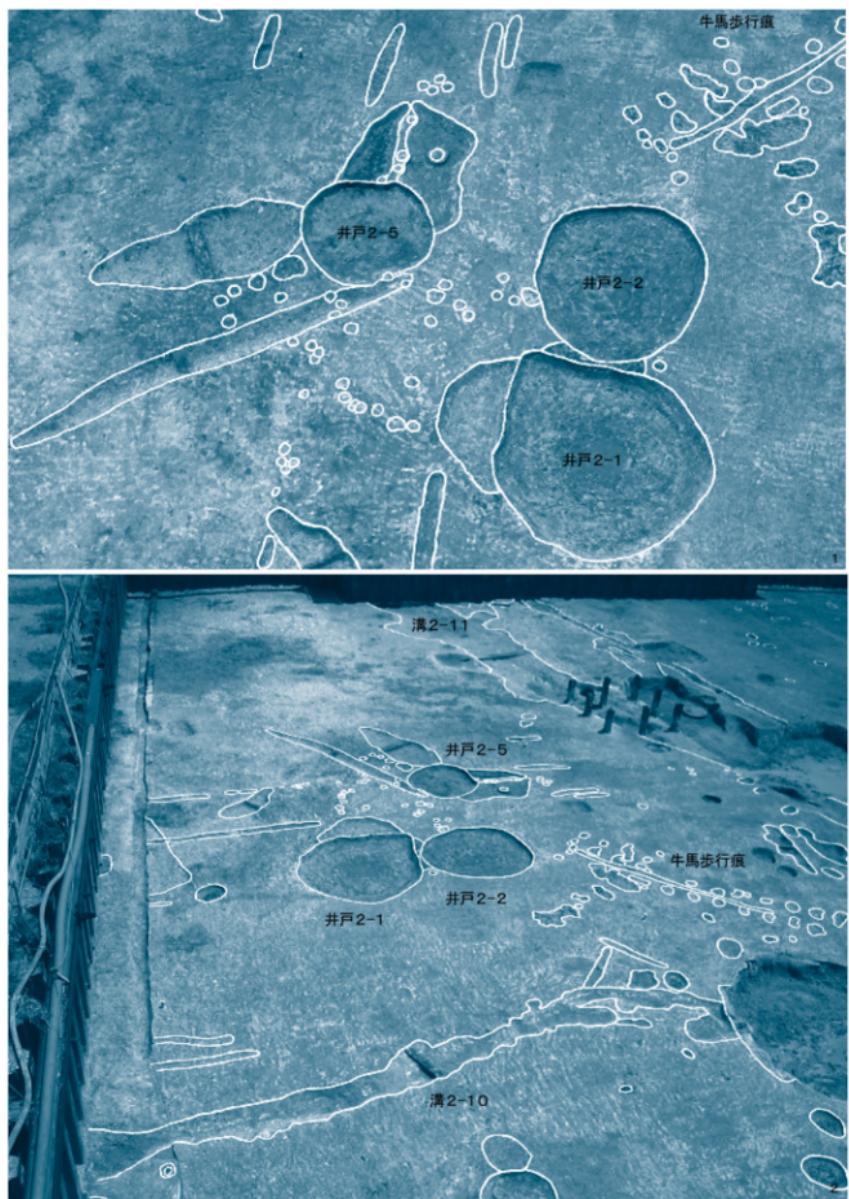
2区今池堤下層溝・土坑群



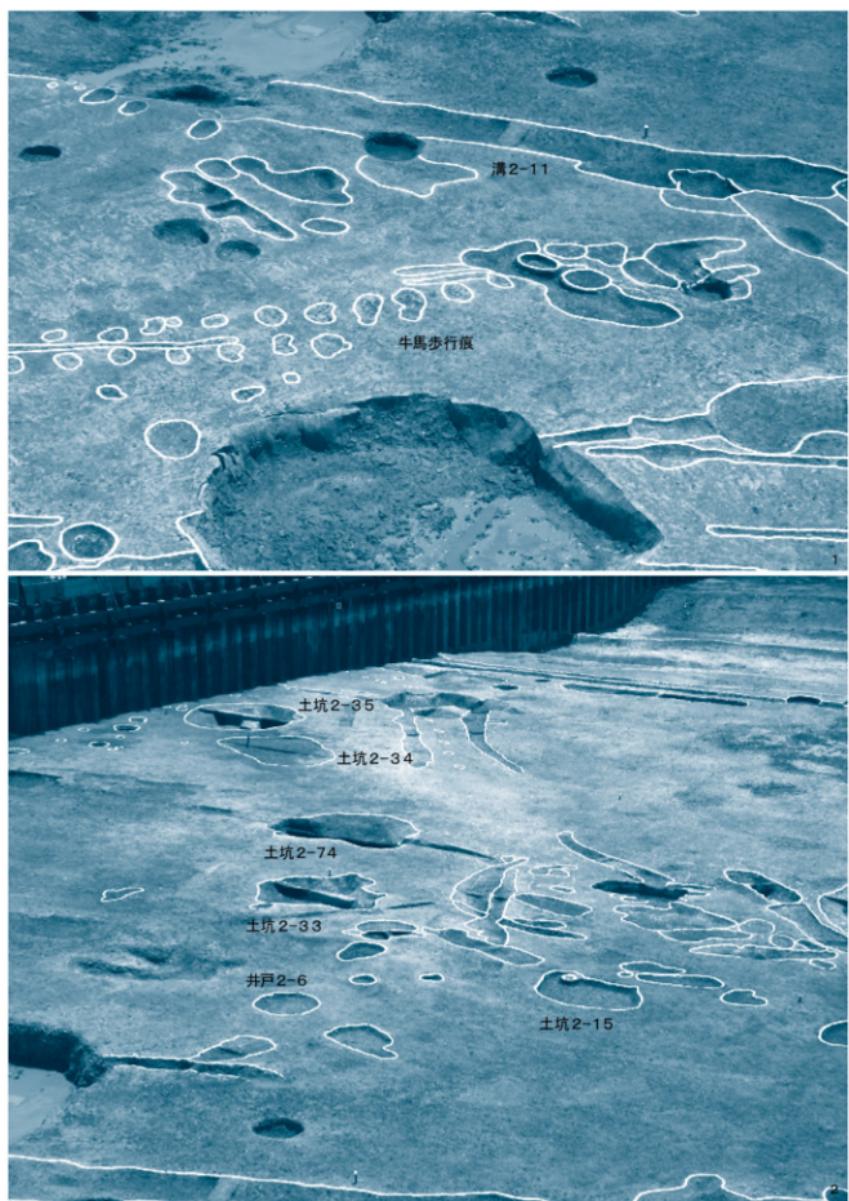
1 2区今池堤下層溝 2-10 (東から) 2 2区土坑群 (南から)



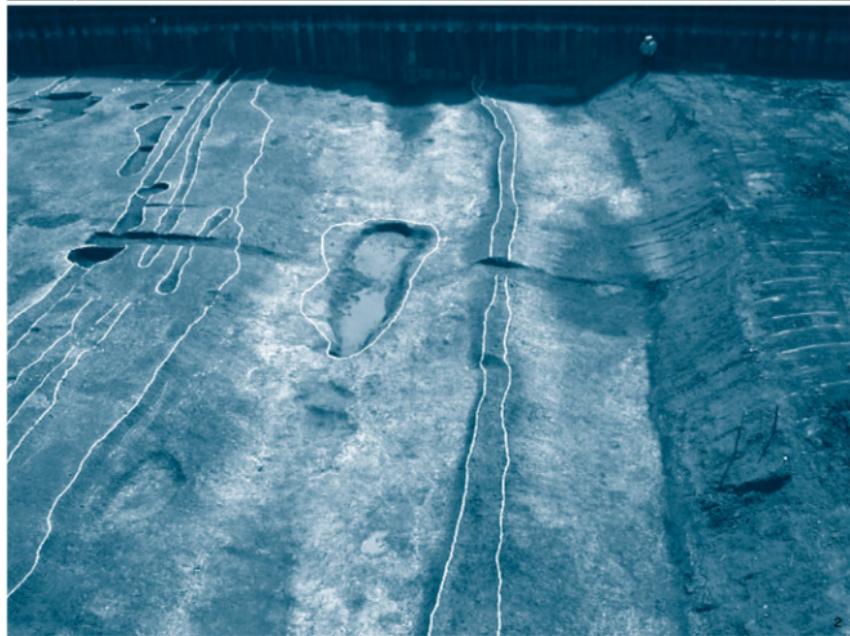
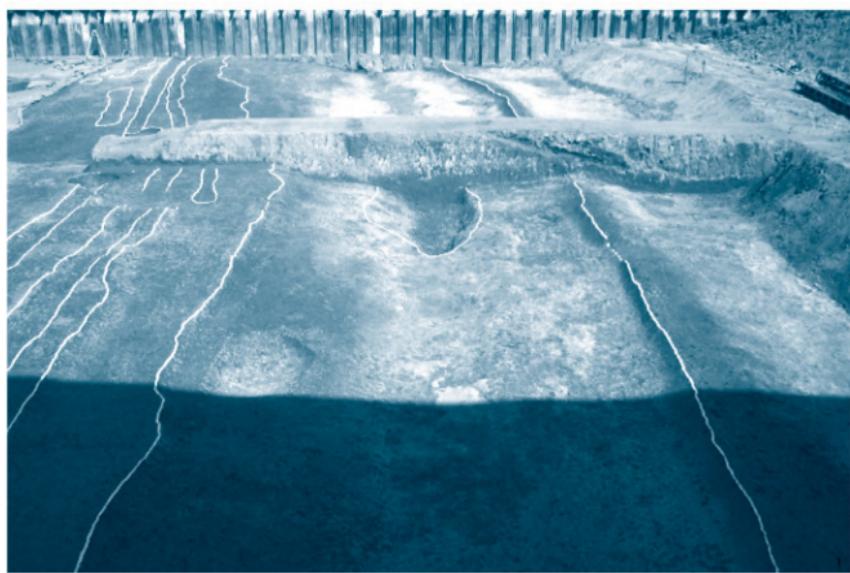
1 2区遺構群(南から) 2 2区遺構群(東から)



1 2区遺構群（北から） 2 2区遺構群（西から）

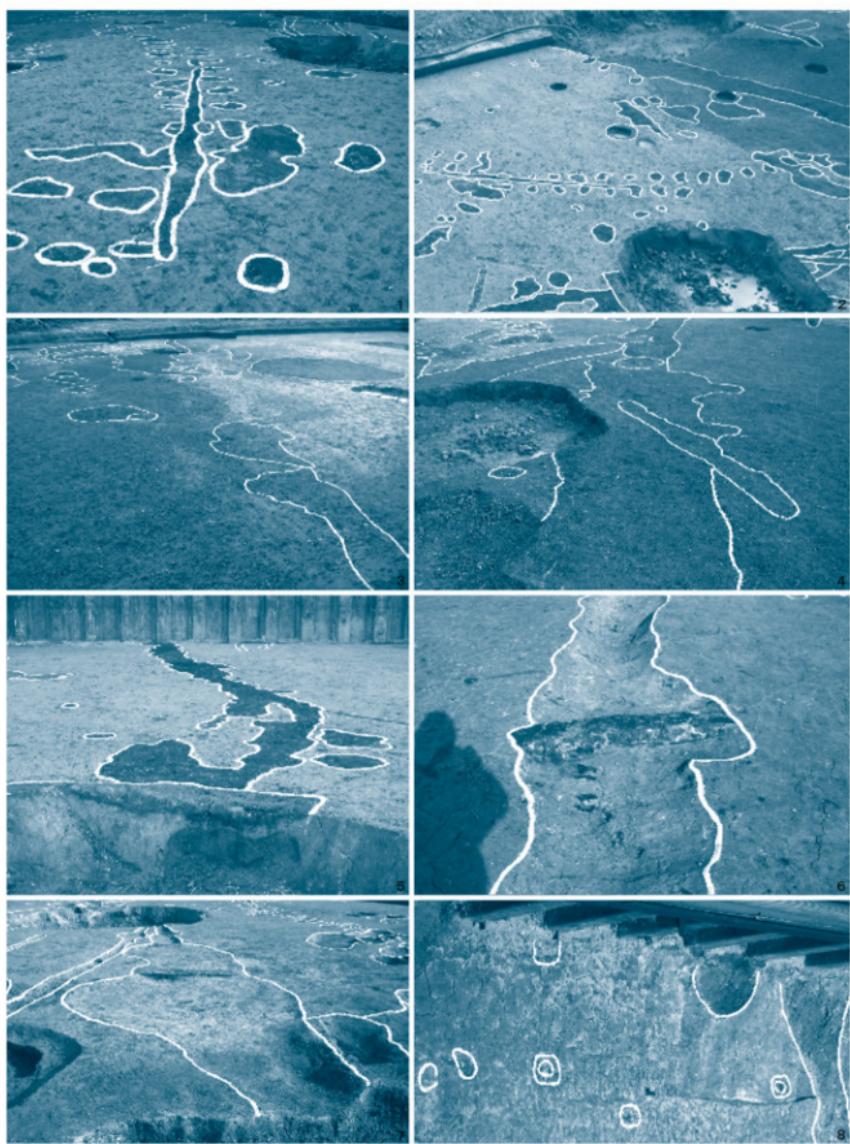


1 2区牛馬歩行痕（西から） 2 2区土坑群（西北から）



1 2区今池堤下層溝 2-20 (東から) 2 同左 (西から)

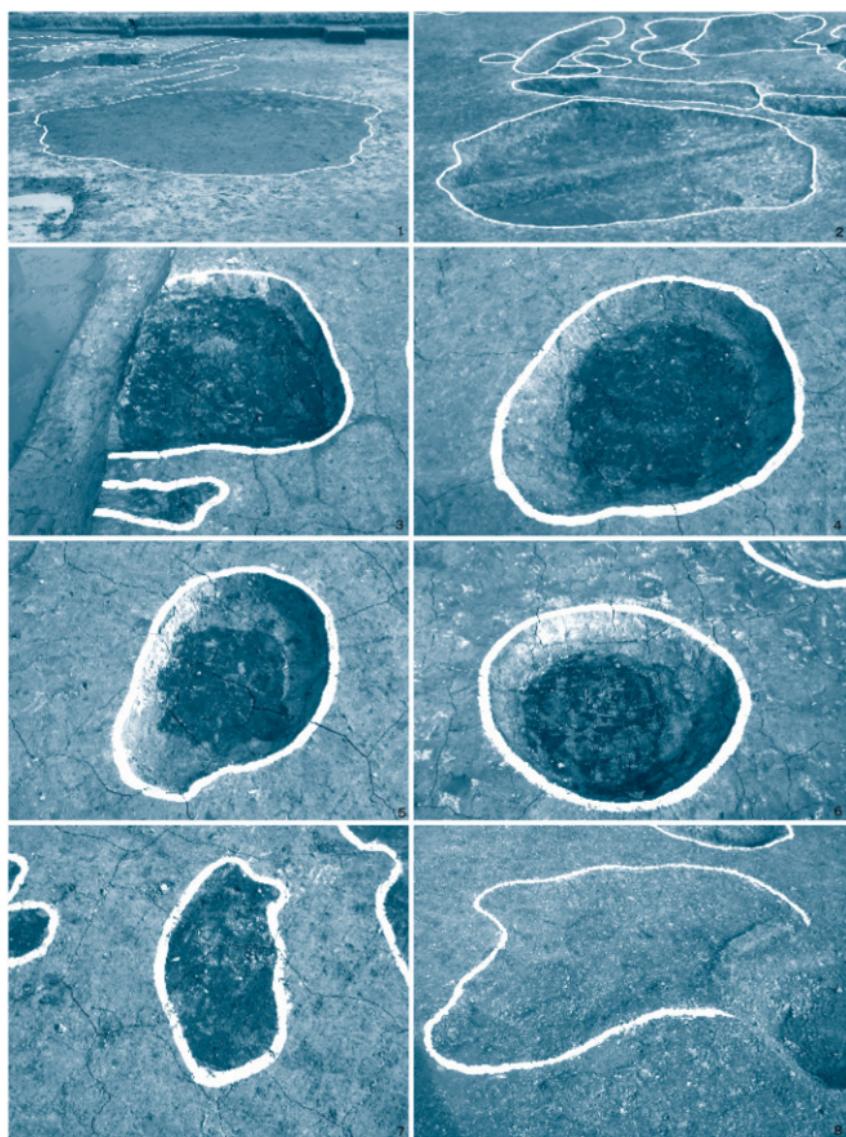
2



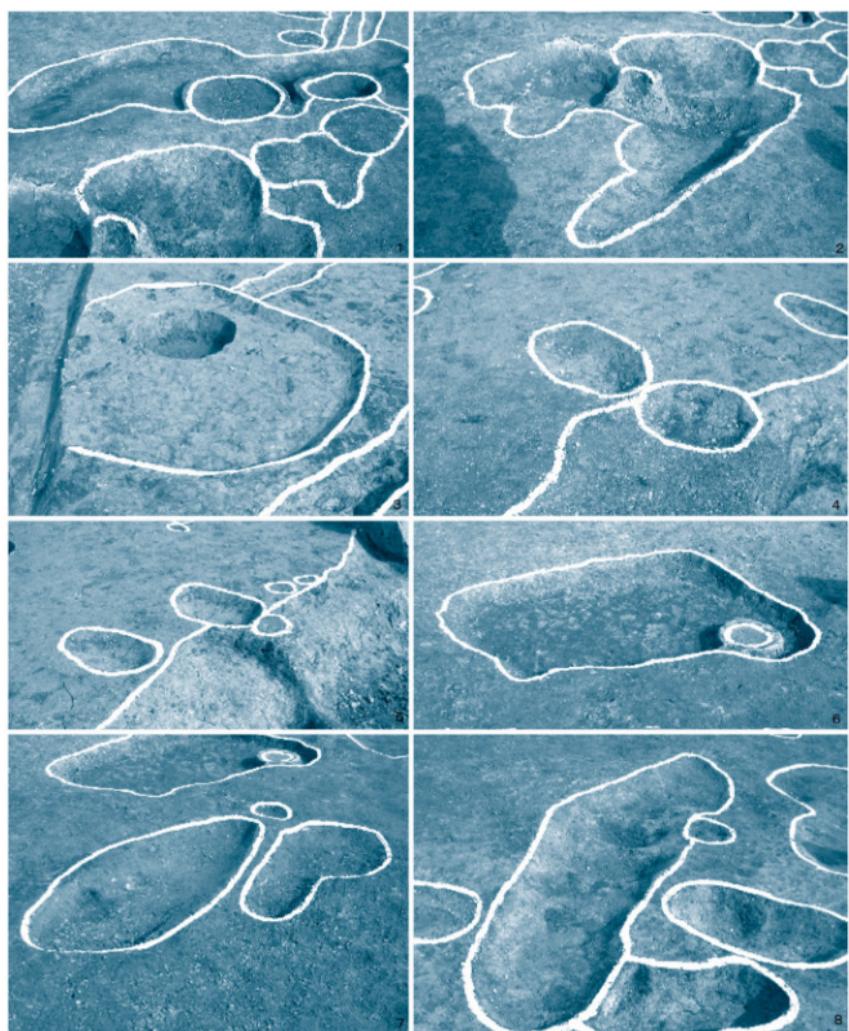
1・2 牛馬歩行痕(南西から) 3 土坑群(西から)

7 溝2-14(南から) 8 掘立柱建物2-1(南から)

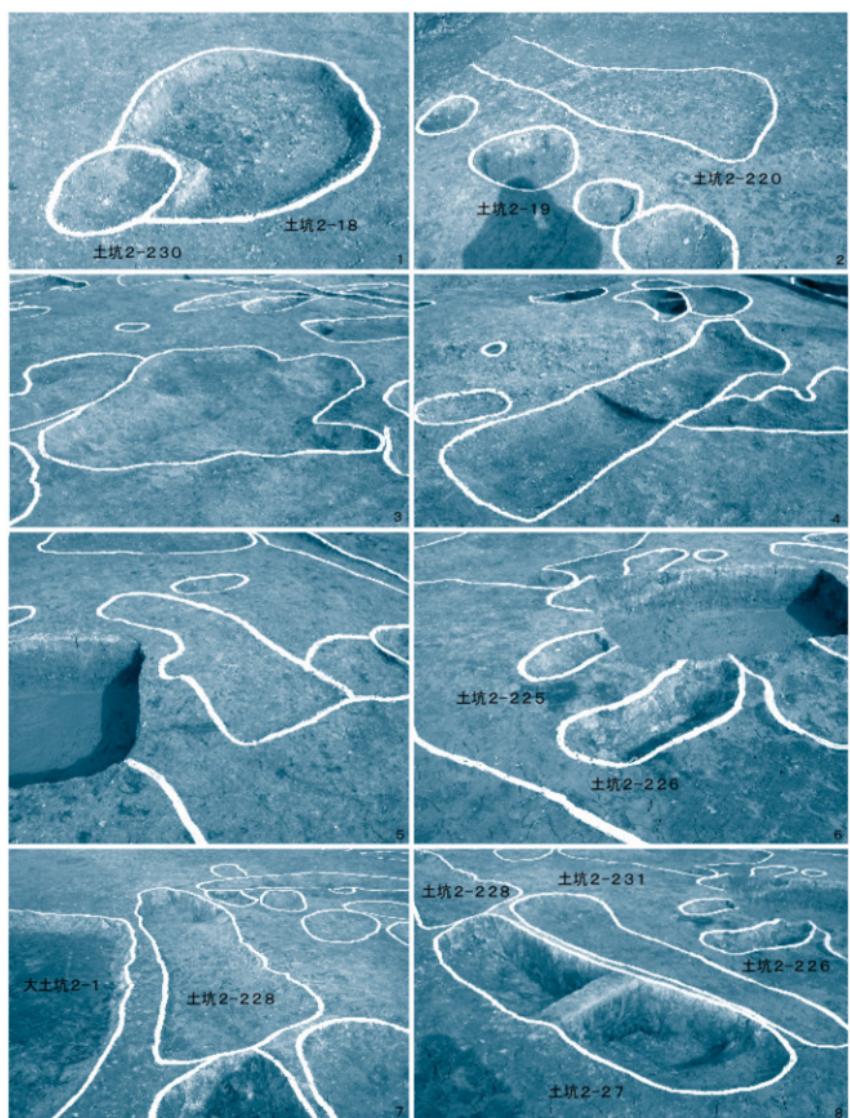
4 溝2-11(南西から) 5・6 溝2-10(南から)



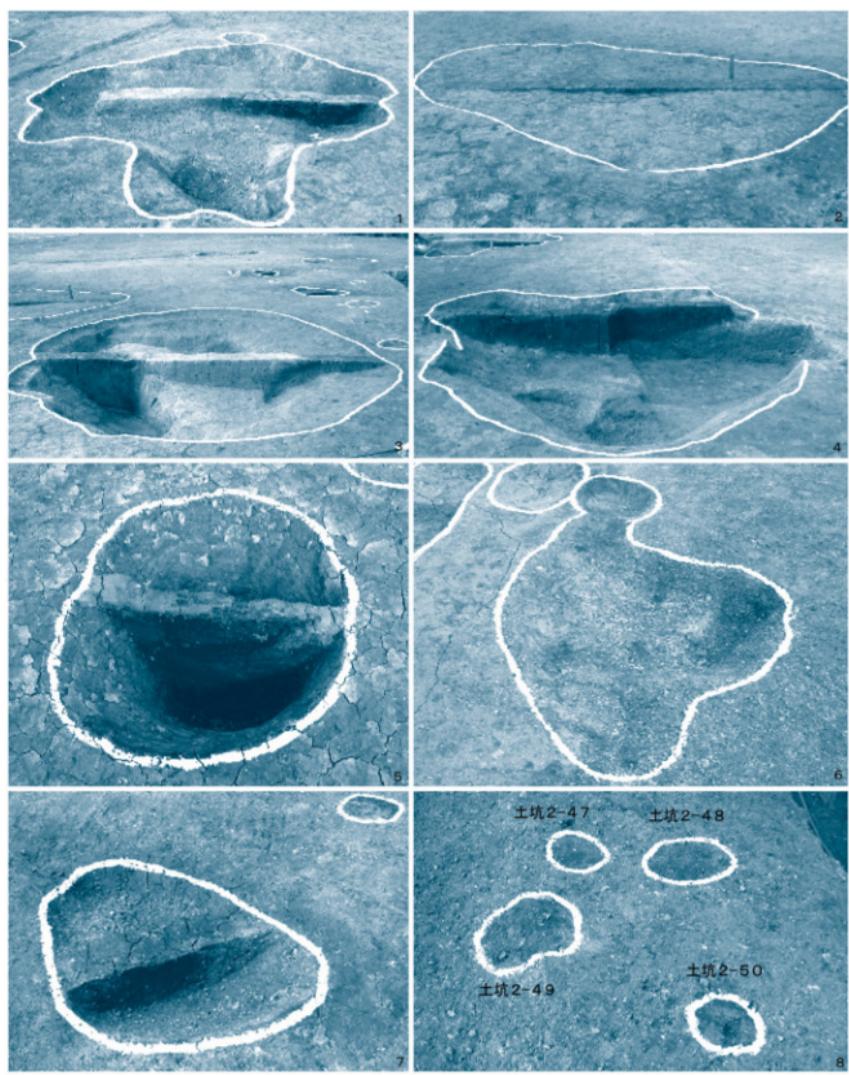
1 大土坑 2-1 検出状況（西から） 2 同左完掘状況（南西から） 3 土坑 2-2（南から） 4 土坑 2-3（南から）  
5 土坑 2-5（南から） 6 土坑 2-6（南から） 7 土坑 2-122 8 土坑 2-7 完掘状況（南から）



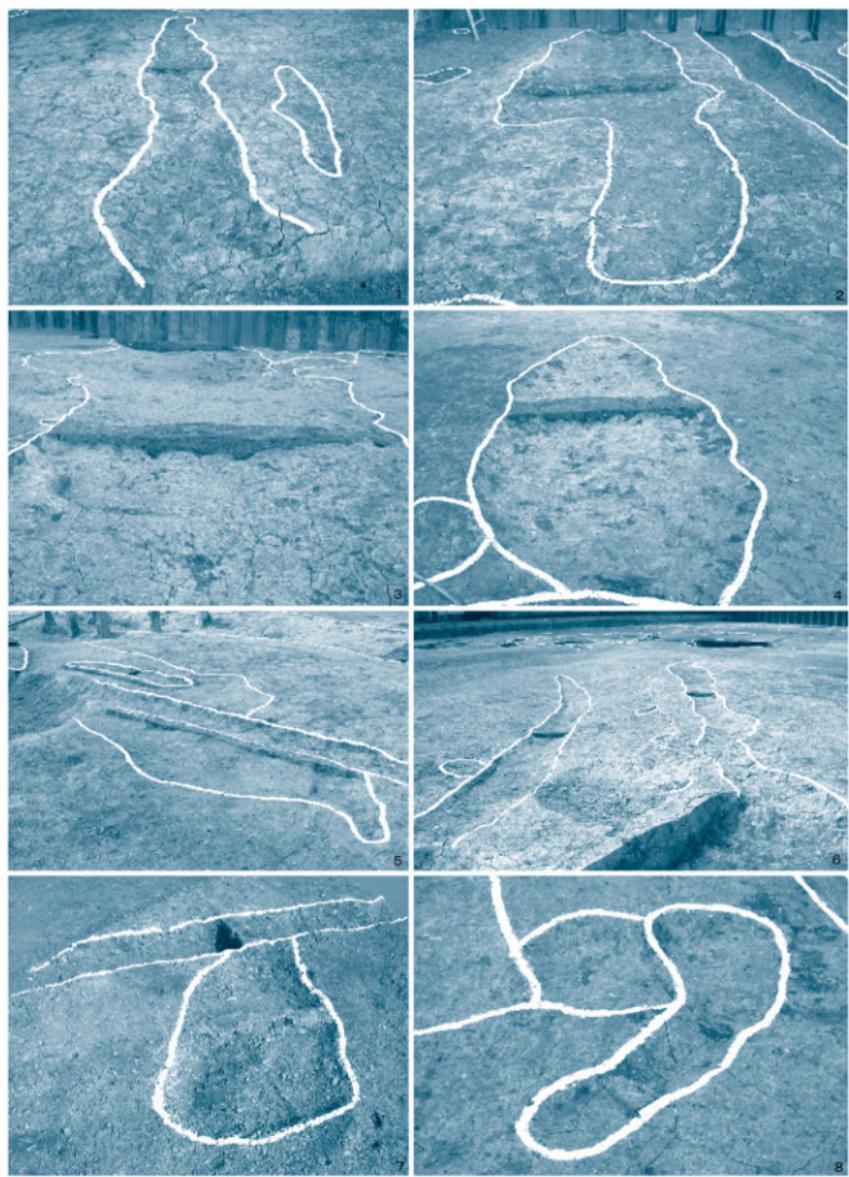
1 土坑 2-8    2 土坑 2-9    3 土坑 2-10    4 土坑 2-12・土坑 2-13  
6 土坑 2-15    7 土坑 2-16・土坑 2-30    8 土坑 2-222 (すべて南から)



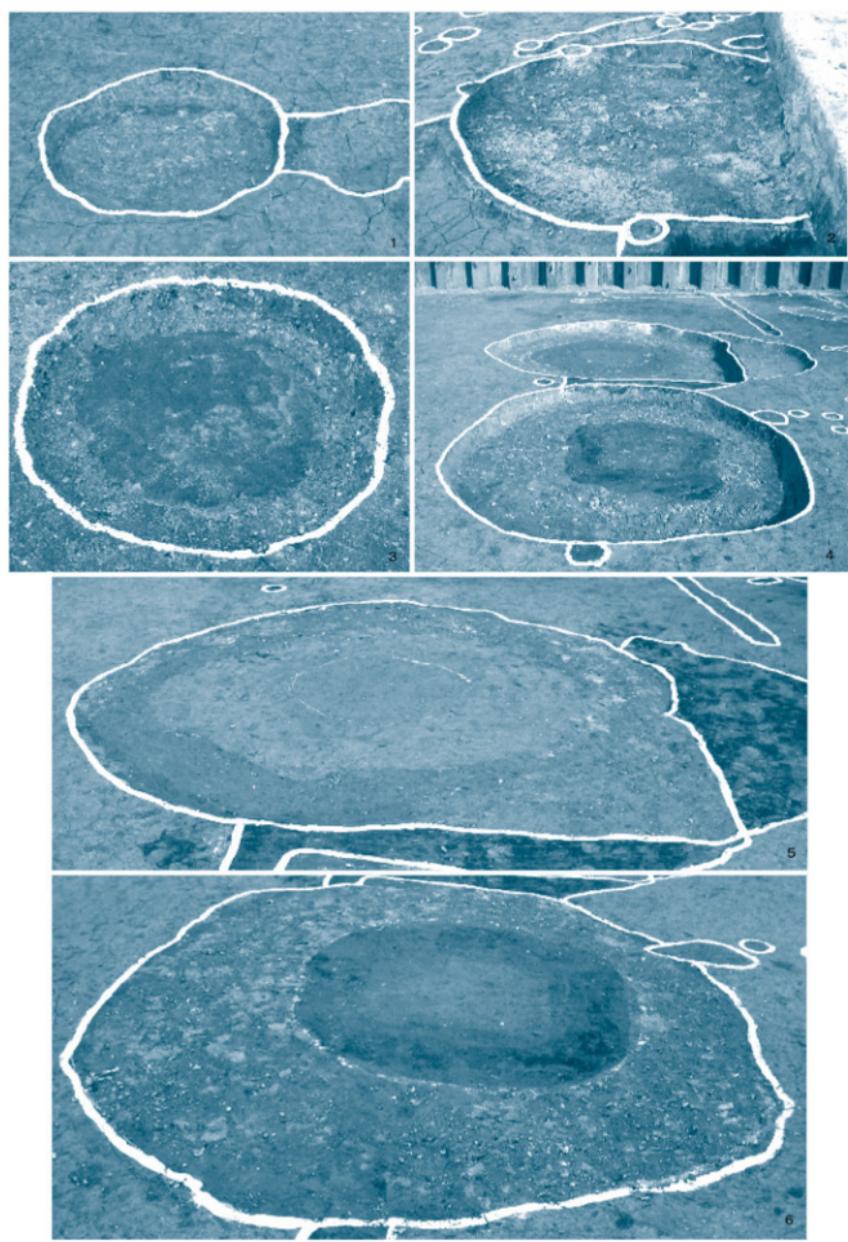
1 土坑 2-18    2 土坑 2-19・土坑 2-220    3 土坑 2-223    4 土坑 2-225  
5 土坑 2-226    6 土坑 2-227    7 大土坑 2-1・土坑 2-228    8 土坑 2-226・土坑 2-227 (すべて南から)



1 土坑 2-33 2 土坑 2-34 3 土坑 2-35 4 土坑 2-27 5 土坑 2-229 6 土坑 2-220  
7 土坑 2-83 8 土坑 2-47 ~ 土坑 2-50 (すべて南から)



1 溝 2-36・溝 2-39 2 溝 2-38 3 溝 2-11 4 溝 2-32  
5 溝 2-41 6 溝 2-16・溝 2-17  
7 溝 2-29 8 溝 2-33(すべて南から)



1 井戸 2-4

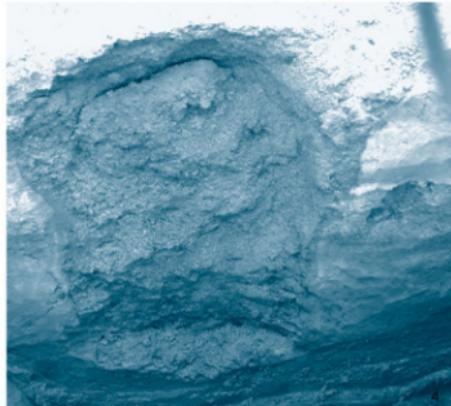
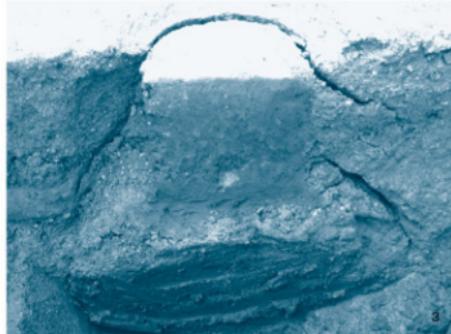
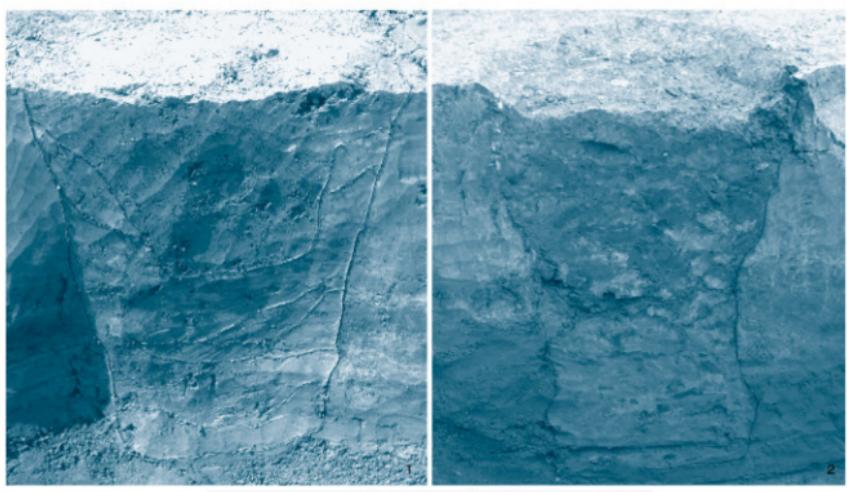
2 井戸 2-5

3 井戸 2-6

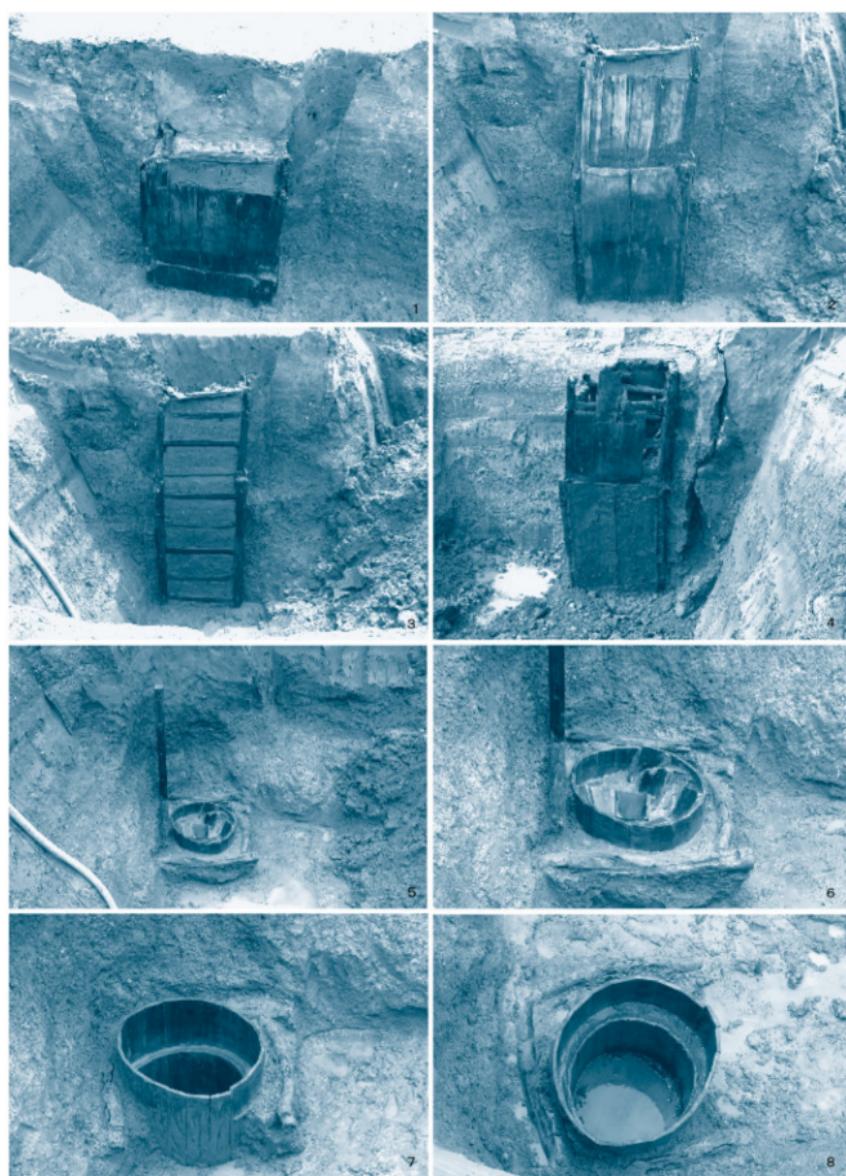
4 井戸 2-1・井戸 2-2

5 井戸 2-1

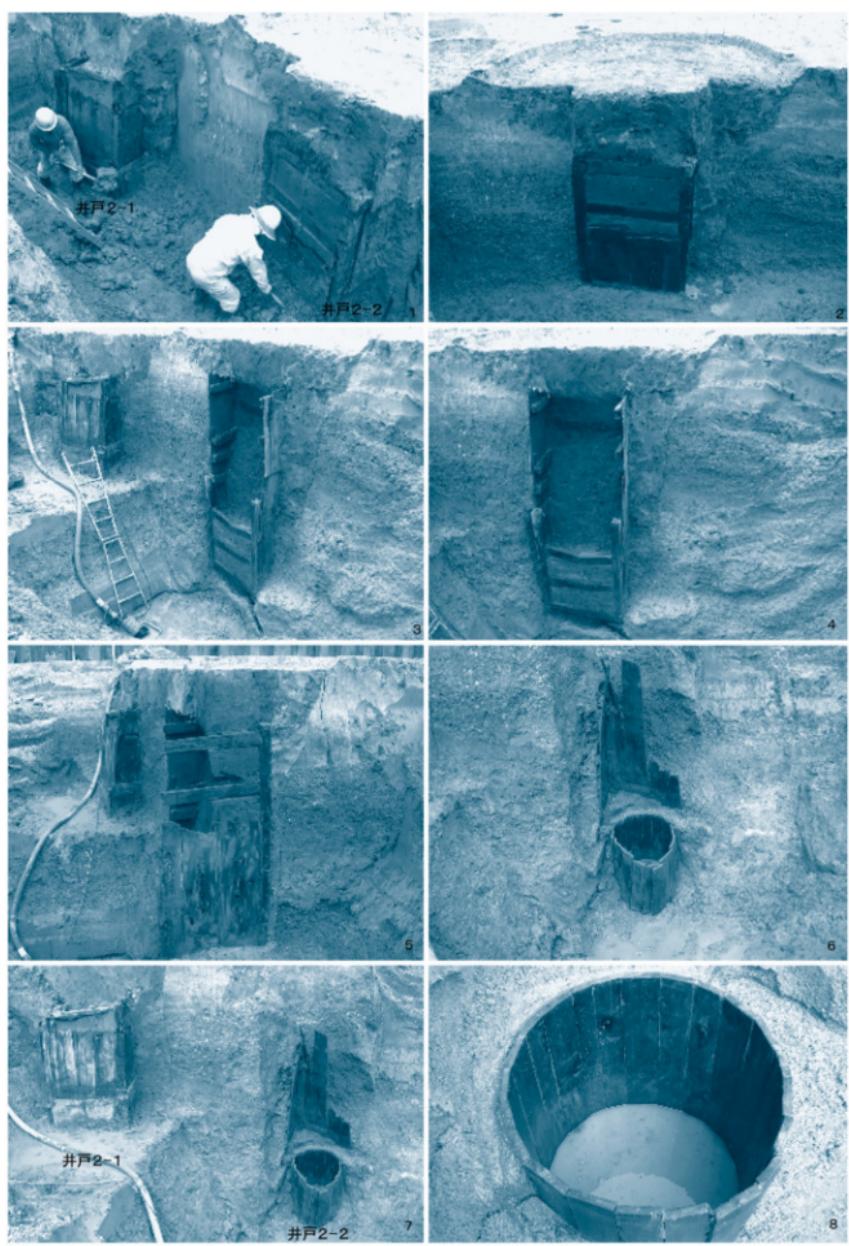
6 井戸 2-2 (すべて南から)



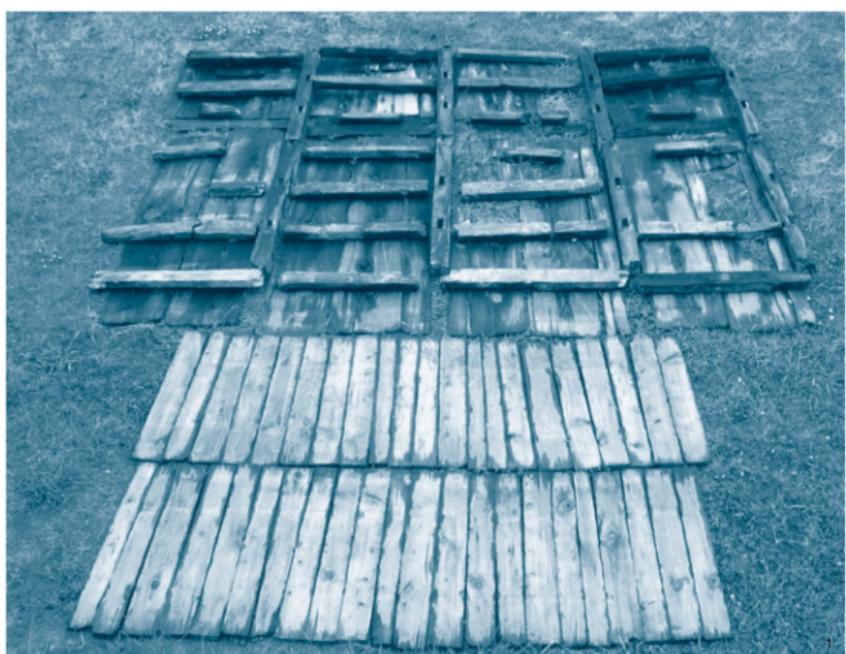
1 井戸 2-3 断面    2 井戸 2-4 断面    3 井戸 2-6 断面  
4 井戸 2-5 断面 (すべて南から)



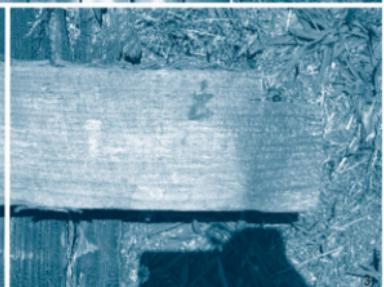
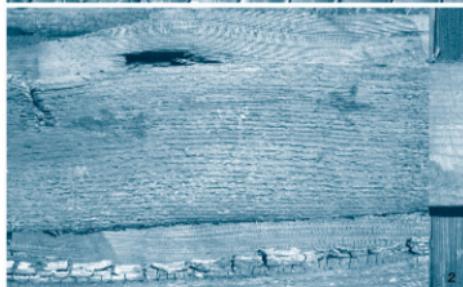
1~8 井戸 2-1 掘削状況 (4は南から、他は西から)



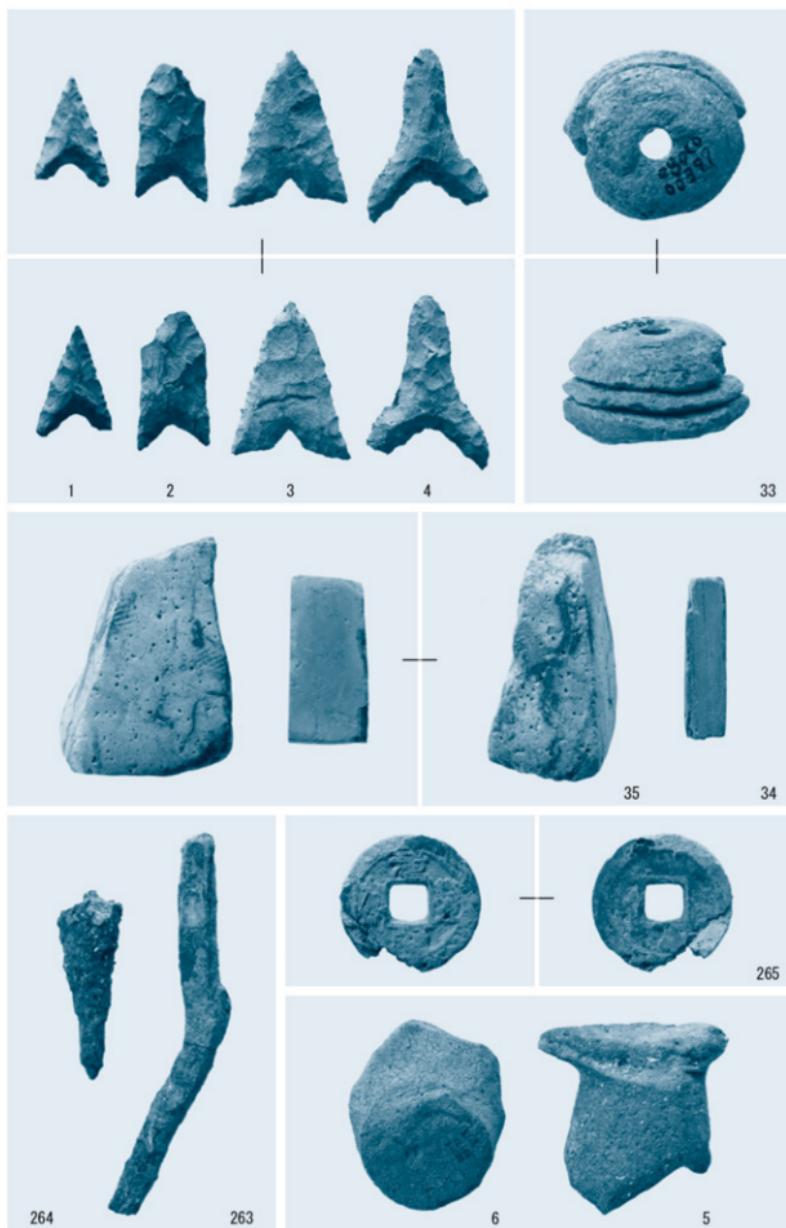
1~8 井戸2-2 掘削状況（5は南から、他は西から）



1 井戸 1-1 井戸枠展開状況 2 井戸 2-1 井戸枠展開状況



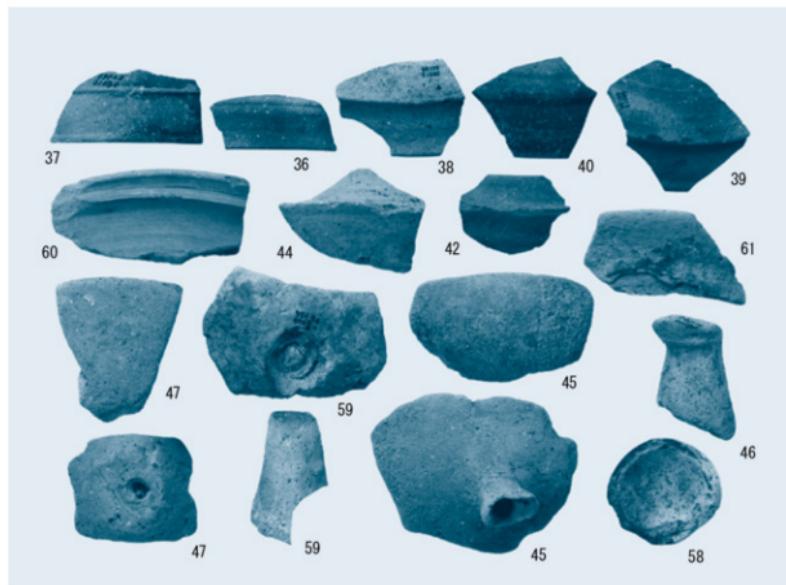
1 井戸 2-2 井戸枠展開状況 2 井戸枠 1-1 井戸枠の墨書



石鎚・紡錘車・砥石・釘・「元豐通宝」中国錢・弥生土器



大土坑 2-1 出土須恵器蓋

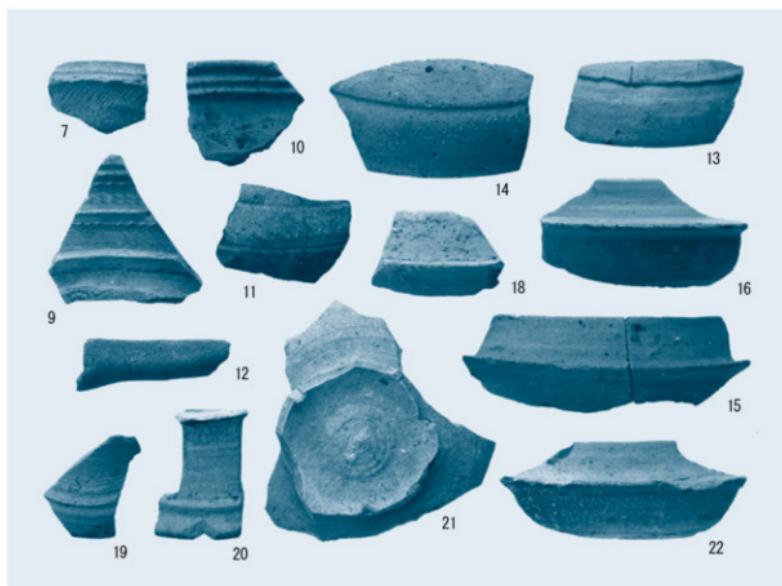


大土坑 2-1・溝 2-11 出土須恵器・土師器

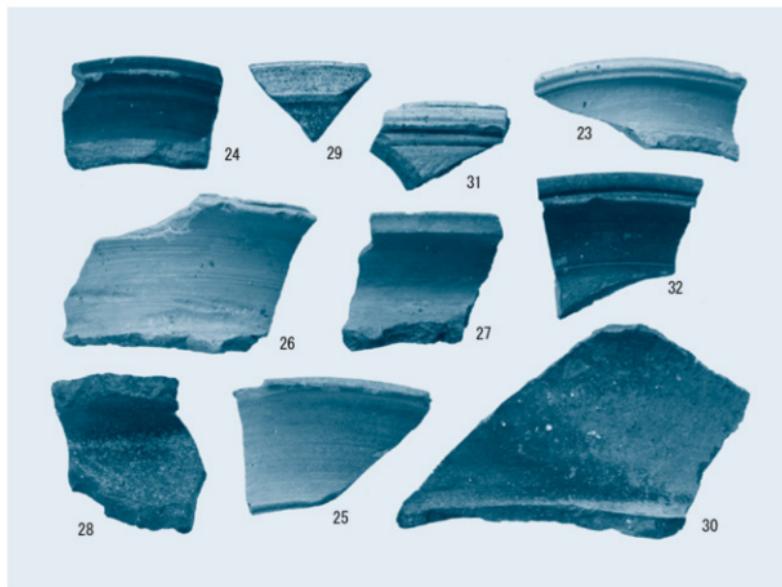


土坑 2-49 出土土師器甕

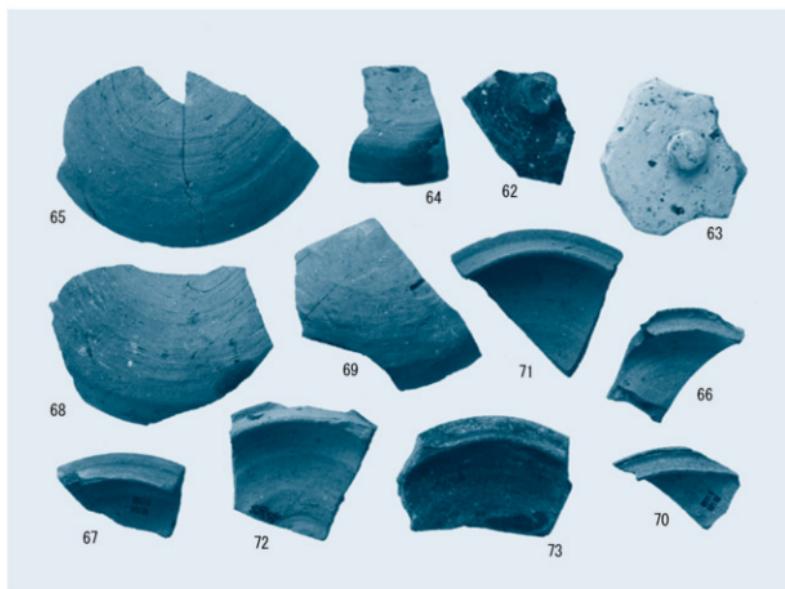
土坑 2-2 出土土師器甕



須恵器蓋・高杯ほか



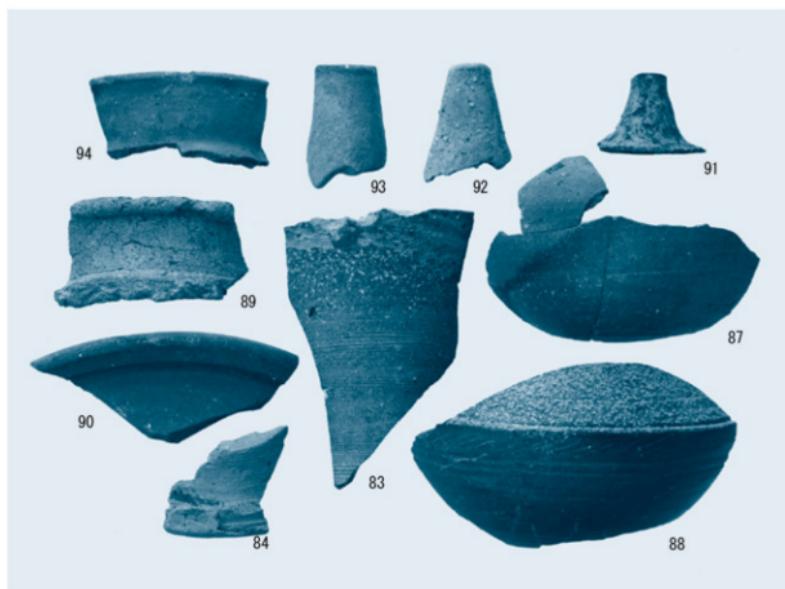
須恵器蓋



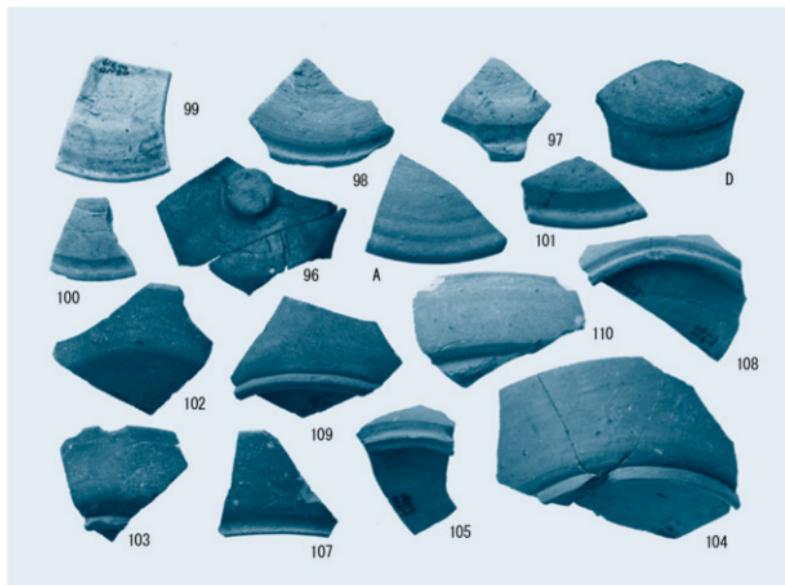
須恵器蓋杯



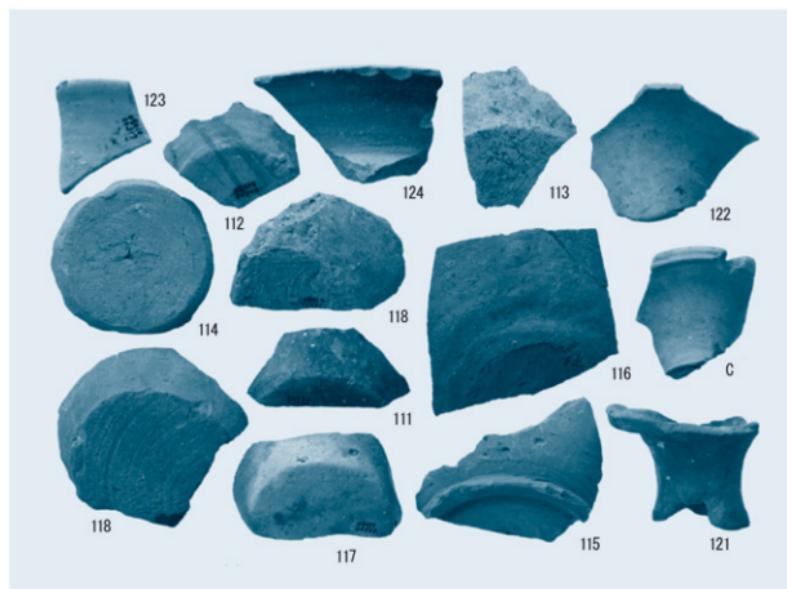
須恵器高杯ほか



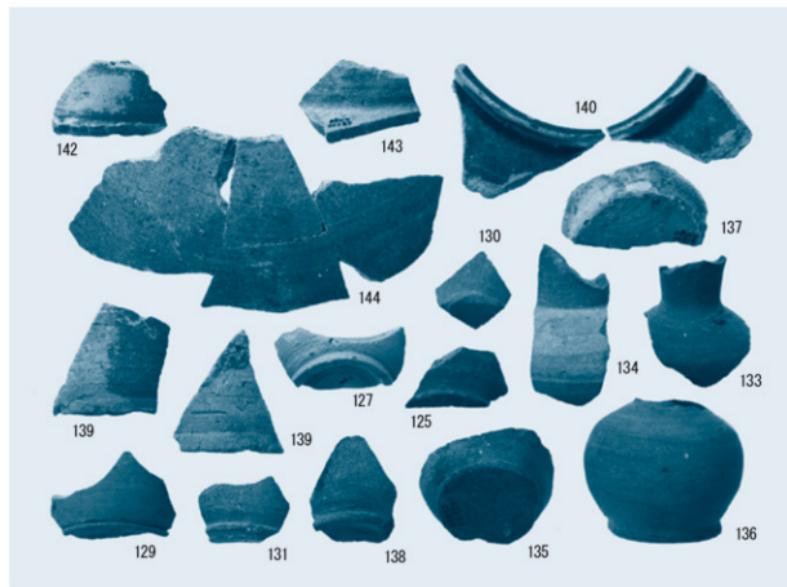
須恵器壺ほか・土師器高杯



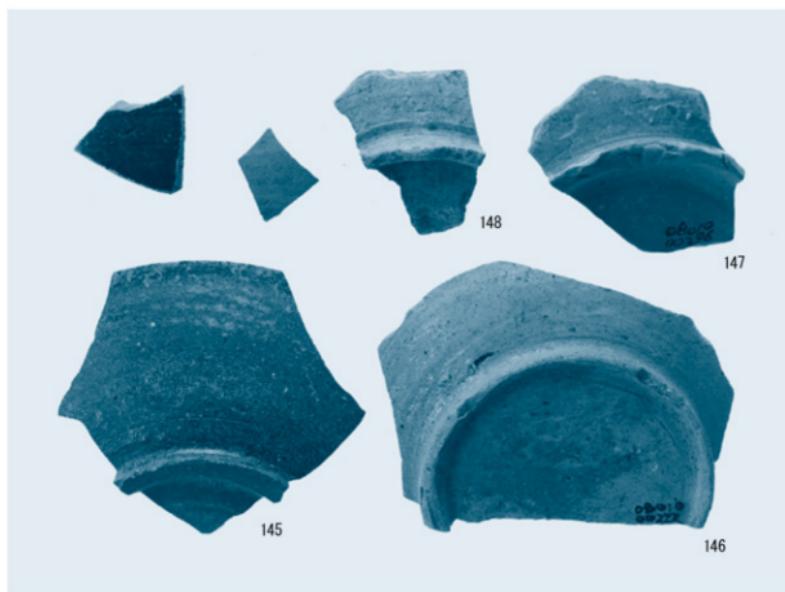
須恵器蓋杯



須恵器壺ほか



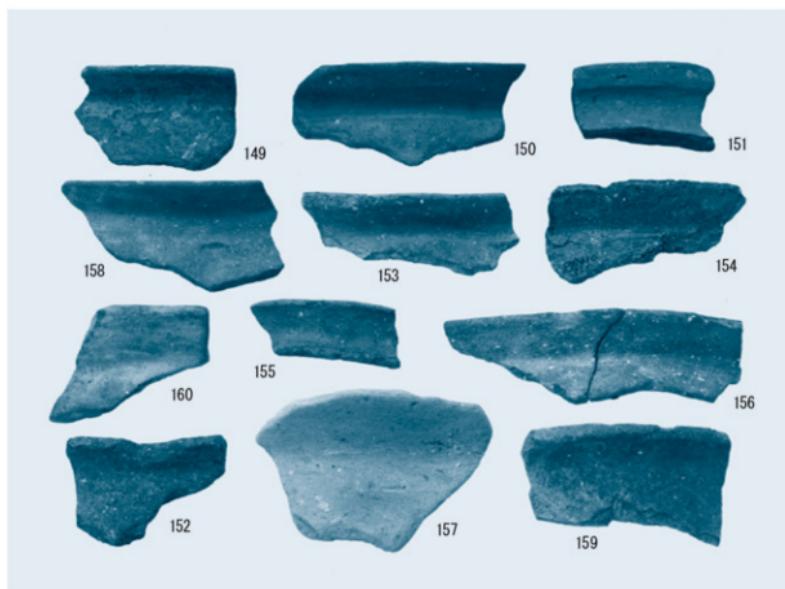
須恵器壺・小壺



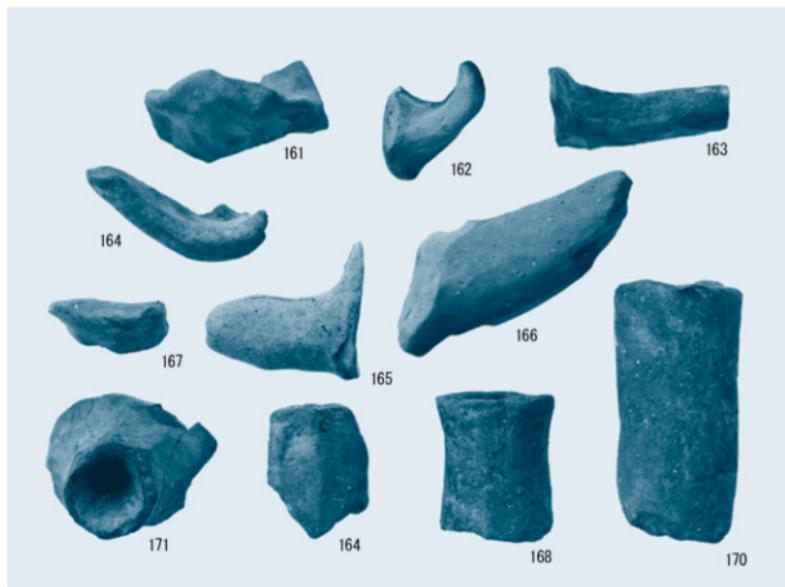
綠釉陶器



常滑燒器



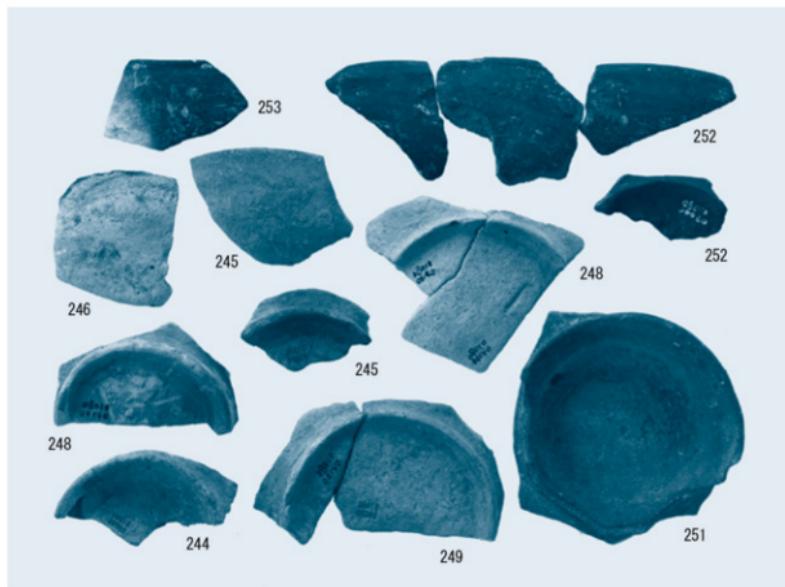
土師器壺



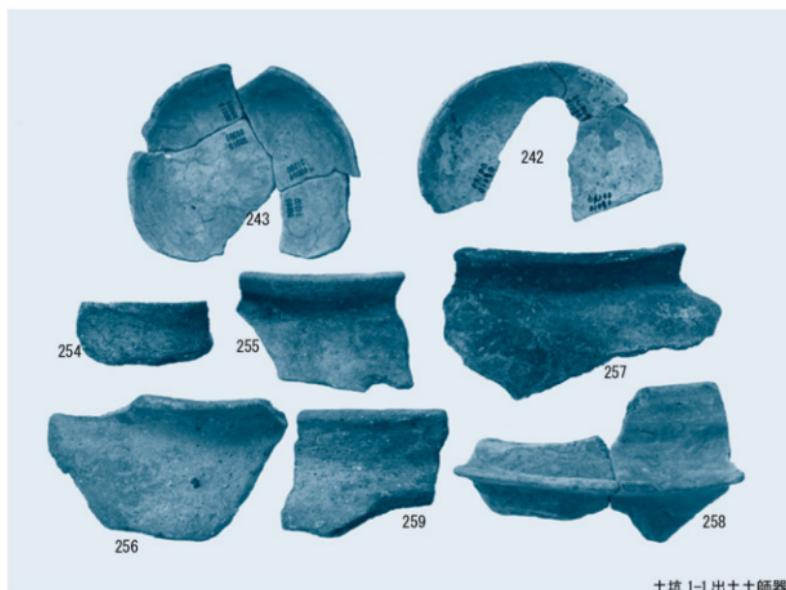
土師器把手・高盤（高杯）



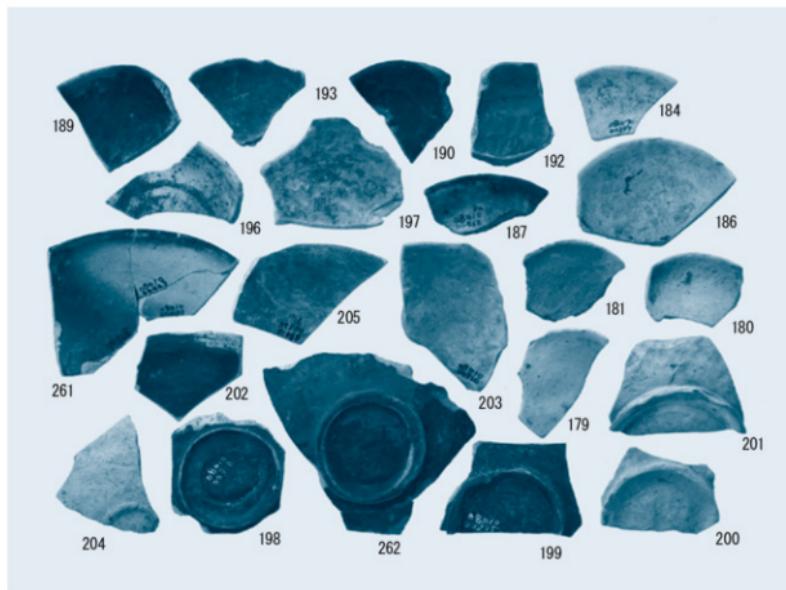
土坑 2-2 出土土器



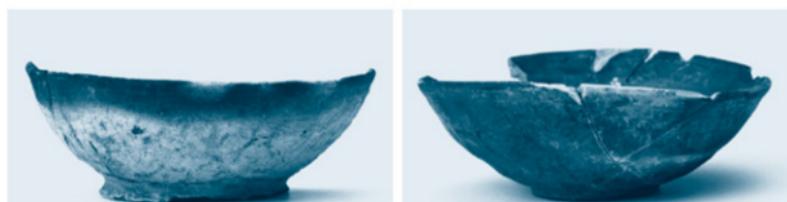
土坑 1-1 出土黒色土器



土坑 1-I 出土土器

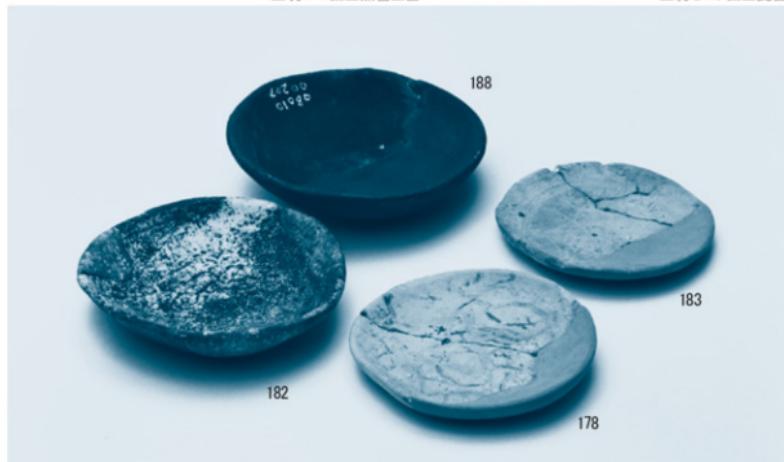


瓦器碗・皿

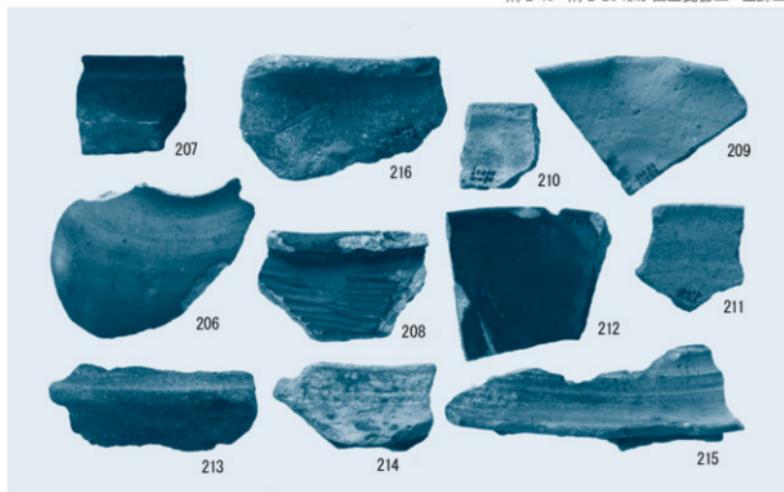


247  
土坑 I-1 出土黑色土器

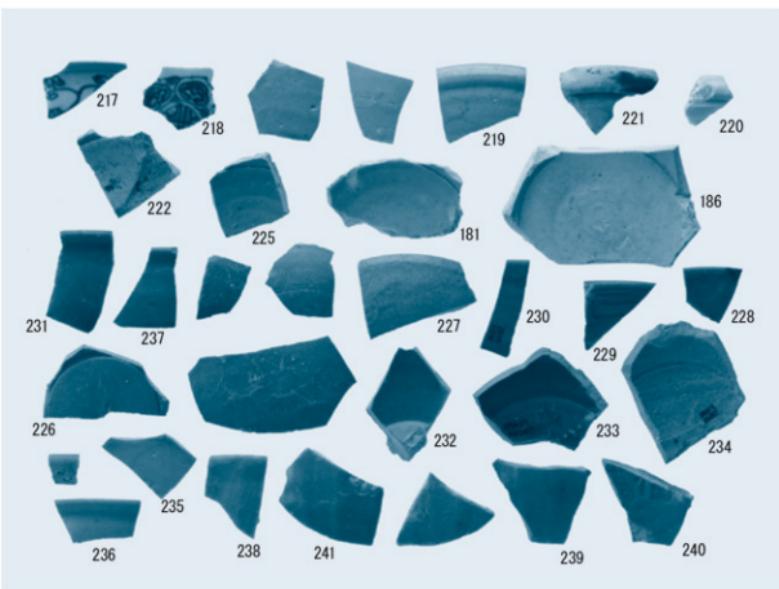
260  
土坑 2-15 出土瓦器



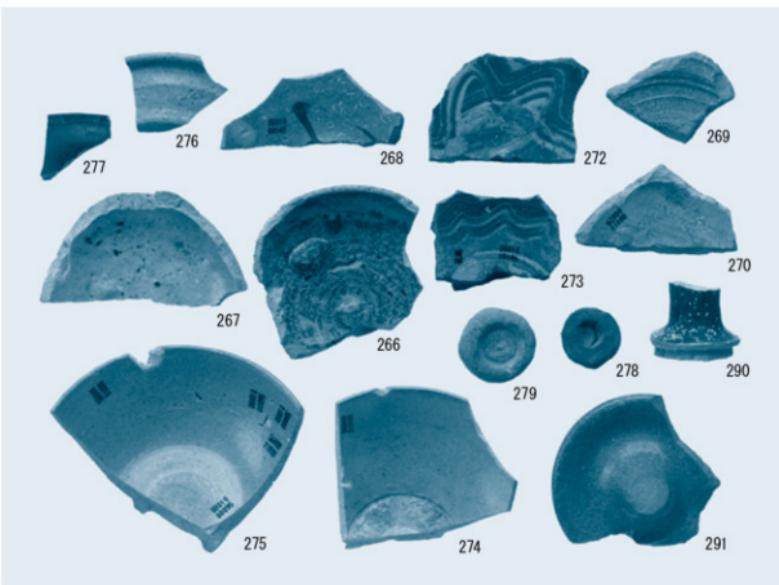
溝 2-16・溝 2-20 ほか出土瓦器皿・土師皿



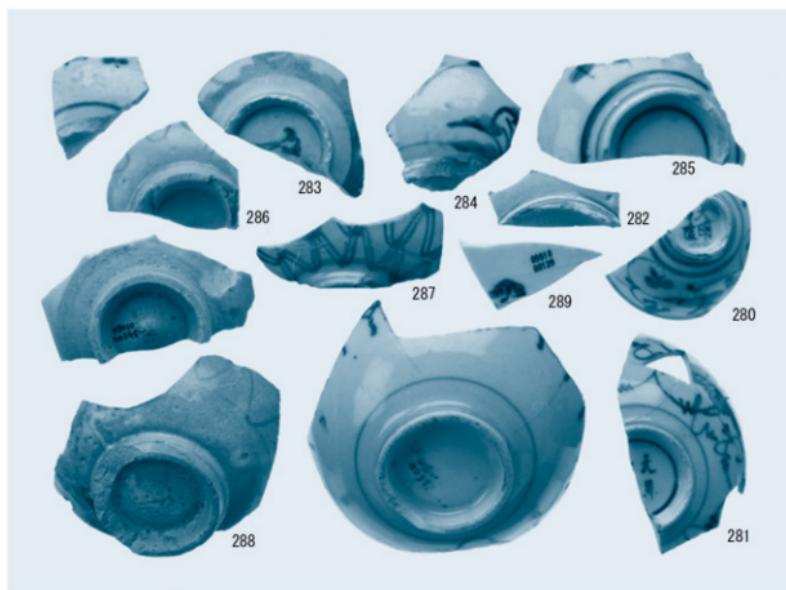
瓦質土器・土師質土器・東播系須恵器



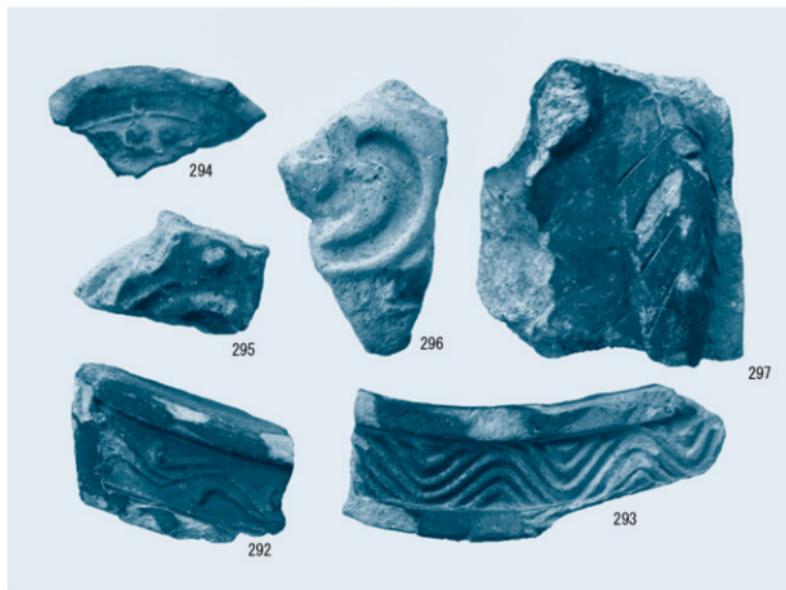
青花·白磁·青磁



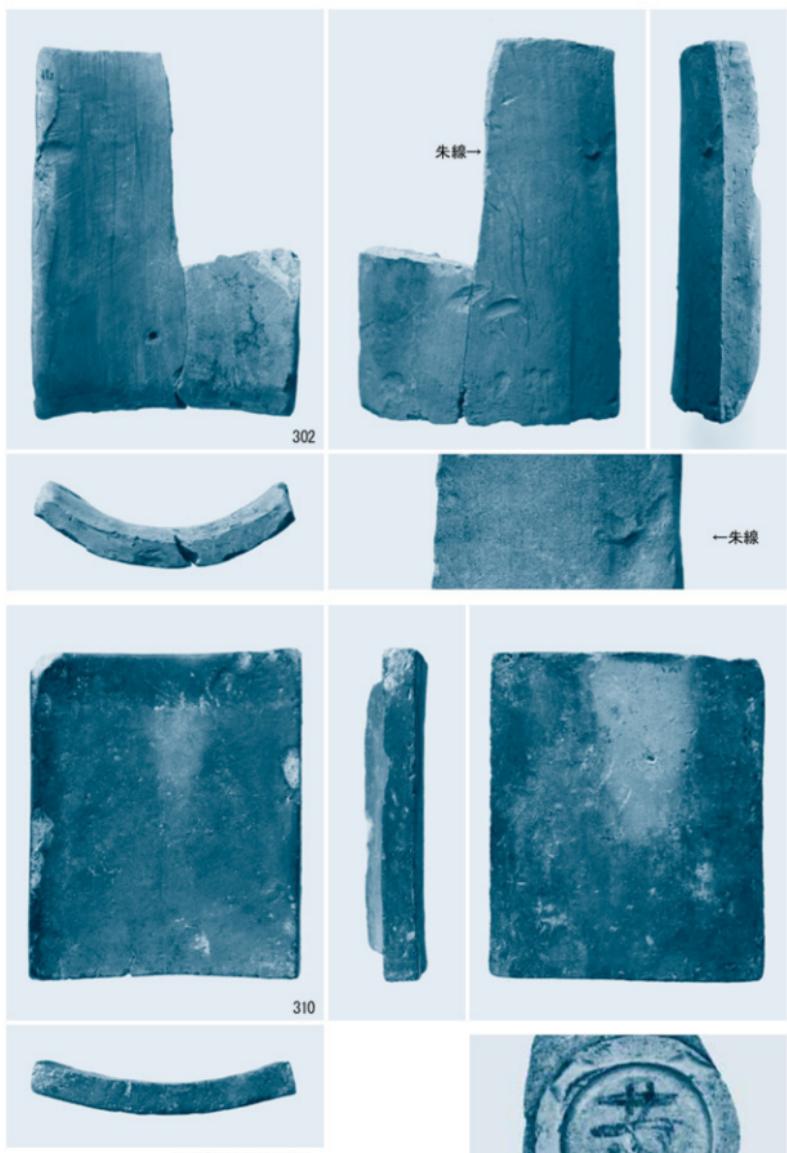
肥前陶器ほか



肥前磁器

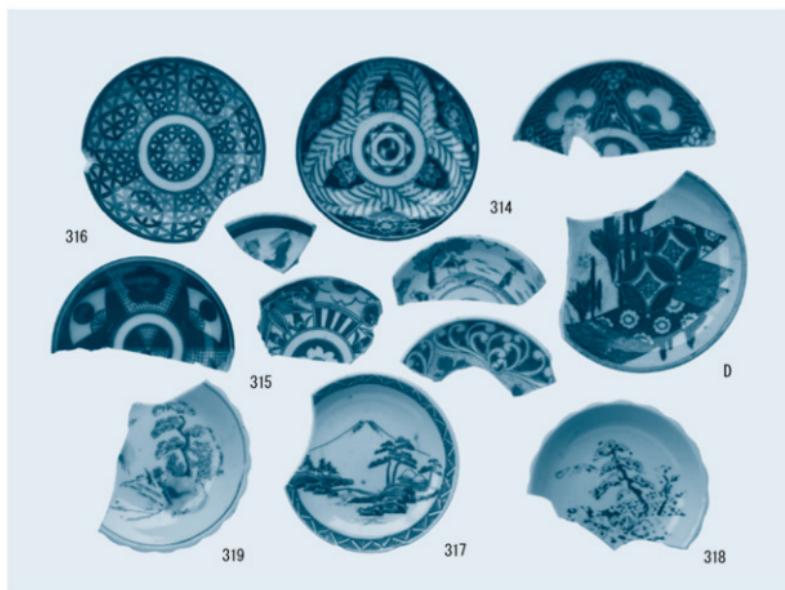


軒瓦・鬼瓦

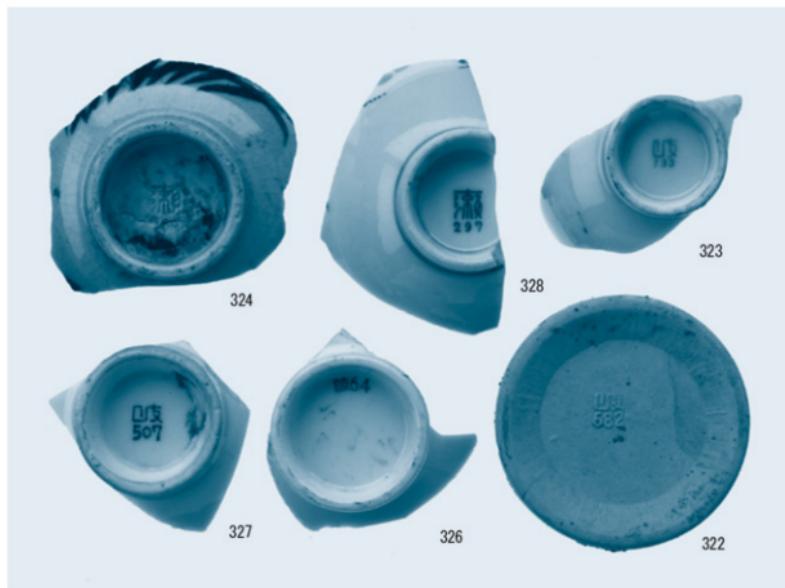


井戸2-2 出土井戸瓦

墨書き「苛」? 土器



印版手皿



統制陶磁器

## 報告書抄録

ふりがな	やまとがわいまいけいせき
書名	大和川今池遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2010-1
編著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351(代表)
発行年月日	平成22年8月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	'				
大和川 今池遺跡	大阪府松原市 天美西二丁目 地内		27217	12	34° 35' 26"	135° 31' 26"	平成20年8月1日 から 平成21年5月31日	5,600 m <sup>2</sup>	今池水みらい センター施設 建設に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大和川今池遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 江戸時代	土坑・溝 建物・土坑・溝 土坑・溝 建物・土坑 井戸・今池堤	須恵器・土師器・瓦・陶磁器	

要約	奈良～平安時代の建物、土坑などを検出した。 江戸時代の木組み井戸を三基確認した。 大和川付け替え（1705年）以降に条里区画を利用して今池堤が形成されたことを確認した。
----	--

大阪府埋蔵文化財調査報告2010-1

## 大和川今池遺跡

---

発 行 大阪府教育委員会  
〒540-8571  
大阪市中央区大手前2丁目  
TEL 06-6941-0351（代表）  
発行日 平成22年8月31日  
印 刷 株)近畿印刷センター  
〒582-0001  
柏原市本郷5丁目6番25号